

特12

17

西塔
武藏坊弁慶一代記

091435-000-4

特12-17

武藏坊弁慶一代記

偉業館

M21

DBN-2348



武藏坊辨慶一代記自序

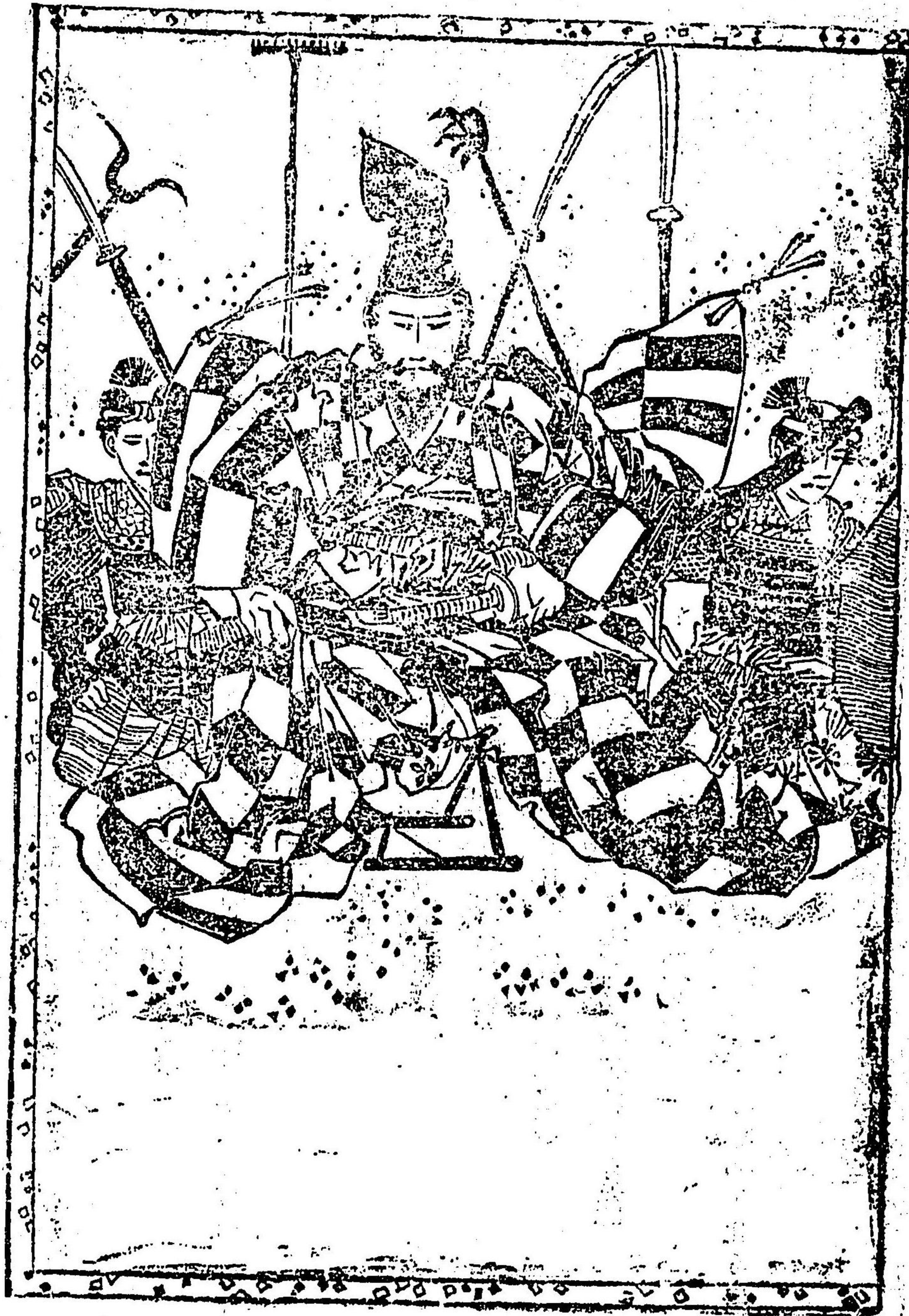
野史神官の近世に刊行するや日一日より盛んにして墨千累萬汗
 牛も管からど然るに其書構虚妄誕にして其實を傳へど或た此懲
 勸の意をさと雖も要するに坊間傳を求め怪異を專にし其趣き新
 奇を務め大に人情輕薄を媒介する者亦居多梨棗の災今日に至り
 漸ると謂ふ可し予辨慶の記を編するに當り間亦廣く諸實錄を徵
 し考証細悉務めて實跡を探り文婉曲を尙ばど法師生涯の悶々判
 官に従ひ忠と盡すの事蹟を詳にす讀者其子が微意の在る所を諒
 せられよかし



明治廿有一年初春

編者

識



武藏坊辨慶一代記目錄

- 武藏坊辨慶生立之事
- 鬼若乱行并剃髮之條
- 辨慶懲海圓并書寫山災燒之事
- 辨慶洛中奪太刀條
- 牛若丸伏辨慶條
- 辨慶義盛都へ上る條
- 義仲最期兼平戰死之條
- 辨慶判官に軍略と陳とる條
- 土佐坊伴書起證之條
- 江田源藏戰死之條
- 赴義經行家西國條
- 河尻合戰忠信弓勢之條
- 辨慶難風を凌いで四國に渡航とる條

武藏坊辨慶一代記

○武藏坊辨慶生立の事

古より僧侶の武門に歸する者其例多かりしが概て豪膽不羈の人にして自ら時勢に感ずる所ありて其道を棄て終に武門に歸するなり辨慶の俗に歸するや其時に當り平家惡逆にして天下の彼家の好自由万民下に歎き悲む時なれば適れ我武士となり平家と亡し天下國家を平治して民の塗炭を救はん事出家に遙か増るべし我出家に在りて經卷を執て庭に投捨珠數おも四邊へ擲り出して北谷と出けるが然にても器量ある大將を尋ね出し其人を主君となして事を擧すんば四海を平治せん事難かるべしと思ひければ先攝州川尻に下り夫より播州に赴き中國を殘らば廻り九州四國にも渡りて普く武者修行したれども心は適ふ者も無れば數年を経て安元元年の頃をひ都より上り京白川の邊りに徘徊して居たりけり此折から九郎殿に鬼一が方に在りて望を既に足ぬるが故に浴中を晝夜の別ちなく往來し給ふに時めく平家の家來ども得色顔にて權柄を振り大道狹しど打過けるを義經の心憎之思ひ打倒し切伏せ坏し給ふ事度々なりければ平家の武士共狼籍者を捕へんとて大勢討て掛りしに恰ら蝶鳥稻妻の如く彼方此方へ飛違へけるにぞコハ天狗出來て數多の人を惱ますとならなど評判有ければ辨慶是を傳へ聞て如何もして此者に近付武勇の程を試さんとて浴中を東西南北縱横十文字足は任せて走り廻り怪人を見れば口論と仕掛けて切殺し又の半死半生にして通りけるよど諸人恐怖て暮過て戸を閉り往來する者絶てあし平家の此事を聞き込み拾遺難しと捕手の役人を出して町々を窺ひけるとぞ

- 辨慶義經再舉を勸むる條
- 義經主從諸所流落條
- 義經主從北國へ没せし事
- 辨慶大津次郎を義經に見參せし條
- 辨慶智越三口關條
- 義經主從詣平泉寺條
- 辨慶安宅讀勘進帖條
- 辨慶如意渡擲杉目條
- 直江津上月搜笈并難風之事
- 龜割山出產之事并義經高館安居條
- 辨慶衣川に敵を欺之條
- 義經主從蝦夷渡海之事并海尊都止る事

武藏坊辨慶一代記目錄終

127

情武藏坊辨慶なる者の其系譜を尋る天津兒屋根命の苗裔中關白道隆卿の後胤熊野の別當辨正が嫡子にて幼名を鬼若と呼れざる者なりけり渠が由緒探る往日二位大納言某卿とては男子數多持給ひしが宿因此然とむる所もや皆世を早ふし玉ひしかば御悲歎の涙乾く時なく此上の神明佛陀の御加護あわらざれば育がたしと熊野三所權現に祈禱を籠玉ひしよ其冥助みや齡長て一人の姫君を設け給ひけり御兩親の浮悦大方ならず最大切に有玉ひしが生長お隨ひ美貌天下無雙美人にて渡せ玉へば彼竹取の翁が得てし赫夜姫比如く傳ゆ御寵愛斜ならずされば月卿集客の公達其佳色も泥み我をくど望玉へども大納言更お許し玉はず然るに右大臣師長卿相に乞望玉ひしよば己事を得ず許諾有と雖も其年は東方は忌事あれば婚儀は明年此事と約定ありけり扱姫君深き宿願有とて五條天神へ御參籠有けるお異の方より俄は暴風吹來り姫君此の身も中と等く忽ち物狂しく成給ひしがば人々大い駭き浮殿へ伴ひ飯り其由言上したる大納言以の外に驚き騒ぎ給ひ典藥頭を召れ醫療手を盡し給へども露許の験もなかりしうば陰陽の頭も占せ給ふは是佛神の御崇なりと申ぬ扱の熊野權現に祈禱して浩る美人を授り奉りながら姫君を未だ三熊野へ參詣させ奉らせ給はざる御咎ならめとどりく申により俄は熊野へ御代參を立られ此度の病氣平癒させ給へば姫を三熊野へ參詣させ神恩を謝し奉らせ諸の法施を奉らんと申させ玉ひしかば權現も納受させ玉ひけん日を追て物狂御平癒させ玉ひける浮面親は首とさらなり師長卿も深く浮悦喜有て則ち姫君を熊野へ參せ奉らんと行粧善美を盡し都を啓

行あるおそ右大臣師長卿よりも百余人の雜式を副られける斯て道中恙なく熊野へ着せ給ひて諸の法樂法施を捧り姫君の本宮の清淨殿にて浮通夜あらせらる然に當山の別當辨正と祈の事有て内陣へ入けるも幽なる燈の影も姫君の容顏艶麗なるを見まいらせさしも行徳高き身に忽ち煩腦心萌し世にも浩る美人の在けるよと恍惚として見惚れ今中々邪念禁じがたく急ぎ下山して大衆を集へ今内陣も參籠し給ふ姫君は何なる方の方の浮息女ととふに一人が曰彼社二位大納言の姫君もて右大臣師長卿の北の方に定まり給へるにそいとぞ答へける別當聞を彼姫右大臣と婚儀の契約は有ながら未だ興入有しといふおあらず我彼姫を懸想し戀慕の念胸を焦せり別當を思はん若大衆達の路次に埋伏して彼姫を奪捕て我も得さす可しと言ふぞ大衆大きも駭き人も人に社よれ一山の別當職たる人の殊も年老て斯る不法の事を仰出さるは天魔此所為あ外道の障り彼姫を奪取ば朝廷此に怒に觸別當は言もさらなり一山の安否如何ならんも知がた志此義の思止り給へど口毎に諫言すれど別當中々諫不從よしや佛敵朝敵とをならばなれ命よのほそも彼姫を奪ては止もし朝廷より征兵を差向られば潔く斬死せんを此と更も變ずまじき體なれば進退の若大衆等ケ程も思詰玉ぬと他も見難を避んとするも年來の好みなきも似たり後日京勢攻來ば一山の衆徒の手並を見せ幾度も追立んと前後の思慮も及ばず我もくど鎧一縮めて得物くどを這は是場よき所に埋伏し今や來ると待あけたり姫の方様の人々は斯る事とはゆめも不知姫を興ふれせ奉り警固して下山する所に思をよらぬ道の傍より若

大衆とを發り立無二無三と從者與丁を擊散し難なく姫を奪ひ別當の坊へかき行て渡されれば別當大い悦び一室を籠置て番人多勢守らせけり姫は從ひし侍雜式は大い騷ぎ恥を知らるの討死志臆病なるは京へ逃取り事の次第を訴へければ二位殿右大臣殿も齒を噬り大きき憤給ひ朝庭へ訴給へば帝も其狼籍を深く惡ませ給ひ別當が罪を糺よとの宣旨を賜り二位大納言右大臣とのを大將とし河内和泉伊賀伊勢の兵七千余騎に之熊野へ發向させしめ給ひ此事熊野へ聞えければ兼て期したる若大衆等千五百騎を催し切部王子山へ出張して一箭射んとぞ待かけたり官軍程なく押寄て頓て箭合し闘を造て攻立けるされども衆徒は切所を前ふ當れば少志を恐れず矢頃を見せまじ散々射しらせ疼む所を撃て下り首よりあつて追落す程官軍若干討れ引退ぬ是より合戦幾度及べども或は勝或は敗して墓々しく勝負もなく日を過したれば斯ての果志と都へ早馬を飛し加勢を乞事頻なり朝庭への群臣商議有る別當の狼籍其罪輕うらずと雖も唯此義に就て熊野一山滅亡せん事權現の冥慮の程も恐わり何卒一旦の罪を宥られ雙方和睦あらまほ志原來彼別當の天津兒屋根命此苗孫中關白道隆の末葉なれば二位大納言此聲となすども愧しうらず右大臣には先立て内へ召れたる平宰相信成の娘無雙國色なれば是を賜らば師長も遺憾なからんうとの詮義有るる此事然るべしとて早馬を飛し熊野へ屯せし二卿此方へ右此旨を渡去大衆の方へも仰有れば大衆の原來好まぬ戦ひなれば綸命辱よし領掌す二卿は不本意お思召ども朝廷の涉商議の上なればとて巳事を得ず承伏有ければ騷動忽ち離る衆徒

も戎衣へ解官軍は上洛しければ別當大い悦び京都へ登て朝恩を謝し改めて二位殿此聲となられければ扱も似合しうらぬ姻婚かなど他事腹を抱て笑ひ謗ども別當は耳もかけず且暮姫の傍を放れず馴睦れけるに姫も意ふの染玉はねども終も唯ならぬ身と成給ひしのは辨正が悦び驚も物なく六十一歳まで初て子を儲る事此嬉しきよ男子あらば佛法の胤を繼せんと出誕此日待れたるも定めし月も産れずしそ一月後れ二月後れ遂も十八月目に出産しなるが殊も大難産よて姫の苦痛も堪らぬ産所の裡も空しと成給ふ別當此由を聞て悲歎限りなく李夫人も別れし漢帝の悲しき楊貴妃を亡志唐玉の歎もいまは我身此上となり老の袂を絞けるが然るも産去者如何なる者ぞと問ふ其形三歳許の小兒の如くもて産れながら能歩を髪は肩此隠る許生奥齒向齒悉くは色飽迄赤しとぞ語りたる別當大い騷ぎ是鬼子なりある者を育なば佛法の仇とや成なん深山の奥海の底も拾よ見を思ひとぞ怒ける茲も山井三位をせし卿の北の方は辨正が妹もて産婦阿ひかひのため熊野へ下り居給ひまが此由を聞て深く憐み弁正を諫給ひたるは出誕の兒異形なるを憎まじ捨給へんどの御憤り理有に似侍れども親となり子と産るも宿世の因縁もて侍べるものを失ひ給へんの後世の涉爲も悪うりなん世も形の媿者もさまく侍り月を越て産れし人を少あらず釋迦無尼佛の摩耶夫人此腹も三年迄妊らせ玉ひ生ながら歩もものを言給ひしとかや夫のまならず老子の八十年が間胎内も有る産れ出と生し髪皆白髪なりしとふもにも替傳へ侍れば十八月をさのみ性ともすかたし捨ると思て妾も賜はりしへ京へ俱して頼り人となして三位殿此世繼どもし若心荒々しくば法師ととなし經の一巻をも讀習せ侍らば母

十 姫君の菩薩彼兒の佛果此縁とも成候はめと播口説歎き給ひければ弁正鬼も角もとて許容しけるにぞ悦びて乳母と俱に京へぞ伴ひ給ひけり

○ 鬼若乱行并剃髪の條

扱も山井殿の北北方の別當が兒を乞得て都へ俱し三位殿も一五一十を語て疎ならず養育ある實を光陰の停ざる事奔箭流水のごとく彼兒早五才となりたるが見余の兒の十二三許お見へけり六歳といふ夏甚重き疱瘡を病て其跡菊目石の如く色さへ黒うなり髪は赤黒く肩過まで生ければさながら鬼の如くなるおぞ誰が號ともなく鬼若とぞ呼さりける三位殿も是程惡さげと思立べしせば思ひさりとて惘果給ひ迎も人ぐましき者も成べしとも思さねば法師にするよ不如とて叡山の學頭西塔の觀慶阿闍梨此方へ登し此兒形こそ醜鬼いへども心の正路なる者にいはは淨徒弟となし經論の端をも辨へさせ萬一心惡黨ならば如何やふお折鑑を加へ給へとひ折鑑の苦お命を失ひ候とも苦めらずいと惘も頼も遣し給へば阿闍梨も不便に思はれ承引有て膝下も置手跡素讀なんど學ばせらるゝと思しよりの智才有て手跡も素讀も余此兒よりは早く上達し三四年が間に學業拔群も進み歷々の僧徒も經論此理解に及びては鬼若も不及と多ければ一山の衆徒驚嘆し人は形の美惡よらざりきと賞美するにぞ師の坊も末頼母しく思はれ益心を入て教導あるよ鬼若漸く勤學も倦よりく兒小法師をあらひ人も通らざる御堂此後の山奥へ伴ひ行腕押首引相撲力持なんと種々の惡遊をなるとに元來天性の怪力あれば誰々も鬼若も勝る者

なければ世も面白き事お思ひ大勢を對人として種々の力競をなし擊倒志踏此れして疵の者少うらず衆徒此事を聞て大に怒り鬼若己が惡遊とるのみならず他人の勤學を坊げ刺へ疵付る事こそ奇怪なれとて觀慶阿闍梨此許へ鬼若が惡行を訴る事引をきらず阿闍梨殆どもてあまし鬼若を度々叱懲志折鑑せられければ師の前にては屈伏の体をなし其吉來りし者を敵におとく怨怒り矢庭に其者の坊へ走り込門戸障子比嫌ひなく拳を固て散々も擊破り或は支ゆる者も打擲し猥籍法に過たりまかば衆徒益怒り憤り鬼若を擊倒さんとそれとも彼が力量に及ぶ者なく却て辛き目もあひければ唯對手もな成ぞとて路次もて行進ても知ず顔にて脇道へさりかわし疫病神の如く思惡ける鬼若また是を胸惡を思ひ端なま行進時は取て抑へ先日は逢まらせしに見ぬ形も脇道へ避給ひし何道恨もてしやなんと詛り問果は散々も擊のたまければ徒集會し西塔此鬼若こそ日を積て惡行増長し言語同斷の舉動譬るお物なし彼の熊野此別當が子にて養父は山井殿祖父の二位大納言殿師匠は當山の學頭にて人並よりも寄有者あれば不見顔して咎ざるよ今い如何なる不法をなさんと量ぐたし所詮衆徒一黨より觀慶阿闍梨に訴へ鬼若を追出の左なくば禁獄せんは如何おと識したり衆徒皆忌憎事なれば一議も及ばず是社願所なりと列坐承伏なしけよるより即刻連印の訴狀を認て阿闍梨の許へさし出しければ大きに氣毒お思ひれ衆徒をまぬき種々と謝言し彼者比狼籍の此方もとてあましはされども山井殿より惘の御意を添られければ追出さん如何と今日迄黙止し此上は禁足付もし用ひずば其時追出し候らん夫迄の愚

老見赦され候へど仰するよぞ乘徒を領承まで引とりけり觀慶阿邪梨鬼若も彼訴狀を見せ散々に叱り愧しめ以後の禁足たるべしとて一間所を押籠取て出し給はざりしうば鬼若大い困果是皆衆徒原が所爲なれば如何もして警を報んと一夜潜み一間を忍び出堀を越て外此方へ出手ころの枯木を引抜坊々の門戸を撃碎き踐破り狂ひければ大衆大い驚き怖れ須波鬼若たが荒出し予近付て撃るゝなど唯逃隠て爲が儘打捨ちき離出合ものなければ鬼若思まゝに狂ひ回りあら心地よやとて已が坊へ飯しが今は師匠を此山より置給ひしと思ひ美作此律師といふ人の湯殿お走いり有合剃刀どつて手づから頭剃回志傍り掛たる古衣着して水鏡の影を寫し見天晴我ながらよき法師よのゝる姿となりて鬼若に之の叶まじ戒名を何と云まじと思ひけるが屹と心昔此山も武藏といへる荒法師ありを放逸に舉動なるが六十一歳の天壽を保ち端坐合掌して大往生の素懷を遂しを聞吾を佛縁なれば社斯法師とは就たんめり彼武藏が跡を追て武藏坊と名乗戒名は父辨正の辨の字と師匠觀慶の慶の字を用て辨慶とある名乗まじと之別に戒師も頼は社已と已が戒師となり生年十七歳めて住馴し西塔を立出小原の別所とて山法師の住捨たる荒坊は誰とむるどいなくて住居せり觀慶阿邪梨風は此由聞給へどと彼が出行し一山の幸ひなりとて不知顔よぞ乘置給ひけり

○辨慶徳海圓并書寫山災燒之事

鬼若は形許出家入道して躬辨慶と名乗意の儘に舉動す小原の別所へ住けるが萬人も憎まれたれば誰信者もなま唯蠅をたる峯の嵐涓々たる溪の水音の事問貌も聞ゆるれなれば幾程をなく住飽いてさらば諸國此難山切所名所舊跡を經歷せんと小原を立て津國河尻に下り難波瀉兵庫の島など通りすぎ海船便を乞て阿波へ渡海し燒山鶴が峯を順拜し讚岐路へあり志波の道場を拜み夫より讚岐一國を見廻り土佐をも經歷して亦も阿波へ飯り是より播州へ渡り書寫山へ參詣し既も下向せんとせしが時節五月の末にて暑き難難ければ唱や一夏籠ばやと學頭の坊へ行て案内し人々物ゆさんと叫りければ書寫法師立出て何者ぞと見るよ長ハ七尺餘色飽みて黒を眼のま爛々と光り顔殊々婉惡にて頭髪長く伸てさも悪さげなる体なれば是は何國此修行者ぞを問辨慶答て叡山の者お候と言に叡山は何此坊より來られ候やと問西塔の觀慶阿邪梨の方かと答ふ扱ハ學頭の御内の人の俗姓は奈何よと問辨慶腹を立小而倒なる問様りなどて一際聲を屬まし天津兒屋根の苗裔中關白道隆此末葉熊野此別當辨正が男武藏坊辨慶とやを最噫呼がましくぞ名乗たる大衆等袖を曳聞及志荒者よ悪くせば癖事有んとて是より悩もてなし修行の坊へ伴ひたり弁慶をせむらひさも有なんとて是より如何も穩便も勤行しければ大衆等感賞し入の形も因ぬ物よとさゝめきなり程なく一夏を過しかば辨慶は亦も諸國を見廻ばやと思へどと

末だ残暑嚴まければ一日二日と日を送りて七月下旬迄書寫に居るが今は暇すさんとして學頭此坊へ行し折節大衆弟兒原を對人として酒宴を促し唱舞舞舞此最中なれば行くも詮なしと立戻し一問なる處の有けるが扱を涼しかなる處哉とて立入見る涼風快く吹入ければいて一睡せばやとて其儘横になり雷此如き臥息して晝寢をしたりけり茲書寫一山の惡僧又信濃坊海圓といふ者あり彼酒宴の中に交て殊に乱酔してけるが辨慶が雷の如き對を聞て何者やと播立て一問入て見るに辨慶にて有れば海圓腹を立此法師誰より誦され此處は寝けるぞ吾も多くの修行者を見たれどと深が如き面惡氣なる者を見ずよとく日本一の恥の與へ寺中を追出しくれんずと視取を來り墨濃すり流し弁慶が面へ足駄と書亦片類へ見法師が履物也と徒書し扱見若大衆を大勢呼來り列位に與ある者見せん是見給へどと辨慶が腕を指さしければ見大衆等腹を抱へ板壁を敲て撞と笑けり此物音又辨慶目を覺し扱の惡き處晝寢せし故なめとぞ起出衣刷ひ學頭の坊へ行けるよ折しも御堂大集三百人許集會して有けるが弁慶が顔を見て思はず吹出し腹筋よつと笑ひとよとくよ辨慶は顔に徒書せられしを不知は何事を笑にやと思とも人の笑に我れみ笑はぬと奈何と俱み笑顔して居る程大衆彌兼て辨慶が面を見ては笑入ながたては腹を抱へ笑倒れぬ三百人許一同よわらふ事なれば唯問の聲もどぞ怪しめられ辨慶の扱は我事を笑なりと心付ければ怒も居丈高になり人々は何う左程可笑ぞ仔細を語候へ借聞なんと袖を樂上罵ければ學頭は須波此法師が氣色こころ變たれ何さま事や及ばめと思ひ大衆を制し否

々和法師の事ならず先刻より可笑ことを語出して笑候なりと謝ければ辨慶の不肖くは席を立口の中へ呟る會釋をなま御堂を下り但馬の阿闍梨といふ人の坊へ行んと立出し道あて人逢度面をながれて笑ぬ者なければ怪と思て水鏡を寫し見れば笑を理り墨黒は落書して有りれば奮然として怒氣心頭より發り手早く面を洗雪ぎ扱の晝寢せし間に斯狼籍を爲られたりと覺ゆ生涯の恥辱此上やある此儘は捨置は未だいまて人此咲草となるのみか山門此名先祖の名をさへ汚しなんわら腹立や其者此腕踐折すば飽足すと猛虎此如く奮激し矢庭お學頭の坊此納処へ走入有合唐櫃一甲取出し蓋破破之褐布の直垂を取出して着し黒皮威の腹巻した九十余日剃頭は揉烏帽子打冠鉢巻しつかど縮て八角削たる一丈許此楞の棒の有けるを追執を傍堂前へ躍出沓履ながら椽上へ飛揚り一双の鏡のおどく大眼を瞋らし屹と白眼でぞ衝りたる群衆の大衆是を見て大いに駭き互に顔を見合て一言を發する者なく音を靜て危ぶむけり弁慶鐘の如き聲を怒ら志此衆の中よ吾面へ徒書せし者ぞわらめ疾是へ出よ逃隠る者ならば學頭始當坐の法師原習我仇なりと罵りけり學頭大怖ながら曰和法師の憤り理ながら其徒せ志者此中よ在や否や末だ治定せざる貴人高位此坐し給ふ御堂へ沓も脱て踏揚の非禮なり先足を浄を用わらば静よ申され候へどぞ咎をける弁慶彌怒り椽の上へ沓履ながら上るさへ非禮なりと咎給ふは何の遺恨有てか此法師が面を足駄にしては履れらるぞと詰問學頭も此言に差詰り頭を掻て迷惑有にぞ信濃房海圓堪兼て何と進出衣の袖樂上弁慶をはたと白眼先刻より學頭の信房が穩便の沙汰

を以て汝が無禮を強も咎給はず利害を説給ふも奇怪の舉動言語道断此癖者うな汝等が如き田舎法師の面足駄よして履しとて何事の有ん若我落書しさらば何とのするぞ聲高に罵ければ弁慶大いに怒汝が書たらば汝が腕曳拔ずば飽足む倡來れと棒取なをし立かゝる海圓が朋友の若法師原七八人立上り彼程の法師に海圓が手を下と迄を有まじ様より下へ蹴落し首の骨踏折て得させんと各々衣の袖を捲上勢ひ込て競りゝる弁慶は面倒也や棒取伸て横に難はらふ金剛力に撃て何か溜べき一同に椽より下へ墜落され片息もなつて蠢きたり海圓不堪立上り邊を見れども手頃の杖もなかりしかば末坐の炭櫃も櫛を打切押くべて湯を焚たるあり是究竟と中も長き燃杭追取其處引な法師とて撃てりゝる堂上は所狭しとや思けむ俱に御堂を飛下り詰つ開つ撃合しが早足の辨慶つと身をよせ猿臂を伸て海圓が肩口掴み左手まで股を掴添目より高くさま上て講堂の廣場の方へ歩み行衆徒等海圓が身に過有ん事を怖れ口毎に修行者御免候へ其者の天性酒狂の癖あり修行者の面へ徒せしと酒氣も乗じての戯なれば曲る宥給へと不謝よける辨慶冷笑し日おろの御寺法よは修行者此酒狂の大酒より制し衆徒の酒狂は修行者誠とよ承ければ後來の見懲の爲斯ころせめと言さま一振ふはそ一丈二三尺と有んずると見えたる講堂の屋根へ投上けり海圓の尙と燃杭をば放りやらせて持たりしが講堂の軒へ投上られ更も生たる心地なき燃杭をも屋根も棄置俵を刺ぐみどく轉びて南面の敷石の上へ倒と落を辨慶尙憎しとや思ひん走りよりて弓手の小腕踏折馬手の肋骨二枚損じより然て希有の珍事ころ出来り海圓が捨

置と燃杭山風に燃立て講堂は極も燃付焰々と燃上るもろ太衆等大いに驚き須波出火よと周章騒ぎ我打消んぞ舞うら風益々強く吹出し早黒煙八方も充満飛巡り多寶塔文殊堂五重塔などどへ火移りさしも性空上人の建立有し靈場一時に火と成黒煙日光を覆ひ更に暗夜のごとくなれば辨慶は舌打鳴しと悦び煙も紛て立退京都さして馳ぞ登ける然るも火勢熾も成て書寫山の堂塔五十四箇所僧房三百余宇一時も灰燼と成まは是非もなき次第也なり武藏坊足も任て道を急ぎ一晝一夜走に走て京都へ登りたるが其日都の暴雨降しかも風烈しく吹て人の往來も稀なりければ辨慶更夜も恠のらぬ聲しと浴中を走回り院の築地北上へ搔上りあら淺猿やさしも性空上人の建立有し書寫此靈場衆徒が悪行より火災發て堂塔僧坊一字を不殘一時の煙と成ぬると呼はり遂に行方しらず成よける院の傍所よは是を聞召是の斜ならぬ珍事な急ぎ實否を見届よと急馬を立給ひしに果して炎焼一定よと歸り奏しければ院大ひも驚給ひ急ぎ衆徒此學頭を召登され其顛末を糾問去給ふにぞ學頭隠とべきやふなく海圓が酒狂おそ修行者の面へ落書せまより口論起り海圓が捨置し燃杭より炎焼せし趣き詳言上しければ院殊更も怒らせ給ひ海圓社佛法王法の敵なり急ぎ召捕よとて津國の住人昆陽野太郎も宣旨を賜りけり昆陽野太郎承り即刻百余人の逞兵を従ぐへ播州へ馳下り腦み臥たる海圓汝召捕張興お乗て馳登り史の廳の白砂へ曳居已一人此所爲か同意の者有かを推問と海圓心も思やふ書寫山不殘炎焼せま上りよも助命せられまじ迎も罪せらるゝならば日來我も愛かりし者をも連坐おせんとて則同意の者十一

人候とて悉く其名を白狀しけるにより官人亦是をも召捕たる十一人此衆徒大いお駭き悲しむ毛頭海圓と同意仕らざるよし種々陳謝及ぶにぞ亦圓海を嚴しく拷問するよさうぬだに辨慶が爲に半死半生の海圓苦痛に堪かね終に責殺されけるが息絶るまでと同意の者を殺さず吾一人を責殺さば一念必らず惡鬼となり朝家お仇せんと叫罵りける間彌同意疑ひなしとて彼十一人も悉く連坐の刑に行れけるの哀なりし次第なりけり辨慶は是を聞て潜る舌を出して悦び手を下さず仇を報せし事よと笑ひけるとぞ

○辨慶洛中奪太刀條

武藏坊辨慶は僧として僧の行狀をせず亦武家またよりて仕官もせず唯意の儘お舉動たるが付々心よ思たるの古より大丈夫は好所此物を千の數を揃て持と謂り今も奥州の秀衡は名馬千疋鎧千領を貯へ松浦大夫爲次の胡箴千腰弓千張を持ちと聞吾は只鎧一領太刀一振長刀一枝なりて外に貯める物なし何卒人の佩たる太刀なりとぞ千振奪取て吾重寶よせばやと世お希なる望を獲し夜毎郷の町々を横行して太刀帶たる者よ逢ば有無成言せず奪ふ程に夜毎に五振七振取ざる夜おそなかりけり然ども誰有て敵する者なく其頃洛中の風説ふに此頃長一丈許なる法師徘徊して人の太刀を奪事連夜なり何さま天狗なんどの所爲ならめと臆病なる輩は昏るを限り他行するを恐れ腕立を好む者の試見とて却て辛き目に逢太刀を奪る者數しらず彌變化の所爲とぞ言觸しける斯る程に辨慶の奪溜たる太刀を奪見るに既九百九十九振有りたる今

一振なり此度は並々の太刀よは目をかたず奈何おもよき太刀を奪ひて望を達せんと五條の天神へ參詣し天晴願くは今一振此善太刀帶し男お逢せ給へと祈念し築地の蔭よ身を隠し參詣此人の太刀に目を付るよ折しと八月十七日にて朗月の影晝比如く明りければ隈々迄見ゆれども心よ合ふ太刀帶去男も無武藏坊殆ど退屈し欠伸して有けるよ其夜を既も明方近くなる頃堀川此方より笛面白く吹鳴して來る人あり如何なる人よやと待りけり見るよ未だ若き人の人品優美なるが白き直垂によき腹巻をて精好の大口をはき黄金造の太刀此心も詞も及ばぬ許成を帶たり武藏坊争か悦びさらん宿願成就の期來れりと顯れ出そ二王立お衝立て聲をかけ荒優の湯方や曉おあよびいよ何方へ御出候ぞ音よと聞給はん是は頃日洛中を徘徊しそ人の太刀を奪ひ候法師よいよ見せせば少年は善太刀を帶給へりいよ會參らせま不肖の我お賜を御通候へ其反報よは行給ふ方迄送り參らせんとぞやたる此少年は是別人ならず牛若君よて在たるが莞爾と笑はせ給ひ實此頃さる者有と聞たるが扱は和法師が事なりけるか懇望此うへは太刀を得させ度は有と是は重代の秘藏に備前友成が白日潔濟しを鍛し名刀なれば吾手より與ふる事能はず欲くば倚り取よとぞ仰ける辨慶えせしらひさらば賜らんとぞつと寄を奪取んとするよは曹子は後さまに三間許飛しさり太刀抜放して寄ば斬んと待り給ふ辨慶勃然と怒を發まいらざる小冠者が腕立かな假令天魔鬼神なりとも今海内よ我よ敬せん者こそ覺へぬいて一掴としてくれんと大手を廣てりけ向へとと奇妙不測此秘術を究給ふ身持なれば一点の透間なく手を出さんやうなければ心焦燥て



太刀拔廻し曳やと喚て切てりゝるは曹子の事とをし給はず右請左拂にあやどり上下前後は斬立
 給へば流石此辨慶も支りねて大に駭き此見ころ人間ならず化粧の者か變化の徒かさばれ何程の
 ほど有んと太刀取直し精神を勵まし汗を流して闘とも御曹子が神變不思議の秘術は碎かれ終
 に斬立られて二三段引退く得たりや應と御曹子眞向目がけ斬のけ給ふ辨慶も目早く是を見て拂
 切は斬上しは築地の軒桁に圖破と切込たり拔んと一曳ひく所を御曹子躍上つて辨慶が眉間を強
 く蹴る九尺許の築地の上へ飛上り玉ぬ辨慶の急所を強く蹴られて目眩き太刀を放して尻居も倒
 とたそれなり御曹子は辨慶が太刀を奪ひ莞爾として築地の上へ衝立給ひ如何に賊法師我太刀を
 奪までこそなけれ汝が太刀を奪るゝは不覺ならずや目今以後心を改めかゝる狼籍をなすまじ太
 刀を取え行べきなれども程は古太刀欲さお取たりと思れんもうしろめたければ返し取するぞ
 とく築地の棟に推曲て投返し給ふ辨慶無念は齒がみをなせと詮方なくよしく今宵は仕損ず
 とを重ては奪ての置じと眩き辨慶掣直し鞘に納る行過る御曹子は築地の上より降りしめて笑ひ
 を給ひひらりと飛下り給ふ辨慶尻目よ見て急よ太刀拔りさし祈奉らんとそれは亦後さまも築地
 へ飛上給ふ其跡燕のおとくなれば辨慶驚歎しゝる早業凡人の可爲にあらず強て拒敵せば如何
 なる事にか逢ん命は有ん程よとて後を見ずしと逃駆けり是や辨慶の生涯は逃初なりけりと後
 よの咲草の種となり玉ひたり

○牛若丸伏辨慶條

柔よく剛を制し弱よを強を制するならし武藏坊辨慶の海内よわが右に出る勇者なしと思居たりしに思の外曹子の奇術あり我を以て逃歸しが心懸々と志て樂まず我道大願を發し既に満願此期に逃歸しは我ながら如何なる心よ有けん望りける太刀を得ずんばりの小冠者よ討れて死んするものをも後悔積を瞞ども反らず再度彼男よ會ひやと夜々浴中を走巡て尋れども絶て逢事なければ大い望を失ひ此上は佛力を頼んものと清水の觀世音へ參詣しなるよ折しも九月十八日の事なれば資賤群集きて讀經の聲喧志辨慶と心中よぬんじけるはるも觀音の起慈よの身を卅二身に變じて十方衆生の願を滿ん一度我を祈ん者無量の福德を授ん若此誓ひ空しくは祇園精舎の雲よ交り永正覺をとらじと誓給ふときよされども辨慶は福德も欲めらず唯彼少年よ逢せ帶たる太刀を奪取せ給へど念じたる然るに正面の格子の際此麗しき聲して法華經此二の卷の半を讀誦する人あり其音清雅よして然も開合五音衆よ勝れ群集の人の喧しきよを混せよ甚殊勝よと聞ける辨慶思ひし耳を傾け稍聞入る頭を低しくがよく聞ば去し夜此少年の聲よ彷彿たり夫があらぬうち心とどなど心焦燥て近付見ばやと持たる長刀を正面の長押の上よさし置大勢若たる中を寺中此役人なり死させ給へど膝とも足ともいはばころふと分く彼讀經して居たる人此後よ抜侍て親ひけり諸人燈の影よ透し見てあらいかめし法師此丈の高きよと申ける辨慶耳よと掛り經よむ人の体を見るよ薄衣深く被きたれば更に男女の分をしら思煩て太刀の端よ脇下をしよの突てそよ身見り女か是は寺中の役人そ其處退し

へどせと何の答もせし尙高やりに讀誦しけりされは社凡俗ならず先夜の男がさんなれども強く衝ければ彼人衣を取て弁慶をいたと白眼たり是則牛若君よて在けり扱仰けるは是の狼籍なる乞食法師のな汝がみとき者は人並なみよ堂へ上らずとも樹石上にて念じ奉れ御佛此大慈悲には捨給ひじ人々多し座在處へ見苦き姿よて推參する條甚尾龍なり疾出よと叱り給ふ辨慶阿々とわらひ情なの人の仰のな既に先夜對面仕ていもれを移身に尋會めど幾夜用意を勞ししぞ倡俱に讀誦せんどの傍へ寄むすと座して同音よこ讀たりけり元來西塔よて育し辨慶なれば句切息繼功者を得たり曹子は鞍馬に成長給へば申もさら也辨慶が乙の聲を曹子此甲の音俱み相和し法華經の二の卷半終ばかり讀誦あるに群衆の老若あら面白や尊やと嗚を證て聞入ば行人も數珠此音を止て此讀經の聲よ聞入心耳を傾ける程に今迄喧しき院内忽ちひつそと静り小夜の松風音よへて心詞も及ばぬ迄殊勝よぞ聞えたる程なく二の卷終りければ曹子は衣打被きつと坐を立て出給ふ辨慶を後じと同くかひ起て長押の長刀追取走出しは早姿を見失ひ其所の此所よと尋るうち遙此彼方に例の笛の音聞えたり扱社彼若者よと音をしるべよ慕ひ行は曹子を心中よの渠を聲伏て郎黨よせばやと思召れば急んとも給はて悠々然とし葉調吹ららし五條此方へ迎給ふ其大勇にや恐らん亦是笛の音よや聞ほれけん武藏坊急に擊をうへらず後邊よ從ひて行どいなしよ條の橋邊迄來りたるかさ此よ何時を期すべきと仰前立塞り扱も心剛なる少年の先夜は空しく物別したれども大丈夫の望めけし太刀是非賜ん

夜毎に尋巡り稍く今宵見参入参らせぬ程に執心する其太刀今の得させ給へども申けるは
 曹子笑わせ給ひ先夜の手並も懲ず執心深くも來れる者かな幾度も我手よりの與へまじきぞ欲
 くば取よと宣ふも然らば打物業にて賜らんと長刀柄長く追取伸唯一討と懸てゐるは曹子の
 木履を志ながら薄衣脱捨太刀拔翳きて對合せ丁々はははしと打合給ぬ弁慶の一期の大事此時なり
 と眼を賦り透を狙ひ秘術を振ひ闘どもは曹子は事とをし給はず或はこゝ入長刀に飛乗或は橋の
 欄干に躍上りなんどして小鳥の戯るゝ如く舉動給へば辨慶の御姿を定かに見とむる事能はず唯
 醉るがぶとくにて幾度か長刀を欄干橋桁に切込或は空を切のみよし今精神殆ど疲れ果手元
 支度路も乱るゝ所を得たりやと飛りゝり太刀のむねをとりて雙腕丁と撃給へばさしもの鉄腕脾
 れ痛み思はず長刀取落し俯首も倒るゝを御曹子飛かへつて背の上に打跨り如何や法師今は斬
 ども助るとも吾随意也心を改め我郎黨なるや否やと曰ば弁慶頭ををたか扱を御身は
 如何なる人の公達よて斯迄武術も長じ給へるぞや先御名を名乗給へども申よ御曹子弁慶を引起
 し給ひ人に泄さぬ我名ながら申聞ん吾は清和天皇の後胤左馬頭義朝が末子幼名は牛若丸今此名
 は源九郎義經と申なりと名乗給ふ弁慶大きに駭き扱は歴然たる源家此公達よて渡せ給ふりや姓
 と申し御器量と申天晴の大將軍我主君と頼奉ん不足なし某は熊野の辨正が男敵岳の西塔よ
 て成長武藏坊辨慶と申者よていと申ぬ御曹子御喜悅限なき我潜み大義を思立よき郎黨を需んと
 夜毎に浴中を徘徊して人の剛膽を試見るに未だ汝がぶととき勇士を見ず自今以後は三世の主従ぞ

と固く契約し給ひ弁慶と俱に山科へぞ販り給ひける

○辨慶義盛都へ上る條

壽永三年正月十六日關東へ征兵不破の關を打立て進發ゆる追手此大將浦冠者範賴公は三万五
 千餘騎を引分近江路を浩りて攻上り搦手の大將源九郎義經公は二万五千余騎にて伊勢路を越發
 向ありけるが義經公密に弁慶義盛兩人を招て仰ぐるは義仲官位昇進に心願諸勢を國へ販し都に
 在陣する勢小勢ならん是を諸方へ配當し之防禦せんとするよし是甚だ軍事も疎なり夫兵法も
 も十なる時は是を圍む五なる時は是を攻倍する時は是を分つ齊時は能戰ふ然る時は是を去
 と謂り此度の合戦味方此利運疑なしさりながら義仲敗戦せば主上法皇を崩奉り平家と合兵を
 るる亦は嶮難の地も相籠らば輒く征し難し汝等忍て都へ登り院中へ紛入て義仲も院を奪奉ら
 んとせば是を防ぎ候へども命じ給ふ兩士承はり二十余人此勇兵を隨へ各々身を種々も扮裝三人
 五人都へ忍上りたる是より義仲が軍旗謀略日々も間者を以て大將の許へ通じければ義經公暗に
 敵の機密を探知玉ひ軍勝の謀を定て伊賀國新居川を推渡り長田の里も浩て射手社伏拜を笠置
 寺を過光明山を左手に見て城州宇治郡平等院の北なる富家此渡り若陣あり斥候を出して敵の動
 靜を窺はしめ玉ふ宇治橋の板を切破り向此岸には播磨を衝以へ矢倉を設け究竟の射人を揃て
 待り水底には亂杭嚴重打大綱小綱も逆茂木を繋く引渡し候と言上り義經公聞給ひ斯許此備
 い有なんされども敵軍の跡を見るよ一千騎にはよを足し治承此軍も藤原亦太郎三百餘騎にて此

川を渡したるよわらずや忠綱とて鬼神よてのよもあらじ疾渡して敵を蹴散よと下知し玉へば生
 死しらす北坂東武者計りは少も猶豫べき我後じと川岸は馳出て水面を臨見る頃には陸月廿日の
 事なれば川良の高根の雪解て平日よりは抜群に水倍増り白波岸は溢れ瀬枕は瀧のおどく滔々と
 して底も赤き逆捲水は矢を射よりも烈くて彼三級浪高してふ龍門の流を是より争勝べきと逸
 切たる諸軍勢須臾危をたたらふ處は佐々木四郎左衛門尉高綱梶原源太左衛門景季少も不怖橋
 の小島より一同に颯と馬を乗入前後を争ひ渡しければ秩父重忠是を見て馬より飛下駒此脚擱
 て肩よりけ宇治川の歩涉は我社先陣なりと呼はり碧潭藍より青き急流を飛入立游きてぞ涉ける
 是は不剛され我もく馬を打入押渉る中よと平山武者所重季佐々木太郎左衛門定綱澁谷左馬
 允鶴谷次郎直實父子の橋桁を走渡り陸の先陣をぞなまにけるかゝる程は二万五千餘騎の關東勢
 一騎を残らず川を越射れと斬とも事ともせず聞を造て駈立る其勢ひ面を向べきよふなく煙塵
 騰々として天を霞め馬蹄撞々と轟て山岳を揺りそはありなれば小勢の木曾方防事能はず橋根
 井を始宗徒の勇士悉く討死し殘卒或の討れ或の生捕れ言甲斐なき輩は八方へ散亂し道を奪て
 落行よりし此旨都へ聞えければ木曾義仲大いに驚き此上は主上上皇を奪奉り何國へと啓んと那
 和弘澄が方へ使者を馳東國に兎徒既と宇治の手を破り都へ攻入よしなり急ぎ主上一院を東寺邊
 まて御幸なし奉り候へと下知しければ弘澄承る庭上は參向し朝敵義經既に都へ攻近付候急
 ぎ東寺へ御幸なま給へとぞ委しける此時御所中よは花山院大納言兼降卿民部卿成範朝臣修理太
 夫親信卿宰相中将定能卿殿上人にの實政成區舎隆宗長以下侍ひ玉ひしと列位色を失ひ互も目

見合有べきよし仰出されけるよ那和弘澄大い怒火急の場所よ臨御猶豫の何事予疾々御車に召
 玉へと仰ける所よ薄衣深々と被じ人弘澄が後よ倚ぞと見る間もあらざ鐘の上帯擱て眼より高
 く指上一丈許投げれば弘澄は一言をも發せず鮮血を吐き死たりけり思もよらぬ事なれば公卿殿
 上人是は如何にと周章狼狽法皇も主上と玉簾深を隠れ給ふ時お彼者薄衣剝脱庭上よ衝立上り是
 は源九郎義經が臣上よ西塔の武藏坊弁慶なるぞ木曾の雜人ばら院中にぞ非禮を働は一々擱
 殺てくれんぞと確と白眼ければ弘澄が郎黨大いに駭き是を見れば七尺余の大法師黒皮威の鎧あ
 裾布此直垂と着し月代長く伸たる頃よ鉢巻しめ鏡のごとき両眼を瞞したるよ金剛力士のおど
 くなれば怖保き離有て立向んとする者なき處よ與北方より伊勢三郎義盛と名乗廿余人此勇兵
 を隨へ拔連て斬て出百余人の弘澄が郎黨を殘少よ切を捨て其後弁慶義盛庭上よ跪きて主にて
 候義經遠計を回し義仲たのひひ敗なば一定主上一院を崩奉り西國か北國へ遠幸あし奉らん事を
 察し某等を暗に都へ上し御所中へ紛入安護し奉れと命じ候により白地よも奏し奉らす斯の
 らひ候今は百萬騎が攻來り候とと某等一々蹴散候のんあいた敵慮を安し玉へと奏しければ御
 所中此上下唯蘇生たる心地して勇を悦び玉ふ院も出御ましと二人を敵覽あるよ一人の大法師
 よて筋骨荒たるよ虎鬚肥よ生一人は頭魂萬人に勝て逞く見えしうば龍頭殊よ厲しく義經遠
 計を回し汝等をしと睨が危急を救し事神妙なり宜く四門を警衛せよと勅定あるよぞ兩人拜謝
 して君前を退き衛士北面と俱よ四門を鎖固嚴く衛護し敵寄來らば目に物見せんと腕を按て候

かけしはさそ氣味よと見えよける

○義仲最期兼平戦死之條

木曾義仲はのゝる事を志らず松原の姫君と帳内よ入て酒宴をなま若と都を啓は暫時別んか余
 波おしとて枕を並て臥ければ越後忠太個果味方既は防禦川ひぐたき期は望たるに大將りゝる行
 跡をなし玉ふはとぞを當家此運命傾く兆なりと思ひ帳内近く進より宇治此手破れ敵のや都へ攻
 入候じんお々々何を契玉ふぞ早く御最期の御用意候へ忠太死出の魁仕らんと呼はり腹十文
 字は指斬りたりたり義仲是に度されて波の袖を引分立出らるゝ姫の今をばきぬく此永
 き別と成よやと涙雨のごとく鎧此袖は絶付玉ふ傳聞楚項羽が漢軍に固れ立出んとせし時よ
 鎧の袖は浩たりし數行眞氏が涙の雨を吾身の上と知れきと義仲も涙さしぐとしが屹と心取整志
 紅此小袖を重き上よ赤地錦の直垂りけ紫威の鎧は龍頭の兜を頂き金造の太刀佩反し石打
 の征箭此負て馬曳寄せ乗んととる處へ討泄されたる弘澄が郎黨息をのりりよ駈來り在し次第を
 注進しければ義仲奮然として大い怒逞兵二百騎を引率して飛がみとく院の御所へ馳着門も碎
 よど打敲せ義仲御迎よ参り候急ぎ多車を出され候へど大音に呼はりければ弁慶阿をど咲ひあな
 事々しの信濃猿殿よ此御所の九郎殿の御内に鬼神と稱れたる弁慶義盛等が疾より守護とるぞ近
 倚てニツなき頭を失ひ給ふなら片臆痛やと咲と咲たり義仲齒がみをなと者とを逸く門を蹴破
 り渠等が腰斬下よと罵る處へ軍使速しく馳來り搦手の敵はや七條まで攻寄いと告ければさらば

其敵を撃散して後よ法皇主上を奪奉らんと駒引飯し五條を東よ六條川原へと馳行たるよ楯根井
 か二百餘騎と行會ければ一隊よ成て敵陣よ駈向ひ主從死憤の勇を奮ひ一番よ島山が五百餘騎を
 撃破り二番よ川越太郎源房が三百餘騎をを駈散志三番よ佐々木兄弟四番よ梶原父子五番よ澁谷
 右馬允等が陣々をも悉く撃破一息得つと繼所よ義經公此は勢一万五千餘騎風翅雲を巻山口月
 を吐がごとく霧直よ馳來り八方を取圍奔箭の雨を降し刀劍の霜を降しを攻立ければ是あそ望
 む敵と義仲左右よ指揮を傳へ討殘れし勢百四五十騎を一隊とし整を傾け喊を造り當を幸ひよ確
 廻る死憤の勢ひ尖なれと義經公良半が術を廻志責育が勇を奮ひ千變萬化よ惱し玉べは義仲僅る
 主從五騎よ討なされ其身を眉間鉢付此板よ矢二筋射付られ漸く一方の血路を開て川原を上へ
 退しり追手此軍いまだ勝敗を知られば兼平が安否を聞て存亡を定んと日の岡さしてぞ落ゆきけ
 る茲よ瀨田此手には木曾が四天王此隨一と稱たる今井四郎兼平八百餘騎にて國分寺よ陣を張敵
 倚なば一當あてんと待かけしよ範頼が手の三方五千餘騎川原に陣されども橋は引たり筏いな
 し淵瀬をしらぬ湖水なれば涉すべきやうなく徒よ川を白眼で猶豫所よ早搦手は宇治川を渡し
 て都へ攻入たりと聞たまかば稻毛三郎重成榛谷四郎重朝斯では叶はじと思慮を廻し暗よ勢を回
 して田上貢御の瀨を渡し石山へ攻登しかば範頼公此三萬餘騎我もくと後よ續て渡しけり兼平
 少を怖れず八百餘騎を配當きて迎へせ追ひ返すの戦たりしよ誰いふとよ搦手の敵京中へ攻
 入木曾殿討れ玉へりと云出しければ兼平が八百餘騎大いお驚き拔々よ落行或の敵へ降り僅に百

騎許に成しかば兼平今は力なく討死せばやと思けるが又屹と思反し否々大將義仲公の死生も
 しらて戦死せんは本意ならずと十重廿重に取圍し敵軍を斬破り栗津比松原まで引退し處も思
 もよらず義仲主従と行逢大いに悦び互に手を取りし嬉涙は鎧袖を沾しさいや一旦北國へ
 落て再度鬱憤の旗を開んと主従僅四五十騎まで落行し追々敗卒馳加はりし五百騎餘となりし
 うば義仲大い悦び此勢を以て今一合戦せよやと隊を立整す處へ猪俣小平六胤盛七百騎みて襲
 かへり喊を遣て接戦と木曾勢心得たりと渡合て批みあふ是を見て甲斐源氏の武田加々美一條板
 垣逸見伊澤小笠原第七千餘騎猪俣に力を併し八方より攻立しければ木曾勢心は猛と雖も數討の合
 戦も跡勞れ腕緩り悉く討死し今の義仲と兼平唯二人討なされけり兼平は義仲を落さんと頂
 羽張飛が勇を顯し一方を斬開く主を救出し早落玉へと諫めし其身は一人殘留り雲霞のおとく追
 來る敵を遮り留おける其勇壯さらば人間業とは見えざりたり斯て義仲意ならずも唯一人すお
 と落られしが時しも正月比未なれば比叡山下吹下し余寒肌を徹し終日の戦ひに人馬俱も疲果
 深田有とぞ知ずして不思馬を乗入れば深泥馬の首を埋と打ども汰とぞと老を此名馬働き得ず
 今のは是までなりいて自害せんと刀も手を掛なぐらさるも兼平が生死奚何にと後の方を振返
 り見る處も相摸國の住人三浦黨の中に石田次郎爲久が流前來りて内兜を袴深も射ければ流の
 義仲を留得ず俯首も臥て息絶たり關東勢落合て首播落し鬼神と稱れし旭將軍義仲を討取たり
 と呼はりければ諸勢一齊も勝賊を叱とぞ揚りたる此時までも兼平は只一騎も敵中を縦横し笠

印引りなぐり弓胡篋も投弄て鏝元まで血も染
 たる大太刀挿し近倚敵を若向李割拜討大袈裟
 小袈裟も斬て落老火電神の荒るるおとく血戰
 して有けるが木曾殿討れ給ひぬと聞今は誰り
 爲も存命べきと四境も響く大音もて木曾殿の
 御内にて四天王の隨一と稱れたる今井四郎兼
 平が最期の跡を見よやとて太刀を口に加へ馬
 より逆に落ぞぞ死たりける誠に兼平が爲跡
 前代未聞比剛勇やと感ぜぬ者ころなかりけり
 斯も都もい木曾方散々も敗續けるよし院の御
 前へ聞えしかば上皇勅慮穩にぞ大膳太夫業
 忠も勅して遠見させ玉ふ業忠領掌しと東
 面比築垣も登り見渡り東國勢戦ひ勝しと見え
 北國勢悉く弊走り旗比紋所皆關東武士の家
 印なり然も笹龍膽の旗押立混甲五六騎許體
 の袖を春風に翻去塵埃を踏立宮門も馳若泥



義仲の最期 兼平の戦死 圖

々々馬乗放去大音に呼はりたるの鎌倉前兵衛
 佐頼朝が舍弟源九郎義經擲手此軍將とて宇
 治此手を攻破り義仲を退立ひされども死傷も
 し院を襲奉る事をやと御處衛護の爲推參仕れ
 り苦あらずば禁門を開りせしむと呼りけれ
 ば業忠悦び夫々と命したるも義盛御門を開
 き請じたる六騎此武者の中門此外なる車宿
 に予跪たる法皇御威斜ならず中門の羅門よ
 り激覽あるに思々の裝り鎧此毛は異ども器量
 骨柄勇々しく見えしかば出羽守貞長を以て六
 人此年齡姓名を問しめ玉ふ第一は赤地錦の直
 垂は萌黄の唐綾を疊み紫裾濃の鎧は白星の
 兜を從者を持しめ金造の太刀は虎皮の尻鞘り
 け廿四差たる切生の箭を負重藤の弓の鳥打を
 左巻よじ白絹は南無宗廟八幡大菩薩と書さる
 袖印付たる將擲手此主將源九郎冠者義經生年



廿五歳とぞ名乗玉ふ次は安田 遠江守義定卅七歳其次は澁谷右馬允卅七歳其次は畠山次郎重忠
 廿一歳其次は梶原源太左衛門季歳卅三歳六番目なるの佐々木四郎左衛門尉高綱廿五歳今度宇治
 川の先陣なりと名乗ければ貞長一々紀錄して法皇の激覽を備ふ院殊に御威有て義經を大床よ召
 れ既逆臣の爲は虜にせらるべりたるを汝遠き 慮を回し義盛辨慶を以て急難を救ひ尙
 大川を渡りて強敵を暫時は伐平し大功眞は金石よ記し堪り猶も忠戦を勵み平家を退治して
 三種の神寶を事故なく入御し奉り世を泰平よ覆ししへと勅掟 志玉ふ義經公頼首し給ひ某等兄
 弟不敏ながら朝敵を斬く亡し候事偏は陛下の威をかり奉るよ倚り猶も天威を頭は戴き平家を平
 け震襟を安んじ奉ん事方寸の裡に候敵慮安く思召れしへとて斬て君前を退き禁門を衛護し玉ひ
 たるもの程も義仲兼平栗津が原にて討死せりとして首を都へ送ければ義經公大いに悦び玉ひ余
 黨を此所よ撃彼処よ生捕河州へ下りし樋口次郎兼光をも擲捕首を刎壽永三年正月廿二日洛中
 全く平定しければ義仲を始め今井兼口盾根井以下宗徒の首を引渡し六條川原よと檢非違使の手
 に渡し東洞院の北なる梶木に掛られけん 應義仲其身草菜より起て平家の猛軍を碎き終に都を
 追落し奇世の功を建征夷大將軍とまで補任せられ威名四海よ轟しに 慮 淺く奢侈日々あ盛
 り惡逆日々よ超過し君を蔑よし民を恤さりしかば天地の怒に觸人望に背き幾程なと朝敵賊
 徒の首を擲り首を梶木に晒し臭名と千歳も傳る事已に出者の已に反る 理 なから簿情かりける
 身の果なりけり

辨辨慶判官に軍畧を陳する條

茲に判官の郎黨鈴木三郎重舎は兼々廷尉此内意を得て去年より四國路へ下り平家の動靜をうら
いひ居たりしが今判官御渡海有しよしを聞て馳參じ判官より拜謁きて申けるは某御下知より
去年より當地へ押渡り此所彼所を徘徊仕り野武士諸浪人をかたらひ忍竊を入る八島此内裡を觀
ひせ候に三軍此法令疎まして將士怠らふ其上半禮高松此在家火此掛玉の直に城中
へ燃入候のじを言上し其外地利此遠近山川の廣狹まで悉く演舌に及なれば判官大いに悦給
ひ近藤六を召れ我是より八嶋へ押寄んと思ふと味方の後陣いまだ來ずるを八嶋は平家の勢何
程有り問給ふ親舎答てさん候八嶋は凡一万騎を候ひしう浦々嶋々の敵合に五百騎三百騎宛
配當しし差置將亦頃日伊豫此河野が平家より不隨を攻んとぞ宗徒此輩數千騎まで馳向候へば御
所の勢の千騎は過候はじと言上す判官聞召扱は軍圖の中れり昔金太宗金剛を征せし時一日
一夜より行事二百里甲を不解三日食せず遂に敵軍を敗しし兵を速にせし故なり面々勞を不厭
片時を早く押寄候へ近藤六は重舎と俱に近邊此野武士をあたらし山々嶺々雲火を煥晝は煙を
揚紙旗紙幟を多く立て偽兵をなし大勢四方より取廻す勢をなし候へど命じ給ふ兩士領承して
出行ければ判官は本部の勢を率身先陣に進玉ふ從軍も大將も後じと揉もんで進程に阿波と
讃岐の境なる中山を夜と俱に越早三更の頃と覺しきに前路は脚力と覺志き勇立文を持て急ぐ

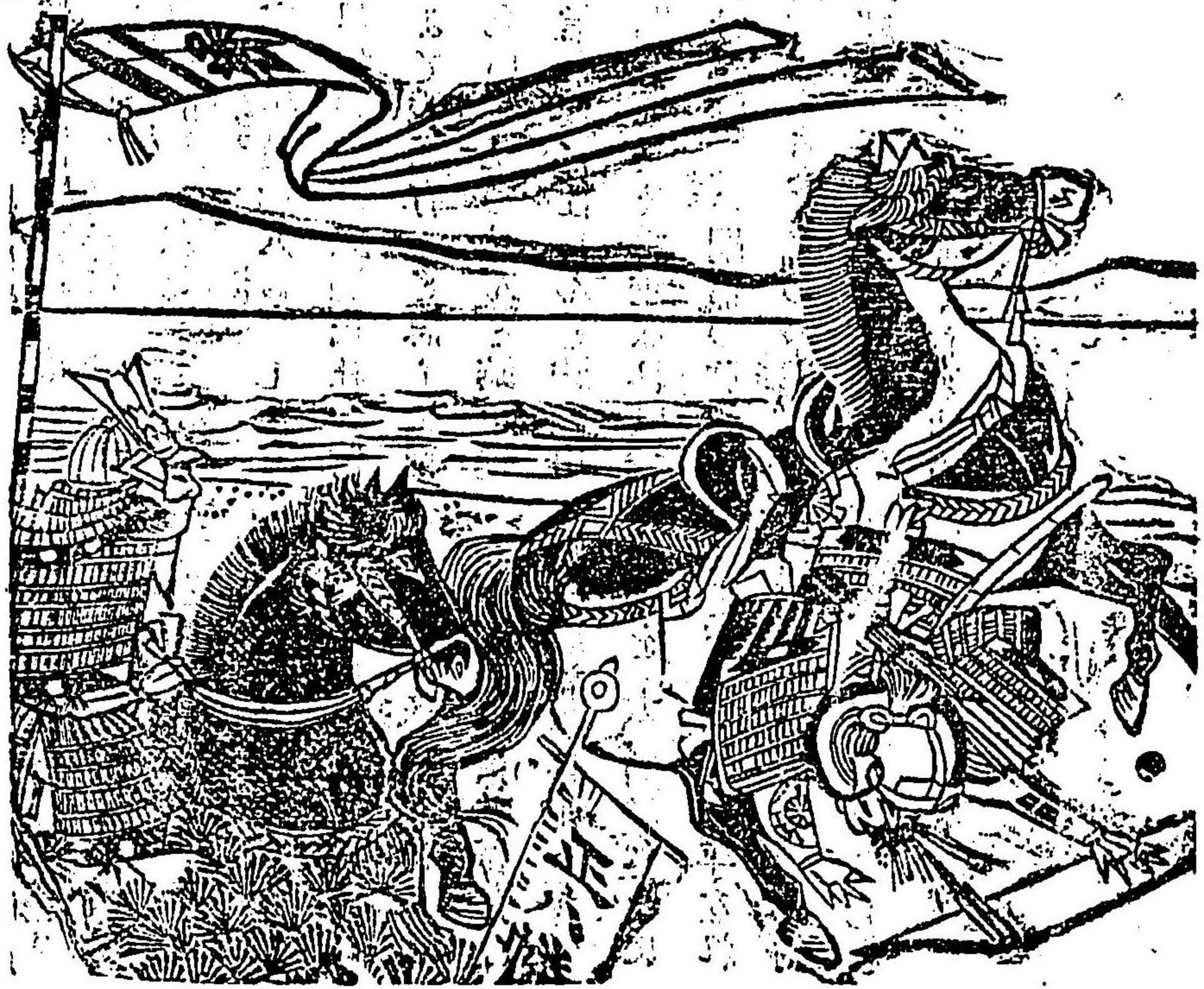
本判官は氣早き大將なれば彼男も近付給ひ我徒も八嶋の御所へ參る者なるが夜中故路に
迷へり足下は何國へ行人もやと問給ふ彼男答て候は平日都方より八嶋の内裡へ御使も參り
關次の案内よく知て候唱案内申さんど何氣なく先立て歩ふぞ判官悦給ひ是のよき人逢
申たり扱其後文は誰人より誰人への御文もやと問ひ玉へば彼男答て是のさる都方此御方より大
臣殿へ參る御文なり源氏既に都を發足せまうば定て其内通よこそ候のたといふもぞ經公親も
辨慶が鎧の袖を引玉へば辨慶早く其意を察し彼男を一脚蹴倒し持たる文を奪取て呈しなれば
判官開封見給ふ女房達よりの消息と覺しくて義經の究て銳氣男なれば荒き波風をも不厭押渡
り侍らん間搦て備に息絡ふな杯認且は此程の愛節はかず／＼なんどさそ哀に奪續たり
判官大いふ嘆息あり人々を見給へ女ららべさ斯我機を見賺し内通せり吾一日遅く茲來ば敵
軍備を嚴重もしと敗り難らん後日武裔の上覽に入なんど深く懷中じ玉ひ彌駒を逸め引田浦
入野高松郷を打過て翌日十九日辰の尅も八嶋の皇居此向ひ浦も着給ひ敵陣の跡を窺ひ給ふに敵
寄つしと思ひりなるが何の備もなく見ければ辨慶判官も向ひ平家勢微にし上下臆病神此
魅たる兵なれども味方の小勢を見れば英氣付て戦ひ難義にいはん唯味方の勢を大勢に見せ敵の
軍立をば御覽あれどぞ申ける判官聞給ひ奈何して味方を倍し敵を駭しめん辨慶が白親舎が
相圖もいへば在家火を掛敵此來去を試て伏兵を以て敵を伐給へ判官照首給ひ是我胸中と
符合せりとして佐藤兄弟を頭として城兵此通路を守らせ輕卒も命じて先率禮高松の在家に火を掛

させ給ぬ折しを海風烈く余煙東西も覆ひ
 猛火四方へ迸りければ重舎親舎是を見て
 須波相圖よと同く四方此山々も煙をぞ揚よ
 ける此時皇居は伊豫へ發向せし兵捷軍し
 て敵首百五十級進りしうば大將殿の館よ
 て實檢最中なる所へ士卒駈來何時の程よの
 敵押寄高松の在家ふ火を掛候と注進しられ
 ば一門此人々仰天し急き斥候を出して見せ
 まむるに四方の嶺々に煙火夥しく數萬此
 軍勢攻寄しと報するよぞ列位大いも周章あ
 る程ふ言甲斐なき雜兵原は早拔々も落行け
 り程なを烈火内裡も移りて三四ヶ所より燃
 立なれば益々驚き玉ひ主上女院北政所二位
 殿以下内府父子と俱ふ松も取乗て漕出し玉
 へば我をくと思々も松も乘て押出と余も
 乗盃を沈るひ多うりけり源軍得たりと

佐藤 阿信 忠死の図



惣門此階に打出けるふ折節沙の于瀧なれば
 馬の蹴上も水昏くいろもたる中より白旗
 颯と指上たれし勢の多少を見ゆるりけり時
 又判官は打拵り赤地錦の直垂に紅井下渡の
 鱧 鍬形の龍頭打たる白星は五枚兜紅井の
 母衣も廿四指たる小中黒の征箭を負金
 造の太刀に虎皮の尻鞆掛たるを佩重藤の弓
 此真中執例の大夫黒に白覆輪は鞍置で打降
 り一陣に進出鎧張り大音ふ一院の勅宣
 を蒙奉り平家追討此大將軍左衛門尉
 五位判官源義經是まで向たり迎も宿運盡
 たる一門の人々不抗拒敵し玉はんより主上
 女院并も三種の神器を渡して降参し玉る人
 々の御命の義經が身に替ても申宥ははん如
 何にくと呼はり玉ふさま人品骨柄類な
 きま粧装まゝ花やさだれば天晴大將軍やと



敵も味方を秒語合けり平家の人々は是を聞き扱は亦義經を欺れて皇居を始陣々を燒立られしある
 安らぬ重る遺恨を晴せよと愧を知らる武士二百騎余松漕寄て散々射る源氏方おも田代冠者
 信綱島山次郎重忠金子十郎合忠同餘市近則伊勢三郎後藤實基佐藤兄弟を始とし一人當千の勇
 士等矢石を侵志賊を發して攻戦ふ程も源平両家の手負死人夥しくぞ見ゆにける然る所も能
 登守教經松漕寄させ大音も門脇宰相教盛が二男能登守教經源氏此大將も箭一筋進せんと呼りは
 ければ源氏方大い驚き能登殿は方しを一谷よて戦死有しと思しに猶存命もやと恐怖しけるを
 判官嘲笑給ひ能登殿とて鬼神よてはよをあらじいで見參せんと駒を進玉ふを佐藤嗣信推留を千
 釣の御身の輕々しく出玉ふ事勿れ恐なら嗣信御代官仕らんと駒繰出を源廷尉義經是よりありま
 り名乗ける其時教經曳設たる箭を兵と切放す嗣信早業此手垂なれば飛來箭筒を太刀拔さまに
 切を落しよりされども教經箭矢を以て射られければ鏑の胸板おぐさど射立たり痛手なれ
 ば馬上にさまたず眞逆も落て死たりけり忠信是を見て兄の敵遁さじと弓箭曳對切を放ば的
 それで能登殿の童菊王を海中へ射落しより教經の二の箭を放て鎌田藤次光政を射落しぬさしを
 の源軍此弓勢も辟易もて汀遙も退れば平家も是を一面目としそ沖の方へぞ膽出まけり



能登殿
 建礼門院
 玉ふ

教も平家の三種の神器の内神爾と内侍所の源氏へ奪返しければも寶劔の安德帝は佩せ奉りて入水在しかば紛失したりけると軍果て後浦の戦は命トて探り上させ玉ひけるとぞ茲に於て源氏の十分勝利と得く生捕分取せざる者なく惣軍と收め凱歌三度上て暫時息をぞ休ける去程も源廷尉義經公の壇の浦の一戦に平家を亡盡し神器を守護し生捕を率て飯洛有しうば一院殊も敵感させ玉ひ御迎とし頭中將道資卿藤中納言經房卿宰相中將泰通卿權右中辨兼忠卿左中將公時卿少將範能卿藏人左衛門權佐等桂河大渡迄參向し神寶を請取朱雀大路六條を歴て大宮より待賢門へ入御し奉り官朝所へ渡御し給ふ干時源廷尉義經公申胃爽も粧裝て前後の隨兵威儀を飾り威風方を拂て供奉し玉ひ官の東門へ伺候在ければ督の長布衣を着し松明を執て前後も立其躰誠に勇々しくぞ見えよける斯て同四月廿四日右大臣宗盛以下の生虜を洛中へ引渡し罪の輕重も仍て死罪流罪此品を定らる中も右大臣父子は一度鎌倉へ引渡さんとて廷尉射多勢を卒して是を護り鎌倉へ下向あり路次滞りなく五月十五日酒匂の驛も若給ふ是より使者を立られ明日鎌倉へ入べきよし仰遣されたる然も鎌倉に梶原平三景時逆櫓此を論より深く判官を怨西國在陣中よを問者をもつて判官の行條我意の舉動法に過候と度々鎌倉へ註進しければさなきだも不平を懷給ふ鎌倉殿是を誠とし稍判官を疎せらるゝ處景時飯陣の後は晝夜武官の御側も在て佞舌を巧よし種々お説言し如何もして御兄弟の中を裂判官わなき者にして

渡邊種之浦の遺恨を晴さんと思慮を廻て最中なれば今判官の使節到來せしむ付武裔に請もて申けるは先立て西國より度を言上仕るもど判官は自立此御企おれば今般鎌倉へ入給はば西國よ之恩を見せ情をかけて心伏させし諸將と謀じ合せ如何なる大事を引出し給はんを計られず候間狼も入玉事なり判官西國在陣中仰られし汝等浦殿の旗下も属せば徒も虚を守て高名を顯す事能まじ予お從は分取高名意の儘ならん見よ予一已此武勇を以て不日に敵徒を殺盡しなん然も其檢賞として必定關西三十余國は義經が支配とならんさもあらば帝王を補佐し奉り京洛も武威を耀て天下に三人の將軍と仰れん事疑なれ亦汝等は源家再興の長臣と云れん事後世此美目にあらざやと日ひも事諸士諸卒まで聞知所も候然此みならず頃日承は候へば流刑も極りたる平大納言時忠卿の息女を娶り怨敵する時忠卿を流刑の沙汰もなく猶都に留置給ひ建禮門院と私通し給ふなど京童謳歌も其沙汰鎌倉迄も隠なれ是皆君を蔑し功も誇り我意も寡給ふも候はずや某亦判官も隨奉り諸所の合戦の様を見聞仕るも險難を懼れず風波を侵し敵の不意も出て敵を拉給ふ武畧才幹孔明張良をも欺く大將も扶知し給ふ郎黨も龜井片岡伊勢熊井佐藤鷲尾武藏常陸なんといへる萬夫不當此荒者にて候亦かねて自立此御企おればさう和田島山土井三浦の輩にも別して恩惠を見せ給へば衆判官を智仁勇の真將と敬ひ候かく人望の坂をる所遂に由々しき逆乱此端となり候はん只此度は鎌倉中へ入給はず功も誇り我意も寡玉ふ心を拉給ふ兵權を奪給はば判官も自然慎の御心生じ天下安全の謀

其候のんと飽迄毒舌を逞うして讒しければ浸潤の譖遂も行れ膚受の惣忽に成て武裔是
 を信じ給ひ小山七郎朝光を以て酒勾遣し判官事思子細あれば左右なく鎌倉へ入ず其所より
 重ての下知を待候へど仰渡されければ廷尉大いに驚給ひ吾兄の代官とし朝敵討討此宣旨
 を賜り木曾退治より以來千苦萬勞して命を塵芥に比し強敵を悉く亡し中にも神寶を事故なく
 都へ渡御なし奉り右大臣父子を生捕武裔を居ながら天下の主とせし事皆吾武略によれり此忠賞
 其は五ヶ國十ヶ國を宛行るゝと過たりといふも非と思しに豈量らん鎌倉にたふ入れざる
 事提督提原父子が體佞の所爲ならん西國にて斬て棄べき奴を惣に助置て今かゝる耻辱を蒙る
 事の目惜き地獄なる哉野獸盡く獵狗恣れ敵國派で謀臣斬ると謂事人身土に止られたる是を思ふ
 も秀術无指御留身血諫ふ不順して事茲及べる事と後悔の怒涙胸に充ちて低首を御坐けれ
 ば種井伴岡伊勢佐藤の輩を始め思願は勇士大いふ怒り君辱らるゝ時の臣死に懼り此は鎌
 倉へ押寄提原父子を其出若一寸試になして潔く戦死せんと聞けるを辨慶太いに制し事此實否
 ざる糾さず血氣に燃りて却て君の害を引出と事勿れ我君と唯親兄の禮を重む親度を答なき由を
 申開き給へど諫きりば廷尉も是も順給ひ賜へ通此狀を案文し給ひ辨慶も執筆させ因幡守
 廣元も達し玉ふ其文又曰

源義經作忍申上意願者被擯涉代官其一。爲勅宣御使傾朝敵願
 代官領事會稱卑辱。可被行忠賞所。思外依虎口謀言。彼賊止莫大

之勤功。義經無犯而謀啓。雖有功無誤。蒙御勸氣之際。空沈紅淚。情案
 事意。良藥苦口。忠言逆耳。先言也。因茲不被。紅纒者。實否不被。入鎌倉
 中之間。不能述素意。徒送數日。當此時。永不奉拜。恩願。骨肉同胞之儀
 已擬。宿運極所。敵將亦先世業。因所感歎。悲哉此條。古亡父尊靈。再誕
 之罪。緣者。誰人。卑敬。愚意之悲歎。何垂哀憐。哉。事新申條。雖似述懷。
 義經愛身。身軀。變腐於父母。不經幾時。節古頭。殿御他界之際。成孤。被抱
 母懷中。從起。大和國。守多郡。龍門。牧際來。一日片時。不住安堵之思。無
 伊雙。離存命。京都之徑。回難治之際。諸國令流行。在々所々。隱身。栖邊
 土遠國。被服。仕土民。百姓等。然而幸慶。忽純熟而。爲追罰。平家一族。令
 上洛。手合。先誅。戮木曾。義仲。後爲。攻傾平氏。或時者。巖々。巖石。策駿馬。
 爲敵。不顧。亡命。或時者。漫々。大海。凌風。波難。不悼。沈身。於海底。懸骸。於
 鯨鯢。之腮。加之。爲枕。甲冑。弓箭。爲業。本意。併欲。休亡魂。之鬱憤。之外。無
 他事。利義。經被。補任。五位。尉之條。當家。面目。稀代。重職。何事。如之。雖。然
 今悲。深歎。切也。依之。以諸。寺諸。社牛。王寶。印裡。不挿。野心。之旨。奉請。遂
 日本。國中。六十。余州。大小。之神。祇。冥道。雖。會。進數。通起。證文。猶。以。無。御
 宥免。夫我。國者。神國。也。不稟。神非。禮。所。憑。非。他。偏仰。貴殿。廣大。御慈悲。

伺便宜令達高聞被廻秘計優無過旨預芳免者積善余慶及家門傳
榮花於永子孫聞依年來之愁眉得一期安寧不盡書紙併令省略畢
諸事仰御賢察恐惶謹言

元曆二年六月 日

進上 因幡守殿

源廷尉義經

と實意を盡し詞花文莊妙成も亦筆力を奮ひしうは大江廣元感慨此涙を流志急さ鎌倉殿の
出披露及といへどと識者尙種々申妨しうは曾て許容の沙汰もなま右大臣父子をのみ鎌倉へ
召寄他所ながら對面有て亦酒勾の驛へ送り北條時政土井實平を以て腰越も在る延尉の許へ仰
遣されければ前右大臣父子助命し進せ度はあれど朝敵の棟梁たれば頼朝が意も任しがた志都
へ伴ひ院宣も任し候へどなり判官大いも憤り給ひ武裔如何なれば斯まで醜者の言を信して骨
肉の我を棄給ふや吾兄弟此禮を思はずんば推て鎌倉も馳入惡志と思梶原が鬚首捨切潔く自害せ
んものを大切の囚人を預といひ兄弟の禮を思は時節を見合なりと或は怒り或は歎き快々とし
と腰越より京をさし引返給ふ御心根ぞ悼はしう程なく日を経て帝都近く成ければ延尉先左
衛門尉廣綱を以て都へ上志右大臣父子此侈事如何計ひ候はんやと伺はせ給ひしは都へいれず路
次にて誅し首許院の廳へ上とべきよし宣命有しるは力なく近江國篠原宿にて盛を誅志野
宿も右衛門督清宗を斬二級之首を携て都へ入院添して斯と奏し玉へば則檢非違使も命
木よぞ罰られり

○土佐坊伴書起證文條

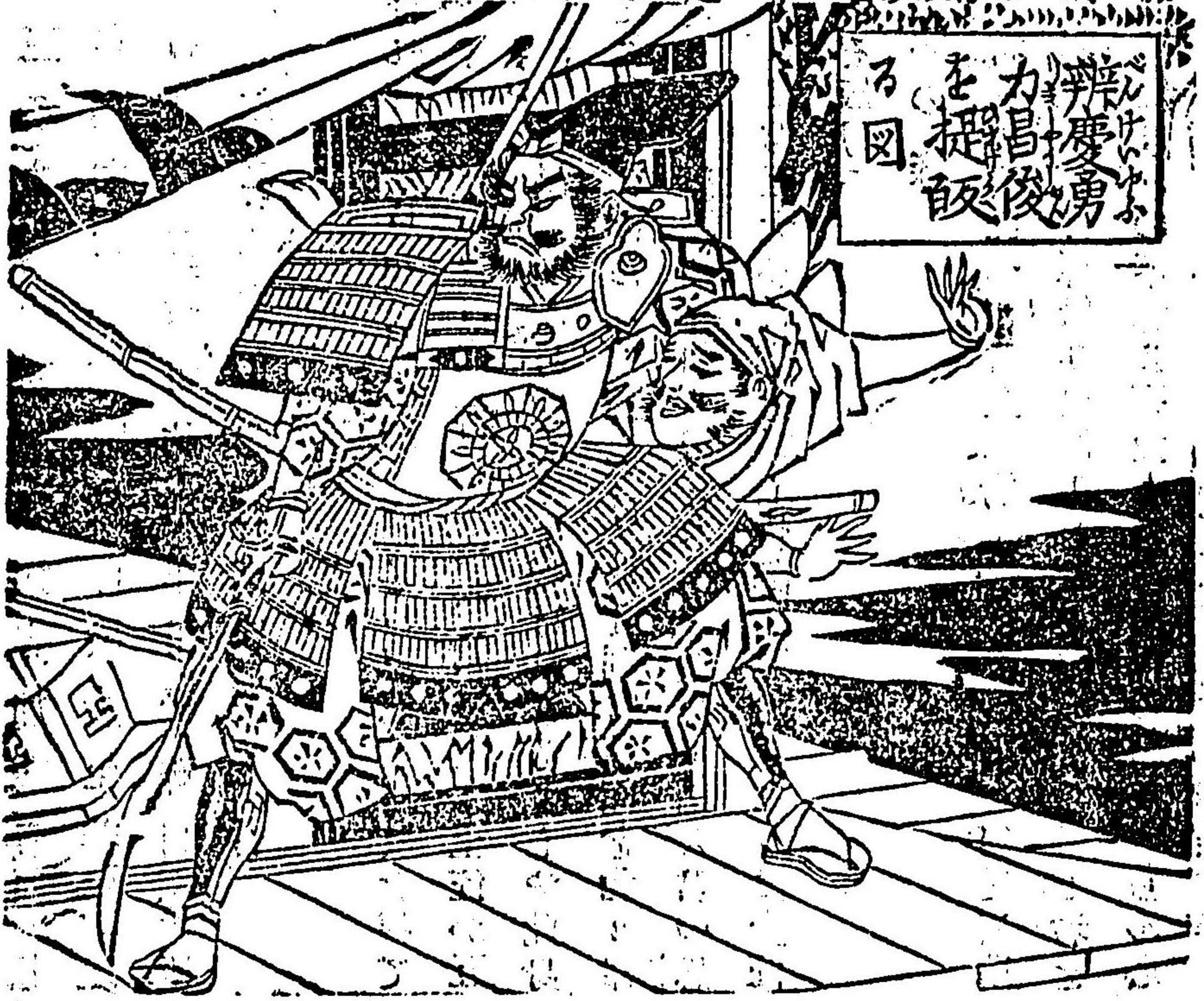
武藤坊弁慶の判官の命令を承て飛馬お鞭を加て土佐が旅宿に馳著板敷の上にゆらりと下り大
幕摺て打上坐敷を屹と白眼し形勢彼鴻門の會に沛公の危急を救んと馳著し樊噲が勢ひも是
み勝らじと見えたりけり辨慶坐中を白眼廻も是ぞ土佐が股肱の者よと見えと逞き兵
八九十人車坐も居座たり辨慶少を懼れず其真中を沓履ながら荒らるる踐鳴し鉄子土器をも蹴散
して土佐が左座おむす座志天眼以瞋して昌俊が確と白眼如何も土佐殿坊は警武裔の
代參なりとも先吾君此は前へ參るべきも所勞を名をして遅參ある事失敬と言ん無禮とや
盲ん近來奇怪なり唱我も隨て來れよや家内も響き大音も響りければ土佐些も騒がず莞爾と
灯咲前も江田氏にやとくと言んとするを弁慶聞きといれず言事あらば侈前もてやされよと猿
臂を伸て昌俊が臂のうへりを擬掴提て立上れば並居郎黨驚き騒ぎ是は狼籍なりと群
ける弁慶をせわらひ汝等我も刀回一人も餘さず蹂躪得させんと八方を白眼廻したる顔
色眼は百煉の鏡も血を濁るごとく鬼鬚逆も立六尺余此昌俊を恰小兒のおどく引提右
此手に大柳眉刀搔込しは欲界六天此魔王魔醯修羅も彷彿たり流石の土佐も辨慶が怪力の爲も
掴癒られ肉鎔骨碎るごとく覺るるが從來膽容衆も超智才も長したる老兵なれば苦痛を
忍て聲をあげ汝等騒事なり我身も一点の越度なければは前もて陳謝志願て立飯なると

辨しければ郎黨も愈方なく然ば馬を鞍置ひいんと言を辨慶不聞形して椽の際迄のさくど歩
 出ければ武藏が舍人さし心得之板椽へ馬更倚たり辨慶先昌俊を鞍坪に投乘其身を同じく尻馬
 に乗かゝり鞭を當鎧を合々駈さりけり堀川の館は義經公南面の廣庇に立出奔慶遅と待
 玉ふ所も程なく武藏坊駈戻り馬上より昌俊が肩口搦て椽板へ倒と投下し其身を馬より飛下土
 佐が後ぞ引添ける判官土佐を儲と白眼玉ひやと昌俊何とぞ疾より來ざりけるぞと叱去給
 ひければ土佐坊低頭し先刻を江田殿に申しおとせ其源二位の御代參としそ三太山へ奉幣使を登
 ひ處路次より所勞に取合殊の外賑ひあいた暫時保養仕りて參候仕らんと遅滞仕ひ處再度の御
 使者長入いんとぞ申ける判官嘲笑給ひ汝の方しく義經が討人を蒙ながら社參と詐不意を伐ん
 どの巧あらん人も多義經程の者を斯淺々しき計略も討んとは片腹痛と詰給へば弁慶進出
 後掟のごとく軍勢多上らば味方よ防禦の備を設ん事を懼態と小勢も上りめ爪は聞ば在鎖
 倉の諸士我君の神武も懼一人も武備比命も應せずと聞しと和僧衆も抽て征將を蒙り欺討
 奉んとは大膽けれ辨慶が手並は先に知りらん御邊み於に余人の手よの悪まじきぞと血眼も
 成て詰寄もぞ昌俊の身よ冷汗を流まなながら尙も陳志けるの阿勿麻那の仰みや義經公あそ人
 の機海を信し給ふとも武藏殿の理非をも察し給ふべきも俱も疑念を懷給ふころ情なれ三所
 權現も形照覽られ毛阻偽はすきかきなる判官重て仰らる左程潔白なる汝がなよとて
 大勢の郎黨を召具し路次よて日を暮し夜中も入浴せしぞ且汝下部とも明日は大騒動にぞ我

も人をして一生懸命ならんとは言しすと難し給
 土佐佐答て曰郎等多く召し具し以彼も熊野
 路は山賊充滿仕いよし承以故警固のため
 よて以下部とぞが申は跡形もなき雑談
 あひはん何さま此度の儀は昌俊に恨有者
 の説言せしと覺い所詮何程陳じいとも申
 究り有まじくいへば詐なき証も起証文を
 認いはんと申にぞ判官少し色を和け給ひ
 辨は非禮を請給はずといへば疾々仕れとて
 七枚の午王を出しと認させ給ふ土佐畏り
 筆を下る元來博識なる上筆道の達者なれば
 須臾も七枚の起証文をぞ認ける其文に曰

起証文之事

敬白起証文之旨趣者上者梵
 天帝釋四天大王焰魔法王五
 尊冥官泰山府君下者奉請驚



辨慶勇
 昌俊
 を捉飯
 る図

而宮伊豆箱根不二淺間熊野三所金峯山殊玉城鎮守加茂貴船松尾平野稻荷祈園社等其外日本國中大小神祇敬白昌俊全非承這討之命而狹野心欲以弒吾君也若有背斯誓約則乍得受神罰永墮落于泥犁也今吐露胸次以爲將來之誓矣仍起證文旨趣如件

文治元年九月日

昌俊判

と筆を揮て書たりけり弁慶執之高かお讀上げれば判官聞召從來虚言との思召ども文を揮て書たる智才は感し給ひ近臣は命し三枚は八幡宮へ納一枚は熊野權現へ納三枚は土佐か五躰は叔よとて焼之灰となし昌俊に飲し給ふ流く此昌俊も身の毛立之覺けれどもよしや此身は神明此汚罰を蒙るとも君命への替がたしとぞ神水も浮た飲盡しければ判官稍面を和給ひ御盃を賜なれば昌俊三度押戴源家の武徳海内を偃某等如き者を泰平を樂む事偏は君の恩澤なりと祝志の數盃を傾り獻酬度々及なれば君臣大ひも醉を盡し皆御暇給りまれば土佐は只毒蛇の口を遁れたる心地し己が宿所へぞ飯ける

○堀川夜討鬼三太勇戰の條

時又辨慶義盛等判官を諫けるは昌俊七枚の起證文の書しへども全偽言みてし者を何とて助命飯し給ふぞ速は斬て棄給へと申ければとも判官頭を打揮給ひ渠偽もせよ誓紙まで書し者を強て討なば鎌倉の讒者益便を得ん將昌俊如きもの不意も寄たりとぞ何程の事りあらん心

を勞せず各宿所へ飯り枕を高くしを寢しへとて其身の愛妾靜が肩お扶られ閨門に入たまひければ諸臣も可爲やうなく宿所へ退出したりけり茲は判官の愛妾靜といへる磯代前司といふ者の娘なるが絶世の美色有が上歌舞の道に長じ一年神泉苑にて雨乞の舞を奏て膏雨を降せし堪能よて智才亦人お勝たる女なれば昌俊が躰何とも心得ずと思ひ竊に侍女を招御身從者を召具し土佐が宿所へいたり忍びて動靜を見を來りしへと命じければ侍女心得一僕を召連走到て窺り此時土佐の宿所へ飯り郎黨を聚へ我今虎口の死を遁る飯れり事遅滞志ての由々數大事なり早押寄よとぞ各鎧一縮し馬引立今を打出ん勢なれば彼侍女の大い驚き走飯んとする土佐が郎黨逸早く見咎此女は異しとて從者と俱は土佐が面前へ曳居りければ何さま子細あらんと推問しければと白地も不云ければ二人を縛て樹上に釣上釣下し責けるにぞ苦痛も堪兼一五一十を白首も及る昌俊駭き女ちる早味方の機を見透たり速は押出せよと彼兩人の軍神の血祭も斬て棄て土佐が舍弟三上六彌舍季姉和平次先懸錦織三郎門真太郎藍澤四郎を始九十三騎外は白川印地水尾谷十郎五十餘騎土佐は加磨して馳加りければ是を案内者と志て文治元年九月十七日六條堀河へと押寄る時しを秋の空なれば月隈なく照渡さながら白晝の如くなれば直お閨門に押寄鯨波を吼とぞ上にける靜の侍女が飯をまてとぞ飯ぬに意訝り物音に耳を居たりける此音お驚き判官を頻に汰搖し起し奉れとぞ宵の酒宴に酩酊ありて眼を覺し給はねば靜は心利する女みて御鎧取出し

投掛奉るにぞ判官岸破と起上り給ひ何事か有と問玉ふ静答てさん候敵はや御門まで寄て候
 と申扱の土佐地が寄たらた何程此事あらん誰か在われ 追拂と曰ども宗徒の者の皆宿所へ販り
 て在合さず云甲斐なき仲間小者此外は鬼次郎鬼三太兄弟此みぞ御前より拜伏まける判官一人は
 向ひ夜討の寄むりといふぞ義經が武具せん間防箭射よと仰げれば兩人大いに悦び人々在合志
 玉はねばあろ下郎お斯る大役を命じ玉ふ事の 嬉さよと 各鎧一縮し有合弓よ 鞞取添大庭
 お躍出片疵より見やりたれば混 甲百五十騎 爽に鎧て馬の鼻を並べ甲の是を耀して押寄
 たり月光晝のとくなれば内兜を賺渡り誠お射よかお見へければ門の 門引 放し大音にあ
 ら事々しの大勢や寄人の問はずと知れらる二階堂の土佐殿なめり近倚て箭一筋請て見給へど兩
 人等く十三束三伏の強弓忘るゝ計引絞り兵と切て放せば 過ず真先よ進みたる兵の兜の
 真向と胸板を箭尖白く射通ければ何うわ以て堪へき俱馬より倒と落と死す是を始として差取
 弾詰散々射たりしるば鎧の袖草 摺兜の鉢は箭二筋三筋射付られぬ者もなく先よ進たる兵思
 いず颯と引退ぞけり斯間判官は 錦の直垂と緋威の 鎧 龍頭の兜をたされ 金造の太刀な
 き二十四差たる切生此征箭を負重藤比弓此真中握大夫黒の名馬よ 金幅輪の鞍置を打跨り大庭
 よ歩 せ鞠此掛に打出玉へば鬼次郎鬼三太御馬前に 跪き 氏なき下郎此御魁 仕りしこと生前
 の面目是よ過ず候いて御前まで討死し年來の 武恩を報じ奉らんと 御門前を走出大音よ五位
 判官伊豫守義經公の御内よ鬼次幸郎胤。鬼三太清悦。今夜の先駆を賜りたるぞ手並り先よ知



つらん我と思はん者ハ一太刀合せよと呼はりければ昌俊聞て憎き下郎が大言りなど築垣の蔭より狙倚十三東山伏暫く固く切て放つ誤ず鬼次郎が弓手此太刀打又羽ぶくら逼り射立より幸胤些ども屈せず物々しと搜り乘太刀揮て敵中に切て入昌俊早く乙箭を放て鬼三太を射し清悦左知さりと飛來箭筒を長刀取伸切て落し同く敵中へ割る兄弟東西南北又斬て廻究竟の兵十三騎斬て落し八騎又手を負したりされども其身も金鉄ならざれば手疵多く被り幸胤は阿根羽平太又討れ清悦は判官此馬下に馳飯り轡ふ提て息繼居たり判官是を月影又賺し見給へば全身朱染たり扱は己の手を負けるものと曰よぞ鬼三太氣を取整志斯計の薄手何事か候半とぞ申る判官御感賞料ならず已は健氣者かないて予敵を退拂んと大門此際まで歩せ給ふ寄兵是を見て是や判官嚴ならぬ彼人の鞍馬よ異人又兵術を學八天狗守護すれば辨慶さえ敵し難しとて降參せし人又近侍て二なき命失ふなど私語合誰有て込入んとぞる者なく判官も馬をたてられ入は射落さんと猶豫給ふ是より以前に靜御前の中門小者を後門より出し夜討入るよこを八方へ告知せられれば我もくと馳參先一番武藏坊辨慶されば何となく寢苦しうりしを王よと例の黒草威手早投掛八角の櫂の棒又鐵の疣透間なく打たるを杖又つき高足駄履て後の小門よりさし入て見れば大庭の方より物音騒しく聞えたり扱は早敵打入るものと中門の方へぞ馳行る

○江田源藏戰死被爲刑土佐坊條

斯て辨慶は中門に出見れば判官唯壹騎も大門此方に扣玉ひ敵の馬の鼻を双今も馳入ん
 勢なり辨慶をむらひとて實の程の諫言を用給はざり志反報は繼し奉らんと板橋此を
 騷鳴し表れ方へ歩ければ判官駭給ひ須渡敵こそ後へ廻りたれと振反見給へば小山のとき武
 者一騎長き棒と揚と二王立よ立たり薄暗き所なれば定るよも分らず悪き奴哉と弓箭引番るれ
 成は何者ぞ名を名乗名乗ずば箭此下に射伏せんと宣ども辨慶實よき鎧は着たり其極程の事は
 あらじと尙も答ず立ければ判官大い怒玉ひ箭は放指太刀又手を懸飛懸んとし給ふよ辨慶
 大音よ遠らん者は音にも聞近からん者は目よ見よ源廷尉義經公の御内にて一人當千と稱さ
 る武藏坊辨慶とい我事なりと名此り大口開て何々ぞぞ笑ける判官腹を立給ひ職事を時社よれ
 土佐めが寄さるぞ退拂と曰は辨慶承り兼て斯有んと察せし故宵に諫奉りたれいて見參せ
 んと一丈二尺許此棒りうくと揮鳴し一聲喚て門前の敵中へ會釋もなく割入前後左右よ擊立
 ければ是が爲よ命を隕者數しらすさながら猛虎の群羊をあるが如し敵勢是を見ぞ辟易し一向に
 四方へさりと引斯る所よ龜井片岡伊勢鷲尾を始我もくと馳來り寄兵此後より當を幸よ燕立
 ければ備前守行家と手勢五六十騎よ土佐が勢此橋合より斬立けるみぞ土佐が勢残り少よ討
 なされけるされども昌俊をかねて必死と覺期せしは一足を退ず接戦す然に江田源藏弘綱の
 宵よ判官の不興を蒙り六條京極へ飯けるが堀川又軍有と聞武具一縮し宙を飛て馳着縦横無盡よ
 切て廻り敵野人討取中にも好首二級を辨慶に渡し不興を蒙し某が斬取しと申さばとて御
 舊詞は被下まじ戰死仕老後可然被辯願入候とて亦も敵中よ馳入何卒昌俊を討取ばやと馳廻

けるも宿運や拙かりけん土佐が投ぐる箭も首の骨の真中を射られ抜んく〜とそれとも大事の手
 なれば叶はず弱も弱て太刀を杖よつき館の縁際迄たどり着様へ上んとそれ共眼眩々上得ず聲を
 上て御内より人や在と呼りければ鷲尾經久御前に在けるが誰ぞと問江田源藏も候宵も御不興
 は蒙候へ〜と痛手負ひへば今は此世の御暇乞もて候間何卒我君を一眼拜したく候可然は執達
 憑入候といふさへ最もたのま少なを判官聞召て大に驚給ひ燭を照し見給へば鷲羽のの大箭を
 頸骨も射立られ朱も染ぞぞ伏居たり哀と見給ひ御聲高く如何おや源藏心を儘まなし候へど仰り
 れば源藏眼を細く開き息の下も中けるは扱は我君にて在りや御不興を蒙りゆへどと敵中も馳
 入る斯重手を負候へば今も必死もて候何卒息の通いうちお御勘氣御宥免給らば黄泉の障なき
 快も佛果を得候べし此義願上奉らんた方なく是迄引退候と掌を合せて亦打伏けり判
 官御聲曇せ給ひ宵も申せしは一時の怒言のみ何ぞ眞も勘當とべきや必ず心に懸候など仰と
 るもぞ源藏世に嬉氣に打點首次第も弱る跡なれば鷲尾三郎傍へ倚て聲勵し如何源藏弓箭も携
 る身が只一筋の矢疵にぞ斯許弱は何事ぞ古郷へ申遺事はなきやと云ければ源藏苦氣なる聲して
 申やふ君の御不興を宥されと死とるは一期此本懐なり今は何の思遣と事有ん云ながら過し春此
 頃母なる者信濃へ下がて何卒御暇を願冬迄に下よと申せしが下人が某の遺骨を持下母に見
 せ候ればさる悲嘆候ひなん何卒此上の大恩は母が身上を頼奉り候とぞやける判官のじを御
 前も在合人を涙を流し其膝は心安く思ひ候へ過分の食田を興へ汝が後世をも吊せんするぞと

言聞せれば莞爾と笑て息絶たり判官御悲嘆限なく諸勢も下知し給ふらく土佐めよせられて
 弘綱幸胤を討せたるこそ安うらぬ一人も不殘生捕もして引來よと仰と未だ果ざるも息を休居た
 る鬼三太清笑承はり候とて長刀閃して門前へ躍出馳廻に土佐は猶も殘兵を馳聚必死も成
 て戦ひける中も月毛の駒に跨る若武者弓杖も絶て扣たるも行合鬼三太聲かけ敵將名乗とい
 ひければ昌俊が嫡子土佐太郎昌胤生年十九歳とぞ呼びける鬼三太好敵たど駈倚二打三打戦に
 太郎不抗とや思けん馬は鼻を引返し鎧を合し落行を遁まじと退駈たり太郎が馬は終夜軍も勞た
 れば撃ども〜進得ず一所も躍のみなれば鬼三太退付長刀取伸馬の後足丁と確ければ馬は俯
 首も斃れ主の馬も敷れけるを飛駈て捕て抑へ鎧の上帯解て生慮たり辨慶あれを見て鬼三太づ
 れに先きを越さるゝ法や有と憤り土佐が從弟土佐五郎盛直と戦直盛争敵すべき馬を返去て逃
 田を尾筒を擲て曳戻し恰驚の雀を擲ぐごとく片手も提て飯けり昌俊は眼前も太郎五郎二
 人を生捕れ今は生とも何のせんと討殘されたる勢十七騎もて血戦したるが迎も不抗せや思けん
 一方を撃取り六條川原まで落けるが亦主從四騎に討なされ遠く鞍馬山も逃入僧正が溪の巖穴も
 身を潜ぞぞ隠ける去程も堀川には十分も討勝討取所の首も實檢有る昌俊は頭はなありければ
 判官大いに焦燥給ひ八方へ兵を分て捜させ王とぞも更に行方知ざりけり然も鞍馬には不測の
 事もそ有けり其夜長一丈許なる山代坊毎の門戸を打敲伊豫守殿へ仇せし者僧正が溪の穴も在
 鞠捕よと呼は〜何所ともなく失ければ坊毎比若大衆百人余り馳向ひ此所彼所と尋搜終も

昌俊主従四人を生捕翌日大衆五十人にて前後を守り堀川の御館へ曳來ければ判官太いに怡
 玉ひ渠を討泄せしが残念なり志に大衆の助力より生捕し嬉さよとて種々慰撫あり頓て昌俊
 を曳出させ玉ひ如何土佐神文の冥罰身と思知りやと曰ば昌俊少も不懼斯成事は鎌倉後
 以前より覺期仕れば今更驚へき候はず疾々首を刎給へど色をを變せず申ける判官呵々と笑
 給ひ左程覺期せし者ガ戰場にて討死はせと鼠此おどく岩穴又隠との如何と訛給ふ昌俊色を正
 し一日命を全し透を狙ひ御首玉らんと思ひ身を忍候ひし宿運拙く搦捕れ候上は是非あし
 疾々斬給へどて其後の一言を獲せざれば先夜生捕と共に六條川原へ曳出さ鼻首を給ふ其盟
 むの土佐坊昌俊嫡子太郎從弟土佐五郎郎黨相摸八郎同太郎伊方五郎以上六人ぞ聞へける

○赴義經行家西國一條

去程に伊豫守義經公の郎黨を集商議有ける我昔日鞍馬を出しより以來父祖の仇を復し世の動
 亂を謚んと百辛千苦して木曾を平げ平家を滅て今既源氏の世となり鎌倉殿居ながら天下の
 權柄を掌握有事我功に非して何ぞや然も其功の賞せられず賊臣景時が讒言を信じて腰越より退
 版し剩へ土佐に命し我を討んとせらる事遺恨何事の是も過ん所詮讒者の毒舌も懸て死せ
 んよりの院宣を乞奉り機價此旗を揚鎌倉勢と潤燥く一戦し屍を戰場の土とせんこそ本意な
 らんと齒を切り仰ければ郎黨等俱も怒激し疾思召立せ玉へと勸奉るも判官御心決り即
 時備前守行家を召寄られ同道にて院參し玉ひ拜伏して奏し玉はく苟も義經四馬も東伐を

出武會の代官とまで本曾退討より以來所々の合戦も身命を抛平家を殺盡て神寶を都へ還御
 なし奉り世の動亂を謚源後復讎の素懷を達し頼朝居ながら二品の高位に叙せられ天下を掌
 にとる事偏も微臣が忠戦も倚り然も聊賞祿此沙汰もなく却て宛行処の処領を沒收し飽ま
 て讒者の言を信じ或は伯叔なる行家を討んとし亦は弟たる義經を失んと仕る條言語道斷の
 惡行上も知召処も候此上は頼朝退討の官府を賜り鎌倉勢と雌雄存亡を一戦の上も極申度い
 若御許容なきも於の力なき潔く自殺して怨を泉下も報べきに候と悲歎の涙を浮べ激訴有し
 ば仙洞も赦慮を傾玉ひ此議如何あらんと御商議有に衆議區々として一決せず然も左大臣經舍
 卿進出玉ひ當時浴中も義經の外警衛は武士なし然も此度の激訴御許容なくの亦も木曾が如洛中
 を惑亂せんも計れずある時は誰に命じて防禦させ玉ふべき一旦渠等が望に任して宣下し玉ひ
 追て子細を鎌倉へ仰られば武衛もさ此み憤られまじきかと仰ければ列卿此義に同じ頓て宣旨を
 賜ければ両將謹て院宣を頂戴し頓て退出して諸國へ羽檄を傳へ軍勢催促有と雖世の動靜を
 見合しと未だ馳參者となりけり時關東より土佐坊討れし由聞えしうば武衛以外も憤玉
 ひ重て征將を上さんと會談ある處も義經行家武衛退討の院宣を乞請諸國此兵を招聚るよ志追
 々註進有より今の誰渠と言んより武衛躬征伐せんと數萬の兵を卒し先陣の土肥次郎實平後
 陣は千葉助常胤と定ま文治元年十月十九日鎌倉を進發し十一月朔日駿州黃瀬川の驛まで出張
 有此事亦京都へ聞しうば判官諸臣を聚仰せけるは兄頼朝大軍を卒て攻上らる由さのみ怖も

不足とも味方は未だ催促し隨ふ兵を來らず多からぬ味方を所々分て初度此軍難義に及ば義
 經志ある者と却て敵とやららん迎を都て防禦せんとする謀略拙に似たり一日西國
 へ開き來鏡を避て重て宿意を達せんは一の親兄の禮を重んじ穩便此計とも成べしと仰る
 ん皆尤も同意しける故再行家と俱に院參有て此度頼朝某等を征せんを大軍を率て上洛仕よし
 義經是と拒敵仕らんは安く候へども帝都を騒し奉る事天聽への恐と申流石兄も向弓彈候は
 んをうしろめなく候へば願ひ四國九州を兩人へ下し賜ば一日西國へ啓き其難を避べきに
 いと奏し玉へば諸卿亦會議有て申請し任佐大辯藤原光雅を以て四國を備前守行家も賜り九州を
 ば義經に賜べき御下文をぞ被下ける兩將欣悅斜ならず此上は急ぎ任國も赴うんとて太夫判官
 友實に船どもの用意させ同年十一月三日京都を啓行ある先備前守行家櫻威の鎧に同毛の五枚
 兜を著し月毛此駒も跨り三百餘騎もて先陣も進れば判官の赤地の錦の直垂も萌黃威此鎧を
 著し龍頭の白星の五枚兜を頂玉ひ太夫黒の駿馬も白幅輪の鞍を置紅此厚房掛て打跨徐々
 と歩ませたまふ其跡誠も稀代の大將軍やと人々感じ動譽喚けり隨逐の輩も前中將時實侍
 従良成伊豆右衛門尉有綱堀彌太郎景光佐藤四郎兵衛尉忠信伊勢三郎義盛片岡八郎弘經武藏坊辨
 慶を始め龜井増尾常陸坊熊井鷲尾など彼是凡二百餘騎其外愛妾靜を始とし判官に馴此給ふ
 女姓十一人を召具し津國大物浦も着たまふ此由傳聞うねて判官は恩澤も浴せし者此所彼地より
 馳乘程なく御勢一千五百餘騎となり各大松小松も取乗帆を海面も列艦賊船歌を調て鏡

を解乗出まはるの勢ありし形勢なりなり

○河尻合戦忠信弓勢之條

茲も攝州此住人多田藏人行綱豐嶋冠者小満太郎など判官の西國入部を聞天晴討て鎌倉殿の槍
 實も預ばやと面々の郎黨五百餘騎兵船を調へ攝國川尻も支へ待かけたり判官方もは斯ども不
 知同月五日川尻も漕出沖此方を望ば船艦も舟楫播雙たる兵船四五十艘も白旗押扣たり弁慶斥
 候を出て親しめ判官此御前に参り攝州源氏の者ども君此御下向を妨んと出張仕候よし憎
 き奴原が舉動御任國の御首途も渠原が首取を御覽も入奉ると既座を立んとするを片岡八郎鎧
 袖を扣へ凡釋門の習無縁の者を吊ひ結縁の者を引導するある法師とはいふべけれ軍とだよ
 言ば御坊此魁を望玉ば噫呼がましき弘經一矢仕らんと互も魁を争ひけるも佐藤忠信進出
 よしなき御邊等が睜も敵近付ての叶まじとて某射取んと滋目結の直垂も萌黃威の鎧着て
 三枚兜の緒を締夷物作此太刀を佩廿四指たる切羽の征箭を筈高も負なし重藤の弓の真中握り敵
 船近く漕寄も船先に仁王立し抑我君西國御下向有所も御前路を塞ば何者ぞ急ぎ松を除ば其分
 さなまば一々射殺くれん如何や如何と呼りければ其時敵の船艦より爽も鎧ひたる武者一騎表
 出是は攝津國の住人多田藏人行綱也伊豫守殿の御事鎌倉殿も對し隱謀の企在により源
 二位大軍を率て攻上玉も處判官對戰不抗推て四國九州を申下し御下向在よし兼て承りさせる
 遺恨はさむらばねども某等が領分を容易も通しやさん日此御答計がたく是も依て大和銀

西の方西の方黒雲俄然に千丈へ切てがゝる何さま日の昏方昏方は大風吹出なん自然風落来らば如何成成陰陰荒磯荒磯も船を乗上よと下知し給ふ辨慶松の船先船先も立上り熱々や打眺打眺あら不側不側やは風にてはなく候彼御覽候へ雲中雲中も赤旗二流現現て甲冑甲冑共競々として見たり何様此年月平家の公達公達を始數万の兵卒骸骸を西海西海へ沈恨恨を波上波上遺遺ば其怨靈怨靈の爲業爲業と思はれいと申ければ義經公聞召何條何條さる事あらん一騎一騎在眼空花在眼空花乱墜すと謂り千變万化奈何ぞ驚驚に足んと自若として騒ぎ給はず辨慶押返し彼雲次第次第も此松松近付近付はは松中一人も生る者生る者いまじと稍問答稍問答に時移うち金鳥西に沈果順風帆順風帆も打とさしを晴渡し空空此色俄然俄然と變じ乾の隅隅も當て雷鳴雷鳴夥しく震震ひ天地も覆り海水も汰上汰上のと怪まる今冬今冬未未お到て不測不測此瑞現瑞現を示し給ふ事よと軍士衆眉衆眉を擧げる時に揖取揖取船船も踞踞る唯今の鳴動鳴動の聲雷雷にまはなく世の不祥有へしと多田の御廟鳴動仕り御廟鳴動仕り也と申なれば船中船中此面々心中心中穩穩ならず思所思所武庫山武庫山の岸より黒雲起風前に塵立散滿塵立散滿たる雲中より光物發光物發と弁慶仰見仰見る黒雲の裡裡も赤氣赤氣あるは大凶の驗驗なり且京師京師の出陣出陣壬午壬午没日没日も當り今日今日乙酉乙酉松乗松乗凶日凶日なり多田の鳴動鳴動を源家の祖廟祖廟なり天文雲氣天文雲氣其凶祥凶祥を示志給ふ事疑なし如何なれば我君神武神武千英千英万雄万雄も踰踰させ給ひながら神佛三寶神佛三寶の冥慮冥慮も合せ給へざるや只御運の究る所究る所是併併ながら平家の魂魄魂魄天の一元一元も飯事を不得不得苦海苦海の底底も沈沈て惡靈惡靈となり恨をなす所か好々好々我手練我手練此程を見せんと五人張五人張も瞽目瞽目矢把添矢把添て打番兵々打番兵々と三度並打三度並打し大音上大音上て抑保元の昔昔より平家權柄權柄を執執て君を蔑蔑如如し万民万民を掠領掠領せ其積惡積惡身を賣賣て一門四海一門四海の水屑水屑と成成しは

是是自業自得自業自得なり何ぞ恨恨を泉下泉下遺遺す謂謂る有有ん生る時時だに此弁慶弁慶が矢尖矢尖を懼懼る况况幽冥幽冥の陰氣陰氣も志志て争争障礙障礙を爲得爲得ん南無本覺南無本覺法身法身本有本有如來如來と唱へる差探彈詰差探彈詰散々散々も射たりけり其矢何處何處も落付落付とい見見ぬぬども黒雲陰々陰々と志志る引退引退夕日影夕日影も是を見れば黒雲黒雲中中も一片一片此白氣白氣皎々皎々として凄く種々に鎧鎧たる兵兵馬馬轡轡を嚙嚙て先馳先馳すれば風聲風聲を守護守護して異形の鬼類鬼類前後左右前後左右も列り或は五色の旗旗を靡靡し後軍後軍に進亦進亦は朦朧朦朧を雲の波波も押浮押浮れ戟矛刀劍戟矛刀劍の露露は雷光雷光に相和相和し其形朦朧朦朧とし見え分分ず人々大い大い驚驚き彼は奈何奈何と言んとすれば風風も順雲順雲のおとく漸漸として消失消失する人々大息大息得得つて繼慶繼慶弁弁なりりせば如何なる變事變事や出來んと互互に無事を祝祝し合押合押や者者ととと曳曳々々聲して航程航程も淡路の渡り水嶋水嶋を幽幽見見る邊邊も暮行空暮行空の氣色倉卒倉卒も變じ黒雲四方四方も立掩立掩ける是是の亦何成事何成事もやといふも弁慶屹屹と見彼彼を風裏風裏よといふ間間をわらず逆風逆風冷しく吹落吹落霰霰交交の大雨降出降出逆浪逆浪天を漫漫し松を沙上沙上沙下沙下も水主水主根探肝根探肝を消消船船も走り脇脇脇脇を挿挿秘術秘術を盡馳盡馳回回とも夜色幼冥幼冥として東西東西を辨辨せず風風も益益強く吹荒吹荒て帆柱帆柱碎碎楫折楫折碇碇も大綱大綱も揉切揉切て進退進退更更も自在自在ならず今や此松此松千尋千尋此海底海底も沈沈むらんと見れば松中松中の人々人々船底船底も倒伏倒伏聲々聲々も泣叫泣叫中中も判官判官も馴馴昵昵し上臈達平大納言上臈達平大納言此御女御女右大臣殿右大臣殿の姫君姫君唐橋大納言唐橋大納言の御息女御息女鳥羽中納言鳥羽中納言の御娘御娘白拍子白拍子静静を始始弱弱き列妾列妾は更更も生生たる心地心地なくゝる憂目憂目も逢逢ならば都都も止り免免を角角も成成べきも鱈鱈よる淵淵も身を沈沈海松海松和菊和菊生生てふ水底水底此水屑水屑とならん悲悲さよと蓬漏蓬漏頭頭も涙涙を争争ひ聲聲も惜惜まらず泣玉泣玉判官見目の物憂物憂に此所此所は何成所何成所ぞと問玉問玉へば楫探一人楫探一人船船も這出這出闇夜闇夜の上上も雨雨ささ降降し

一ば何成所とを不辨候へども定て阿波の鳴門よてやいらん當所こそ横沙にて究て大事の所よて
 一ば迎を御船乗取事の叶候まじとゆよぞ船中此人々呵と許み泣伏ける辨慶船先よ立出角高珠
 敷をさらりくと押揉て南無八大龍王は本地千手八部觀世音よて御坐在大悲大慈の誓言空か
 らずんぬ或漂流巨海念彼此力を以て波浪不能没の利生を現し玉へと肝膽を碎祈れば觀音薩
 垂も其法力をや感じ玉ひらん今迄の北風忽ち南風と變じ判官の御船を矢此おとく吹戻けるぞ不
 測なる判官大いよ力を得玉の船子を勵し航志め給ふ程よ夜既に東雲近くなり風を少し穩まな
 りければ早く陸地よ航付よと焦燥玉ふ水主楫執承はり櫂を取櫂械を整して程なく大物の磯邊よ
 航付たりされども軍勢此乗る船行家が船を始一艘を見はず失よける判官歎息して曰らく
 我昔の甘寧が綿の帆を張蘭の棹桂の楫舷を南海の波よ敲しに今よ運命既に盡て事茲に及べ
 り女姓上謁達へ都へ飯給へ吾若再度 螭龍の威を奮る愁眉を開身とをなり契朽すば亦ある懸
 逢進せんと播口 説 謂ば姫君達は涙にくれ玉ひ是は情なき仰のな年月此契を思召は虎伏野邊の
 果送も伴ひ玉へと取抛泣玉ふを種々よ言宿皆夫々よ郎黨を副へ都へ送せ玉の我落人此身と成
 て行衛不知とも奥州高館へ行んあひだ彼所よて再會せんと約し玉ひ御身は鷲尾三郎佐藤忠信白
 拍子靜と唯五人にて船より上り其夜は天王寺の邊よて止宿し玉ひけり



去程も判官は天王寺を立て何國を宛とせし郎黨龜井片岡伊勢駿河能
 井増尾常陸坊等追々馳來り互に無事を賀し先々行末の事をも議せんとて一個の隱家を需暫
 く日を送り玉ふ所も商街村落とも何となく物騒まじく此所彼所をて聞ければ判官辨慶を召れ
 事の跡不審し、汝見て來り候へど仰するよぞ辨慶承はり馳到る事の様を窺ふ太宰權帥の
 院宣を賜り義經行家を擲捕て進とべきよし畿内近國の地頭莊園も觸流さるゝ趣高札に記して
 建たり辨慶驚き王法亂れ國家衰微の驗もや昨日の九州四國を宛行はんと此院宣を賜り今日の亦
 山林河澤を搜し需崩進せよと此勅宣は是の事も何成朝憲ぞや論言は汗れととし聞なるに澆
 薄かりける世もは成たりと一度は憤り一度は怨を怒れる眼に泪を晒え急き走取り斯言上し
 ければさしもの名將も虎の尾を踐怖、汚身の上も迫り天地廣と雖も一身を隠べき所なく日月明
 なりと雖長夜の闇も迷心地し玉ひ萬方今は敵なれば自害せん此外施すへき謀なしと腰刀に
 手を掛玉ふを辨慶急も押し是の大將とも覺ぬ汚短慮うな何卒一旦與羽へ下秀衡を憑て素懷の旗
 を開玉へと諫争みしかば漸々お聞納玉も今は當所の住居も成難しと主從是彼廿人許芳野を指
 て落行玉ふ抑和州芳野山といふの日域無雙の嶮岨もて其奥深遠なるおどのかり不被知ばをろ
 ここの芳野とも詠る深山なるも時今支冬此季なれば溪も小河も氷めて満山雪も埋れ唯白銀を束
 るるごとし斯る切所を判官主從草鞋踐しめ分入つゝ一二のはさま三四此峠を踰杉の檜といふ難

所も迎着けるお静も尙是までも離奉らず歩もなれぬ道芒も裳は雪袖の泪もそぼぬれ目も當ら
 れぬ形勢なれば辨慶判官を疎て斯る落人の汚身も女姓を具し玉はんは後日の聞にとうしるに
 たぐひ静は是より都へ飯し玉へと申ければ判官も理お伏し玉ひ實我ながら是迄静を具したる
 事諸士此嘲とし愧とて静お對玉ひ宿世如何なる契もや假初も相馴てよりの片時を汚身を見放
 がたく大物もて自余の上臈の都へ飯しゆれども汚身は尙是までも伴たり然とを今は日本國中を
 敵も受し義經何時敵も出會討死せんを量がたしさるゝ最斯の際までも女を具したりと匹夫下郎
 に嘲られんも弓箭の耻辱なり且此山は往古役此優婆塞の踐分玉ひし菩提の峯もて女人禁制の
 掟世のしる所なり彼も付是も付迎も汚身を伴ひ行ん事成るゝければ是より花落へ飯り母前司が
 方も潜て吾音信を待玉へ殊も汚身は既も妊孕して常ならぬ身なればかゝる嚴寒も犯さるゝも身
 の爲好からず萬一吾身路次にて戰死せしと聞ならば墨染の袖も姿を變後世菩提をも吊玉へと搔
 口説曰ければ静は唯道邊も泣倒是のろも如何なる汚掟や一世ならぬ契さうらへばおそ賤き
 身の源氏の公達に馴昵進せ一度鶏鐘を恨しよりは兼て命を君に獻りし故四國は波の上まで
 別奉つるべしと思侍らず薩摩瀧鬼界の嶮岨の疎蝦夷が千嶋の奥までも汚共し奉らんとて是迄從
 ひ奉しものを今更汚暇賜んどの神ならぬ身の思きやされども名此穢と申佛此穢もせんそ
 べなし茲より都へ飯り侍とも妾と君が中らいは世人よま知所もいへば六波羅鎌倉などへ召
 崩れ君此汚行衛申せとて火水の阿賚も逢亦は辱を受侍らんよりの賁泉の旅も赴なんるそ中

やたやとくひひなん唯當坐にて汚手に懸させ給へとて汚膝の上お顔をわて聲を立てど泣伏たる
們官を始れ汚側の人々も其心底を推量袂を沾さぬはなうりけり判官涙ながら又曰申所理
なれども汚身を害志棄る程ならばあどて吾を難而一命を存べき是も並居輩は皆一人當千の
勇士もて今にもあれ鎌倉へ降参せば半國一國の主にならん事安あるべきも一旦主従の契約せま
義をわそれず有る甲斐なき義經を護傳き今一度戀憤の旗を開んどの千苦萬勞争う他所も見なさ
るべき是等の理を辨へ都へ振り胎内の兒を恙なく誕生して養育し空行月此廻り會時節を待候
へど種々も諫賺し玉へば静もさのとは辭んやふなく漸々納事せし跡なれば判官歎の中は怡
悦ありて髪鏡を執出し給ひ是さる日夕に我面を寫し手馴したる鏡なれば吾事を戀しと思時此
鏡も對たまへとて静も與玉へば胸も當て泣沈たるが泪の隙より一首を詠じける

見るとも嬉くもな志増鏡戀しき人此蔭をどたねば
人々聞えいと涙を催しけり判官亦枕を取出して與へ身を放たず篋も見玉へとぞ躬も一首を
詠じ玉ふ

急なとを行もやられず草枕静かなれし心ならひよ

其外財寶數多取出して與玉ぬ其中お殊も御秘藏有ける紫檀の筒も羊の皮も張たる啄木の調の
鼓を賜りて仰けるは身を知とく此鼓はわきそ我愛斷の器なり白河院の汚宇法住寺の長老入
唐し飯朝の砌り唐帝より二品此重器を賜りたり名曲といふ琵琶と此初音此鼓なり琵琶は大裡に

○義經主従諸所流落條

心消し横川の豊範を打取りて大衆を散々に追散せば左も右も打笑今の強て腹切も詮なけれ
一日此所を落延て再度君も廻奉つらんと山路を傳ひ溪を分ち艱難一方なら老跡を味まじ
て遂に京洛へ登り四條室町も通眺し女在しかば其が方に濕居て鋤も判官の安否を伺ける
源廷尉義經公は佐藤四郎兵衛忠信に別給ひ尙も芳野の山深落行給ふも弁慶申けるは忠信君の御
名代に討死仕るとも萬一見知する者候は亦々衆徒們御後を襲奉らん列々沓を逆にのきて落
給へと申々れば判官不審給ひ是奈何成故ぞと問給ふ弁慶が曰昔天竺志羅那國の玉波羅那國を攻
んと此意あり然も波羅那國の大王千頭の象を飼しが中も一日も食とる事四百石群
臣商議して是無益の獸なり早も放棄給へと諫しうども大王諫を不納尙も食し志羅那國より
多勢もて攻來るよし聞ければ大王彼大象に向ひ汝獸類たりとも年來の恩を知らば我軍此魁して
敵を取れよと言舎ければ大象頭を低て領掌の跡をなす扱は心安しと大象を眞先も追立敵軍も
向しも大象の牙を鳴し鼻を怒し敵軍も對て吠る事雷霆此おとし志羅那國の兵卒是を聞て大いも
恐怖とる所を大象走到て三軍を散々も踐殺す程も志羅那國此兵死を致者數しらず大王を僅も
四人も供奉せられも落けるが折節冬の半もて雪深く降積たり一人此智臣王も勸て沓沓を逆
も履せて落るとなり案のおと波良那國の勢追遠來しが足跡の逆あるも狐疑を生じ遂も不
九十八 追引返けるもより志良那國の大王辛き命を助りて國も飯り其後謀略を廻し遂も波良那國を攻亡

まけるなり是法相三論此經中又載る故事にて候と語ければ判官手を拍て感賞ましく眞に武藏の文武二道の達人りなるとして列位香を逆も履せて落行給ふ人跡絶る嶮岨なれば或時の高嶺の雲を凌ぎ或時は幽谷の流をのたひ千辛万勞營も物なく山路元來雨なふして空翠自然衣を濡しぬ向上は岷々たる万仞の疊嶮雲も聳を肝を冷し直下は滔々たる千丈深淵藍に染る毛孔を寒しむ斯る嶮難を経るに糧食の用意乏ければ判官を始御供の人々を飢疲て墓々しくも歩得ざりけりさらぬだも旅路は心を碎ならひなるに雨を合る孤村の樹夕を送る遠寺の鐘御心を悼したるのなく辛う志す芳野を離れ多武峯に迎着給ひ其夜は叢祠の露に袖を片敷て大職冠此御影も向ひ終夜武運長久此所念し王ひ翌は十一月廿四日南院此廡室も入玉ふ當院の別當十字坊の親き源氏なりければ斜ならず尊敬し天晴當峯寺院廣大にて衆徒も多勢ならば御味方として鎌倉勢に一矢射て御憤憤とを露し奉るべきに衆徒も多からず院内亦狭ければ其事叶はず承れば北條時政君此征將とし大軍を引卒し京着仕るよ志然ば當寺の御住居も危を候らん是より奥なる十津河の四方皆嶮峻よしと十里廿里此間の鳥も翔がさき要害もよ其上人の心質朴に弓箭の道も疎からずいへば暫時御逗留在り大義の計畧をもなし給へども申ける判官御喜悅限なく兎も角も善も悪も思みいと仰ければ十字坊領承し其頃多武峯の八惡僧と聞へし道德行徳拾悟拾禪樂達樂圓文妙文實とて血氣強盛此法師武者八人眾以て判官主従を十津河へ送進せたる茲も於て暫時心を安んじ給ひ日々に大義此計畧を商議し給ひけり

○義經主従北國へ没落す

是より先判官の十津川に潜る居給へども當所の世の動靜を知るに由なし大義の策を廻るに便宜悪之是に依て遂に此所をも忍出南都へ赴き給ひ東大寺の得業聖佛のかゝゑて師擅の實有しかば立寄給ひけるに得業大いに悦び他事なく響應し給ふよ判官御喜悅限りなく東大寺に足と停め給ひしが隱匿の人々も別を告げ憂事に日を送りけるが尋でまた東大寺と出でられける扱も源判官義經公の東大寺勸修坊を出給ひて後は御室御所山門など身を隠る世の動靜を窺給ふも兎角鎌倉よりの穿議強く民の煩ひ甚しうりければ所詮奥州へ下り再度秀衡を頼ばやと潜り離散しする郎黨を招聚て商議し給ひ奥州へ下らんには何の道か善るべきと仰ければ辨慶義盛の輩申るは東海道の本道なれば人目も繁候へん東山道の入此往來の少く候べけれどと嶮峻の山路のみにて萬一敵も出會なば難哉避る路なき難澁候はん是より北海道より越前敦賀の津より出羽へ通船も便然して下り給はんころ可然候はんと申ければ衆議是も決志ぬ判官亦曰風も聞ば我徒を擒ん爲諸國に新關を居たりと申せば此儘にては叶き如何なる姿に省装して下るべきと問給ふ増尾十郎答て心易く下り給はんとならば御剃髮有て出家寮門此跡も扮装して御下り候へと申判官稍頭を傾け給ひ是もよと雖も南都にて得業上人の出家せよと勸給ひしかども今一度遺恨の旗を揚列位も數度の戦功を謝せんや思辭し身が今一身の置所なき

儘に剃髪せん事無念ならずや此外又計畧のなきると仰ければ片岡弘常進出然ば山伏の姿にて
 渉下りあらんは如何や申判官亦思慮を廻し給ひ此義甚だ善と雖も路次より越前より氣比金剛界此
 宮加賀に白山出羽より羽黒など山伏の行所多ければ自然山伏も出會たらん時一乘菩提の望小篠
 釋伽ヶ嶽の形勢或は修驗道の禮義故實懺法などを問ば誰り墓々志き答をなして通べき畏は
 過あらしと仰るとるに辨慶進出夫程此事は最安く候君の鞍馬に傍座在て偏く諸經も涉獵し賜ひ
 常陸坊は園城寺に修學し某の叡岳も生長て阿字真言大日不二の法を究て天台も當位即妙不改
 本有の道徳を行住坐臥も修行台藏金剛兩部の旨も通達仕れば法令に於ては味事候はず亦山伏の
 勸行懺法阿彌陀經など何程の事り候べき疾々思立せ賜へとし路次に何國此客僧すと問ば越
 後迄は羽黒山伏の熊野詣して下向とるなりと言越後より彼方までには熊野山伏の羽黒詣とると申
 なん或人の申せしは羽黒山大黒堂の別當荒讚岐とすの某も寸分違はず面影格好似たりと語候
 倚て某は大先達荒讚岐と名乗候らん常陸坊の小先達と志て築前坊と号其外片岡は教の君伊
 勢は禪師の君熊井の治部此君其外上野坊下野坊上総信濃など思々に名乗君の恐ながら人を能
 見知を候はんずれば笠深く被賜ひ剛力の体にて人より引下て歩せ賜へ御名の大和坊と叫候はん
 鬼三太の普通の旅人の躰も省裝して一日路或の半日道先へ立て關所々々の櫛を竊ひ候へと殘所
 かく指揮しければ判官始て衆人其謀略此精密を感嘆し早々用意せよとて兜巾襖掛笈金剛杖をば
 じと山伏の所持すべき調度を悉く調達不日として十分事足ければ今出立の期となりたるも權

頭兼房判官も向ひ願は今出川も御坐在北の方をも何体もと拵て召具し賜へと申ければ判官
 と流石便なと思召とも辨慶義盛等も思はん所も如何と默然として御座ければ辨慶御心中を察し
 入すけるは山伏の姿も女性も召具し難しと雖も流石も捨置せんを痛めければ如何をして
 も具し奉ん去ながら世中の人心反覆は常のなりひ候へば一旦彼方の御心を試見玉ひ實も下
 られん御心ならば兎も角として具し進せ玉へとやに判官も兼房も其厚情を謝しさらば先彼方
 へ行んとて判官も山伏姿に上より小袖を召れ辨慶兼房を召連玉ひ夜中竊み一條今出川の館を到見
 玉ふも荒たる宿此ならひとて人目忍の軒の草露も置添離の梅誰待鏡の匂ぞと光る源氏此古も
 今更思知れつゝ兼房も案内させて入給ひければ北の方の夢かと許悦び給ひ端近う轉出兎角の
 御詞もなく先立涙も昏給ふ判官も數行の泪を抑給ひ往年大物もて別しよりは諸所に漂浪して音
 信も通じ進せざりし堅固も居給ひし事の嬉しさよ吾思子細あれば奥州へ下り候夫も付身身を
 と具志て下りたくは有とせ世を忍身の悲しさも馬車を意も任せず山川萬里の嶮険を跣歩もて伴
 ひ進ません事叶まじければ此度の殘し置進せ明年の春の頃より涉迎を進せん暫し此別なれど暇
 乞の爲参りたりと曰ひ北方涉慶曇せ給ひ難面君の仰やな人の心は飛鳥川昨日のばせし瀬枕も
 今日ば仇なる世のならひ今逆も召具し給はぬ憂身なれば何しと迎玉ふべき實や人生勿作婦
 人身と唐土人の筆の號今身の上に被知侍る十餘り三といふ年垂母も別進せ魚比陸も上
 り島の巢を離れる心地して片時を安き心もなかりしよ平家都を落玉ひまより三年の程の荒き浪

の上苦海の船は漂ふ憂事のをこ水鳥此音に泣ありす身なりしと嬉しき君が情を受迷ふ山路の杖折を需め闇の夜に燈を得し思せしと幾程もなく大物の浦の波此立別れ進せ頼む木蔭は浦雨の露の命の消をやらす音信をのみ松虫の音を泣明す憂思さへあるよ何となく心苦しく醫師よ委さむらへば若や孕妊などよやと申せ老が實も日添月増て人目包じまも心愛誰もる斯と岩田帯包むとそれと顯て今よと六波羅へ聞へ鎌倉へ捕下されて北白河の静御の例もやせられんと且暮此物思ふ朽さぬ袖もへべらぬものを打棄て下り賜はんとや路次此妨と思玉は唯刺殺之後又下らせ給へや御膝は鏡を當闕焦て泣給へば判官を辨慶も扱ひ妊身し給ひしが左在とは長途此旅路難難なりとは思ふも流石に拾置進せて亦々敵手又出生此兒を害せられんも遺恨は上も遺恨なり是は何とせん如何よせんと亦一雙此患を増けるが辨慶胸を定實は君をも具し奉ん爲御迎ふ參候なり我君始兼房辨慶等を皆山伏此体も身を紛裝て下り候へば君も兒此跡お下らせ玉へ北陸道と申は山師の往來多く聞立學動御言振も男子も似道を歩玉ふも左の御脚より踏出し玉ひ少も御本性を悟られ給ふなど申ければ北北方御悦斜ならず扱神嬉き人の志かな疾々取繕てよと仰るにぞ辨慶承り多髪梳反しさしと飽々しき御髪の方お餘を肩に競玉ふ何と剪末を細くありなして兒髪は結立薄化粧に眉細く畫多裝束は匂色も花田を引重裡山吹の一重唐絞の小袖は播摩淺黄此帷子を着奉り白き大口お顯紋紗此直垂召せ異此行纏に草鞋履し進む赤木の柄の小刀よとみたる扇子指添持物に漢竹の葉調亦紺地錦の經囊に法華經の五の

番を入れて扱させ奉る是は提燈品とて女人成佛此交なればとなり斯取繕進せければ眞の兒も見てさせ給ふもぞ判官大いよ悦び玉ひ天晴兒やいと吾も山伏姿見せんとて上此小袖を脱棄給へば柿此衣に布袴袴掛等を着れ兜巾取出して頂給ふ兼房潸然と涙を流し哀樂轉變の世中とは申ながら君の正しく清和天皇は御末北北方へ平大納言の姫君もて昨日は金殿玉樓此内も花を愛月を弄し玉ひ假初此遊遊行も金輿輕軒に傳れ玉ひ前從後隨奇羅を盡して圍遶し奉り亦も戰場も向給へば金甲龍馬を御身に倚猛將謀臣星の如も房從じて大軍強敵を戦慄させ金城石廓も自然破れ向所敵なく威武四海を轟し給ひしよ何しかけふも移變も科數行脚の御姿となり天も開り地も開して落路の旅も馴れ陸路を辿玉はん御運の末の悲さよと掻口説泣ければ判官も北の方も御手を抱組哀涙は襟掛の袖を浸さ給ふ辨慶も眼を摺赤めながら呼心弱し兼房我君東行の御首途なるを思ふしき涙をな落されず疾御酒宴を促し街啓行を祝しいと諫ければ兼房涙搔拂ひ寔我ながら過てりいと御酒宴の用意せんと厨此方へ立て行辯慶は何是と發足の心構をなと折しとぬれ兼て合圖や有けん常陸坊を先とし龜井片岡伊勢駿河熊井鷲尾以下十余人の郎黨列位山伏すがたにぞ入來りければ判官欣悦限なく列々を席上へぞ召れける程なく兼房酒肴を調老携出君臣車坐して首途此宴を促さ鰯を順逆も建しければ判官は都の余波よとて葉調取出老吹澄し給ふもぞ北北方も御琴を弄今様をうたひて合奏し給ふ俱も妙所を究め給へば或は和し或は離し索々冷々として怨がみどく訟ぐととし滿坐是がたたま心耳を傾け天晴名曲や榮花此

六十九 春此遊宴ならましうのど列位悲哀の涙は席上を潤し飲たる酒も胸裏に沈み頭痛を覺ける斯て五更の天も向たれば盃盤を収め未夜深き今出川の亭を啓行ある其人々は誰々ぞ源廷尉義經

公御夫婦武藏坊辯慶伊勢三郎龜井六郎片岡八郎駿河次郎杉目小太郎熊井太郎鷲尾三郎増尾權頭常陸坊海尊鬼三太清悅其余雜式二人是彼主從十五人時の文治二年二月二日年月任馴し九重の帝都を後みなし未爽反る如月の朝の霜お旅衣をぬらし行どいなく栗田口を過り松坂ふ行のゝるに東雲稍引別れ鰻籠たる霞の中を旅廣幽は鳴連て通を判官聞召一首を詠じ給ふ
三越路や八重は白雲かき分を羨しくも販る鴈がね
北の方と同じ

春をだに見捨て歸る鴈の何の情も音をば鳴乱

見もの聞ものよ付て御泪の媒ならぬはなし逢坂山ふる著玉はば彼蟬丸が住しわたり藪屋の垣根ふるはべ艸の生出て有けるを一本摘て北の方よ向ひ是は何といふ艸ぞと見せ給へば都よて見老よりもしのぶ哀は打浴ていとあはれは侍りなとぞ

住馴し都を出て志のぶ草ちく白露はなみだ成けり

と口號給ふ程なく大津は著給ひけるよ喜三太邊しく馳歸り頼田は手は隊を立て我君を捕んど捕たり御油断候など註進しければ君臣大いふ當惑し先々謀を示合んとて當所の商人大津の次郎といへる者許は宿を借とと二間所に入之密に商議し給ひけり

○辨慶大津次郎を義經よ見參せしむる條

買に隠たるより顯さるはなしと謂る古言のおどく判官主從贗山伏と成て都を落玉ふこと早と六波羅へ泄聞る北條時政檄書を諸方へ傳へ搦捕か討取りして出す者に過分の檢賞を宛行んと編渡しおは大津は領主山科左衛門尉三井寺法師をかさらひ瀬田は手を固めける然る判官の宿り玉へる亭主大津の次郎が妻の貪慾非道の愚婦にて竊に判官主從は跡を窺ひて獨咲し次郎が飯宅を待て耳語けるは御留主中は客僧十四五人止宿たり情其爲跡を見るに衣紋は摸樣人品骨柄凡庸此人ならず如何様彼を渠判官主從にそや在らめ御身の親類妾が兄弟等と呼聚臥寐へ仕蒐討り搦かして六波羅殿へ差出さば莫大に御褒賞預り一門不時此得分を得りべし早々人々を集給へと焦燥たり次郎聞之興を覺し是は女お似なきや條かな假令其客僧達が判官殿主從たりとも恐多も頭殿の伊公達鎌倉殿は弟君に在と者を我徒とどきの賤き身とえてさる行迹のなるべきか斯る事此訴人して却て刑れし例往古より度々あり近の長田庄司忠致六波羅の内意を得て情なくも義朝公を弑志奉り却て其身は不義を擧られ死刑は被行たり從來我身米錢に不足なし何の爲に非道は賞金を望むべき亦假令討奉んとすると鬼神を欺く判官殿に武藏伊勢なんどの一人當千の人々扈從して守護すれば究竟は武士三百騎五百騎向たりとと者ともし玉の増て况言甲斐なき町人百姓三十騎五十騎寄ればとて何程の事かなし得ん毛を吹え疵を求るとは斯る事をいふぞろし亦眞の客僧ならば金剛童子は冥慮も恐し唯惘よ變應志進せよと諫りけれ

ば女悪さかなる顔して嘲笑ひ扱も和殿は家刀自奴僕は甲斐々々しゆと聲を叱もそれと斯る際に
 は思外臆痛なる（こしめけ）殿うな好々寶此山入ながら手を空うせんよりは領主へ訴訟賞金は妾一
 人の有とせん其時物欲顔ばしなせられぞと咳小袖取て打掛門へ走出るにぞ次郎憤然として
 大に怒り風も靡く菊童男も順ふ婦もろめやすかるべきに無道不義此言條こそ悪けれとて有合極
 の棒を追把て走出門前へ丁と撃倒し腰を折よと打擲れば女の大笑腹立大聲を上て大津次郎
 あり判官主從隠貯しぞ人々領主へ訟へよと匍匐けれどを元來近隣此者もいたく憎れたる女
 なれば誰取支る者をなれば次郎は思程打擲し曳提て一間に打籠急ぎ客僧此臥給へる亭へ行低
 頭し愚妻もて候者貪欲と眼眩と客僧達を判官殿御主従なりと僻目し領主も訟んと申を辛じ
 て追止打倒し一間縛置候されども高聲も匍匐候へば方一領主より征兵の參ましきよを候はず
 勢田は多勢に之隊し候間とても安々御通あらん様も候まじ所詮某が所持此小松も召れ夜の
 中お海津此浦迄御渡り候へ某御供仕り送奉んと實意面も顯れてやければ弁慶甚だ感心し我徒
 は身よどりて覺あられと路すがらを判官の躰山伏となりて落給ふといふ事聞り御邊の言の
 おどく連坐の難も逢て所を騒し日數延ては路次此都合も悪し主の厚情も任せ松を借用して疾渡
 はやと左右を顧り列位然べしと同意しぬ次郎承り甲斐々々しく松を調へ客僧達を乗進せ頓
 て大津の浦を押し出さるる折節順風快く吹ければ帆を更上て走る程も松の疾事箭を射がごと
 き浦々を馳過て今津の浦をを後よなし海津の浦にぞ着あける大津次郎人々を松より下志別進せ

を告之漕師とぞ辨慶密に判官も向ひ渠は下郎ながら眞實の者と見へ候へは御名をを申聞せ引
 出物取せ候はいや申に兎も角をど仰ければ弁慶次郎を近く招き汝が志の健氣さに申聞ぞ
 是よりさらせ玉ふは實は清和天皇の御末源廷尉義經公もて御坐在を後代迄此守よせよと笈の中
 より萌黄句此腹巻も小福輪の太刀を沿てぞ與ける「此太刀腹巻今も坂本の町家に傳來せりとぞ」
 次郎涙も咽て頂戴し初より斯とは見奉候へども世を忍玉ふ御身なれば問奉らず何國迄も御供仕
 り御奉公な志度候へども却て尊慮の程も恐多候へは是より御暇申上候とて遂に大津へ漕師りけ
 り次郎が行追尋常の武士も及ば志君をはりた人々感嘆志たりけり斯て次郎の翌日私宅へ歸り
 妻の閨房も入て見るも痛く撃れて腦臥居たり是やと叫び起しけれども答もせず次郎詞を和げ
 和御前は眞の客僧を判官なりと僻目し既も我も恥を與んとせしぞや昨夜松も乗之海津迄送り
 船賃を乞ふも山伏の法に船賃取せし例はなしと争り憎さも搜取たる物を見よと太刀腹巻を枕
 邊も置ければ寐亂髪搔退恐しき眼色して兎見角見微し打咲て是の吾身の得分よせたとて稍氣色
 を直しければ次郎心中に惘果世も貪欲成痴者やと爪弾志忌疎じたり

○弁慶智越三口關條

去程も判官主従は大津の次郎が情もて安々と海津の浦も着是より陸路を急ぎ給ふも北の方へ歩
 も馴給はぬ道芝も行腦玉へば盪越といふ所も暫時休せ給ひ北の方を慰んと列位可笑戯たる
 話をせしが中も片岡八郎語けるは某が古郷紀州有田の山寺も究て性急なる法師の候ひ志が

百 或時極家へ弄時を招れ膳部へ向ひ食しける。芋の子を煮て菜とせしうば取上る箸よはさみ食ん
ぞれば山芋子なれ兎角すれど迂りて廻りてはさみ得ず彼法師大に怒り頓て芋を掴んで庭に投付
ける。尚ころくと轉しるは益々腹を立て庭へ飛下り有合木履を履芋子を踏碎んとする。心焦
燥て足定らざれば膝度毎木履の齒間へ入て碎ず法師怒り堪りぬる土にまみれし芋子搔取る口
中へ入嚼碎て吐出しける。芋子小石此付て有しかば向齒二枚噛折て數日疼痛し病臥ひひきど
身形可笑語りければ判官はじめ十余人の輩抱腹して笑とよたきけり北の方をいみじう興し給
ひしかば亦鹽越を立て歩を進め給ふ。掛腰松など有とぞ斯て行々て近江と越前の境なる荒乳山と
まかへり給ふ。從來嚴石峨々たる嶮岨なれば人々大いお歩腦ける。就中北の方の深窓に生長給ひ假
初の御遊行を興車を召れ陸路を歩玉ひし事なければ樹根岩頭に御足を傷れ玉ひ流る。血汐あ
路頭此草茂染なるとばりなれば郎黨達余り痛はしさに替々に負進せ辛して荒乳山を超越前へ入
ける。お往來人の語りける。當國三の口に新關を居て判官殿を擲捕んと晝夜數多の番卒を置いて守
るなれば此客僧達をよと安々とは通り得じとぞ申ける。判官主從是を聞互に貌を見合扱は亦關所
有やと胸を痛當感し玉ふ辨慶氣を勵し國々を關所の有は兼ての覺期なり何れ猶豫し玉ふ事か有
ん人數二手に分て通んとて手配をなす。先一手の判官を始武藏片岡伊勢駿河熊井杉目の七人一手
は常陸坊を先として北の方増尾鷲尾龜井剛力二人是は半道許下て通んと手筈を定て鬼三太の
先お立て行斯て弁慶は貝吹鳴し三の口此關へ行懸ければ關守とぞ須波山伏御參なれ吟味此筋有

ぞ停り候へど七人を多勢の中み追取籠れば弁慶些を畏る。色なく我徒も何の吟味候やと問關
守が曰今般九郎判官殿鷹山伏となつて奥へ下給ふよ。鎌倉殿の嚴命にて諸國に新關を立られ山
伏を吟味有事當關お限ず。各を吟味を受て通いへとぞ申ける。弁慶聞て何さま左様此事も承れ
り近江に人の語しは判官殿をば美濃國にて擲捕都より上りと聞しかと。いまだ麻實の知すそと
關關の何人の預王ふとぞ問ふ番卒答て當國の住人敦賀兵衛殿と加賀國住人井上左衛門殿兩
人よて預り玉へりと曰辨慶亦問其人々の何所居玉ふや。番卒答曰兵衛殿の私用有。今朝領地
へ飯られ井上殿は公引よ就金津居玉へりといふ辨慶打咲大切なる關所の預ながら兩士とも居
王はぬおそ不覺なれ何の兎もあれ我輩は羽州羽黒山此客僧よて我は大先達荒讚岐と申者なり
熊野權現へ年籠して今下向道なり關主の御在り其旨達志て通べきなれども他行とあれば詮方な
し何人にもあれ一人歸玉ふまで待合なんと安堵貌も七人とも關所此様お腰打掛ければ關守と
も半疑半信して更も決せざる所へ常陸坊先も立て後の七人來りければ關守とも亦も追取籠て吟
味を受よと關より常陸坊辨慶を見て其候の大先達に候はずや思志より早く來給ひけるよ
きいふに辨慶も何是と物語する。船更に異むべき方なければ一人の關守自余の者に耳語れば山
伏の信偽を知らぬならは關代を請て見候へ昔より山伏の關代船賃出せし事なし。若判官主從なら
び子細をしらず關代を出してなりとも早く通んとすべしといふにぞ衆同心し一人の若辨慶に向
客僧達の眞此行者と見えゆへりさのみ吟味も及候まじ面々關代を出して通り玉へと申けれ

百 辨慶色を改め昔より羽黒山伏此關代出して通たる例なし法になき事の叶候まじといふは關守
二〇 押返し昔の知ず此度判官御吟味に就て鎌倉殿より御教書を被下甲家乙家此差別なく關錢を取て

關守の兵糧の料よせよと仰候へり羽黒山伏とて用捨は仕がたしといふ辨慶尙を頭を揮其方又鎌
倉殿の涉教書ゆれば當方よも天子の涉黒附あり但し勅言をも反古にせよと記載られまや涉教書
を一見せんと居丈高も成て争もぞ關守共扱は眞此山伏よとしぶくながら關門を開ける辨慶
仕濟したりと心中又笑尙も疑を解ん爲二人三人づと徐々と通せ其身の判官と二人後又残り關
守又向ひ近來無心なる事ながら齋米少々惠給へと乞關守 諺ながら白米唐櫃の蓋よ入てぞ與へ
ける辨慶悦び關代涉免の上齋米をさへ賜る段謝するも詞おしやわ大和坊是納よとて判官に渡
しいて報謝の爲祈禱仕らんと螺取上て高々と吹鳴し角高珠數さらりくと押揉傳氣も禱りける
は仰願くは日本第一大龍權現熊野又は三所大權現大峰又は八大金剛童子吉野又藏王權現南京
よの七堂大迦羅の諸佛王城鎮設荷祇園加茂貴松坂本に山王二十一社涉多賀白髭大明神加賀
には白山大權現其外日本大小の靈佛靈社彼判官主従を當三の口此關所へ引倚致賀井上兩氏の高
名勲功よ備へ給へや諸明王の眞言を稱立大汗流しを禱けるが心中には南無八幡大菩薩願ひ我
君を無難よ奥州まで赴しめ玉へと禱けるぞ哀なる關守等の頼母しく思ひ尊の六行者よと感
嘆し關門の外迄送出ければ主従は網を漉たる魚のどとく勇悦先の人々を馳付給ひけり

○義經主従詣平泉寺條

斯之判官主従は教資の津よ着羽州へ通ふ船を需給へともいまだ如月上旬なれば北風烈しくて
纜を解松もなければ陸路を経て越中の國府中よ着給ひしが判官衆人よ向給ひ武運長久の祈の
爲名に高き平泉寺よ詣ばやと仰ければ諸士等如何と思とを御掟なれば止事を得ず是より道を
横切て平泉寺へと急しよ雪雨殿く降出そ寒風烈く吹ければ兎角道墓行ず漸々平泉寺此觀音堂ふ
着給ひしよ日の全く昏果ける然よ平泉寺の若大衆是を見咎め急き長吏の許へ到り衆徒を聚て商
議志けるの當時鎌倉おは九郎判官の價山伏お成て落玉ふを嚴重吟味有よし彼客僧等は尋常此山
伏ども見はず疑らまは九郎殿主従よてや有らん故障なく通じ後日よ鎌倉殿の咎を受るば一山
の難澁たりいざや實否を糺明と闘を長吏大い制し無益々々何の遺恨もなきよ無用僧の腕立
して却て若野法師が不覺よや做ん毛を吹て疵な求ると諫れども血氣の若大衆耳よも聞いれず二
百人許混甲よて得物を携へ觀音堂を追取圍みたり判官主従是を見須驚一大事を列位太刀の
柄に手をうけ寄ば斬んと身構とるを辨慶急よ制し先短慮に逸り給ふな隙しらるゝたけは陳じて
見若不抗ば其時兎を角をなし玉へとて射堂内より立出そ衆徒お向ひ夜中といひ佛堂の邊に
甲冑を着し涉寄有の何事の候そと曰衆徒曰容僧達の跡九郎判官殿主従お紛は若ければ斯
如押倚候ひぬ抑御邊達は何國の山伏達ぞ詳み承らんとぞ呼りける弁慶聞て扱は判官主従と
かの涉疑故かや是の羽州羽黒山大黒堂の別當荒瀆岐と先立よて候決して胡亂の者ならずい
と答ふ衆徒亦曰召具し玉へる少年は何人の子息よていぞ弁慶答ふ坂田の次郎殿の子息金王殿と

と羽黒は無雙少年にていふ衆徒等商議しけるは切に判官殿はあらず判官主従ならば争
 斯羽黒の事委しからん彼荒説岐は究て心荒々しき人なれば強て推問後日は崇茂受如何なる珍
 事及んを量かたし將金王殿は羽黒に名譽れ美少年なり先々坊へ請じ真貌はあらずとも面
 しを見ばやといひければ衆然べしと同意し一人の僧弁慶又向實判官殿なりと思押寄いへども
 疑なき客僧達殊も名高き金王殿も涉渡とや斯る便宜に御玉器を賜りさく先々客殿へ入
 寄て緩々休足し玉へと申けるも弁慶のじめ衆人少を鎮り辭退せば却て悪うらんと弁慶答け
 るよふ涉芳志辱し風雨も強いへば暫時赦免も預いんとて十余人に屹と目語し頓て長吏の
 坊へぞ伴れりる衆徒等酒肴を調じて携出余寒を凌玉のんまで野酒一盞傾玉へと勸ける
 辨慶辭して曰御厚情萬謝に不堪いへども我徒は道中上下此間宗旨の掟めて固く断酒仕れば一
 滴も不叶候願ひ此義涉免有て一飯此齊預りさくいと乞も衆徒等本意を失ひ扱々物固き客
 僧達のな過ぎさせ王へとゆさんよさる曲て一盞を傾玉へ金王殿の涉土器を賜んと若大衆ども
 同侯仕り候と強ければと辨慶は若醉興の上如何なる大事あらんも量れずと思ひ固く辭けるよ
 り衆徒を力なく然ば齊を進せん金王殿は笛を持王へば齊を調じいはん問よ一曲吹玉へと望むる
 原來女性の涉事にて笛は吹玉はねども唯眞の兒と思ひせん科も持せ進せし事なれば弁慶大いに
 當惑しながら申やふ尤少年の羽黒第一の笛の上手よていへども天性笛お余念を忘る癖あり
 て學問手習も懈怠れいへば師の坊深を誠た此度能野詣の路次よそを笛吹事を固く停止し權現の

靈前にて誓言を立させられいれども吹事ころは能ずとも携ばかりは許し給はれども此覽のこ
 とを片時も放さず携れい願は少年此調を免有ていへ其代には少年の笛の師大和坊と申が是
 んい名代よ一曲吹せいはんと言ければ長吏大衆を制し斯程まで事をとり仰る上り強て所望を非
 禮なり名代ふてを苦しからじと宿め免も斯を先達の意に任せ給へど中に辨慶余の嬉しさも青
 き息をほつと吐判官は向ひ如何大和坊金王殿此名代を心を責め吹いへ吹損じなば羽黒の瓊瑾と
 成べきぞと勵しければ判官唯々として北の方の持給ふ葉調を取上口調しを心を詞も不及ばかり
 吹澄し給へば衆徒等心耳をすまして感激し吁名笛や天下廣しと雖も斯許の堪能はあるまじ當寺
 にも念都水澤と申兒のい天晴是等と管絃講を催志今一曲を承いらやと所望するも判官心得
 いと諾し給ふ衆徒等悦び頓て二人此兒を呼出し琴をば少年遊せとて北北方の前も罷念都は琵琶
 水澤は簫とぞ定ける斯て四人秘手を盡し合奏あれば判官の郎黨の今も合戦も及らんと必死を究
 しま八幡大菩薩の御加護もや斯る優藝にと變じて此程の旅嚮を晴すとよ同くは酒を飲て聽ばや
 どぞ思ける是や修羅道の罪人が極樂淨土も生を得てかぶの菩薩此音楽を聴に異ならず大衆も大
 いも興い酒酌かはし余念を忘て笑樂ける程なく管絃も畢ければ長吏より饗膳を調し進せ
 ば判官主従世に在去時の玉を炊き桂を焚く目よだを觸玉はぬ鹿食なれども今流落の身となり食
 ん飽給ふ事もなれば昔の珍膳美菜よりも尙甘じて十分是を喚し玉ひ暫時睡眠し給ふ程なく
 其夜も明わたりければ弁慶衆人を起し曉此勸行をなし朝饗の膳も遇て長吏も別を告て立出け

れば初の怨敵なりし衆徒も余波及びみまた消殘雪隠分て三町許見送進せり

○辨慶安宅譚勸進帖條

判官主従は危かりし平泉寺を難なく立て足を逸め菅生此宮をも余所よなし金津をさして急ぎ給ふ嗚呼其路次の艱苦幾何や或時は眠々たる峯を攀ぎ松が根枕よ夢をたのぞ或時の消々たる溪を渡りて虎狼の臥處に袖を片敷郊野へ行腦てハ土民此歩を羨間道ハ飢疲てハ村翁の袖も絶給ふぞ痛のじき然に金津此方より唐櫃數多擔せ馬上勇々しき武士百人許の同勢を引具し來蒐る是は何なる人ぞと鬼三太を以て問せ玉ふ加賀國の住人井上左衛門殿判官を吟味の爲當國三の口の關所へ赴給ふなりと答ふ扱は見答られそは不抗と判官は笠深々と打被ぎ郎黨の中に紛れ足邁へ行過んとし給ひ悉に折節風強く吹て判官の笠を吹上しるは急よ被整んと不思仰向給ふよ井上が馬上より直下と同時みて互に面を見合給ふ井上大いに駭き急ぎ馬より飛下り嗚尊の客僧達や途中ならざんば意許の布施をもひき鹿菜の齋をも進すべきに宿處遠ければ力不及台金兩部此法を修し給ふ列位よ馬上は憚り疾々行過玉へせ馬よ引添尊敬して見送れば判官主従ハ夢路を逃心地して何れ答もせず逸足ハ行過玉ふ井上遙に見送り左右ハ顧唯今の客僧達を誰どか思ふ彼社木曾平家の大敵を一戦ハ攻亡志玉ひし伊豫守殿よ世々世にて在は假初の御通行にも灑掃よ警固よと道路此騒動大概ならざるよ罪なき御身を説者の爲よ世を狹られ給ひ我等おとよきの者よだに隠憚て過玉ふ痛のじさお討奉は莫大の檢賞もぞ預へきが余り痛はじさ

見進し進せりと落涙と俱に語れば郎黨下部是を聞天晴此人は武勇と慈愍と備たる武士よと感じ合けり判官主従ハ鴈の口を遁れし心地して其日の篠原よ宿し給ひ翌は亦草鞋を履縮て根根り松よのり白山權現を遙拜したまひ安宅も近くなりける処よ先よ立て行たる鬼三太色を變して馳駈り大息吐て安宅よも關を居る富樫左衛門尉是を守り嚴く山伏吟味をば仕候よし關門よ山伏三人の首を斬て梟候と言上す判官歎息し給ひ斯行先每ハ關所有上は迎も奥州迄ハ通り不可得所詮言甲斐なき者の手よ掛んよりの潔く自害せんと既ハ刀よ手を掛給ふを伊藤三郎急ぎ制し是は如何なる御事ぞや某等隨逐仕る上ハ關所の三個所五個所蹴砲て通りハハん事何の難かハハん先々短慮を出し玉ふな如何面々何の爲よ持たる太刀腹卷る君の御大事今此時なり身を固て一齋よ進み蹴破て通よ若不抗ば多年武恩の爲よ斬死せよと呼れば是あろ望とあるよと既に用意よ及んとぞ辨慶大いふ諫是ハ物よ狂か是迄諸所の危難を避ながら當關一個所遣りかね無謀の戰を好ば思慮不足也万事某に任よとて眞先よ立恐るゝ色なく安宅の關に入れば百人余の番卒須波山伏御參なれと追取捲辨慶眼を瞋しるも何事の有て斯狼藉ふや及やと言れば兵卒等口々よ事よ疎や九郎判官殿山伏と成る奥へ下給へば路次よて擲捕よと鎌倉殿此嚴命よより當所をば富樫左衛門殿固給へり客僧達の爲ハ判官殿主従の模様よ似たり關主の糺明濟迄ハ一寸も動さじ強て通らんとならば彼見候へハ門ハ斬棄たる首おどく爲そんと罵けり辨慶が曰斬棄たる山伏ハ判官殿ハ關守剛笑判官殿ならば何れ爲余人を止んや名もなき者なれども強て通ん

せし故斬て棄自余の見懲の爲關門も梟たり
 といふ辨慶阿々どわらひ世も無法の者ど
 ものな被斬が懼しとて通べき所を通まじき
 う如何列位我の當關主も對面して寄附を乞
 ん面々の先へ通り諸所を勸進し日高くば能
 登國迄超へんと事なまお言ければ其卒大
 いに怒り是の理不盡なる山伏うな強て通ん
 どならば眼お物見せんと一齊お弓矢番ひ矢
 襖を造り今を切て放ん勢ひなり北の方は是
 を御覽し消もへべき慄給ふ辨慶大いに聲を
 勵し 忝と勅命を承て日本六十余州を勸
 進する我徒も鏑矢一筋にても射らるゝなら
 ば射て見よと二玉立ふ成を呼はりければ關
 主富嶽は折しも二三日の事故與に在て酒
 宴して居たりしが物音も駭き何事よやと手
 鉾提て立出候事代いで斯騰しきと各



る弁慶式登へ上り是の南都東大寺大佛再
 建の大勸進も巡行する山伏なるに當關所
 の人々是非をを糺さず狼藉も及るゝは貴邊
 の御指揮かど問富樫面を和げ扱の勸進の行
 者達へ非禮致まひひしやとて兵卒を制し東
 大寺勸進の義は鎌倉殿よりも御下知あり然
 る某へも達せず不法の段奇怪なり扣候へ
 と叱付扱辨慶に向ひ頃日九郎判官公山伏の
 跡も身を紛裝して與へ御下向有よしなれば
 當所もても山伏達を擇候より兵卒ども狼
 籍も及候罪は某も免したまへとも御坊御
 名の何と申ぞと問辨慶答を愚僧は讚岐阿闍
 梨と申者なり伯叔おて候美作阿闍梨の東山
 道を信濃へ下り愚僧の北陸道を勸進し候兵
 卒の無禮は各に不足候が御内の勸進如何
 御附候ぞと申ける富樫殿伏如何も名帖も附



百 候へん定て勸進帖の候へし願ひ聴聞仕らばやと望ければ辨慶はお當惑しながら頼智を廻し笈
十〇 の裡より往來の巻物取出し高聲よて讀上ける

夫 倩 惟

大恩教主の秋此月の涅槃の雲隠れ生死長夜の永き夢を覺とべき人もな
し茲中頃の聖主聖武皇帝と申奉は最愛の後宮に死別給ひ追慕此情止がたく涕泣の御
涙乾く期なし故に上求菩提のため華遮那佛を建立し給ふ然も去時壽永の頃兵火の爲
に焼亡し畢ぬ斯程の靈場絶ん事を歎き俊乘坊澄源諸國を勸進す一番半錢と雖も奉財
此輩は現世よりの無比の樂を極當來よては九品蓮臺の上に坐せん皈命稽首敬白

と心に浮儀を疑を驚き讀上げれば富樫大いみ威聴し微少も候へ共勸進に附候はんとて上品の加
賀緋五十疋内室の方より罪業消滅の爲とて白袴一腰八花形鐙たる鏡一面其外家隸郎黨女房婢
女にいたる迄寄附物をならべ立名帖に附者百余人もぞ及びける辨慶大いみ悦び而々の志現當
二世安樂何の疑う在ん扱我徒は尙近國を勸進し來月中旬より上り候はんずれば倍高成物は其
迄預り玉のり候へど荷も成さる物少々取て判官に向ひ如何大和坊是持と渡し富樫お暇を告ぐ
二人三人宛徐々を通りけるが中にも判官の遙に引下て通給ふを兵卒の中に見知たる者有て彼こ
そ判官殿は彷彿たり政よといふ程も前も懸す群々と立竄るよぞ通り過たる輩是を見て須
波我君を異ひおそ一期の浮沈此時なりと勢ひ込て引返さんとするを辨慶急目購して制志一人
取て返し眼を瞞して此瘦剛方聊の荷を持憑を歩行此連さ疾行よと叱ければ兵卒等辨慶に向

ひ是の判官殿は似されれば此方より止るが先達よを問へ玉子細あり傳り玉へぞ支られれば辨慶益々
腹を立南都を立志より以來勳は判官よと疑はれば汝にかゝりて時日に移り事幾何ぞや偏よ己が
甲斐々々しからぬ故也所詮諸國を巡んよ足手纏の痴者寄附物と俱も來月迄預り玉へ喰腹立剛
力たやと金剛杖を追取て肩背の差別なく散々打擲ければ判官は大地に倒れ死し玉へぞ泣謝玉
ふ富樫立て弁慶を制し先達先杖を止玉へ若者等がよなき備目より判官にてとなき人を狐疑は
あそ斯折檻し玉へ今は疑念嗜候疾を連て通給ふといふよぞ辨慶は飛立はるり嬉しけれとさあち
血脈よて誰々大檀那の御ならすは難殺とも棄んもの命真加よ合し痴者もな疾く歩よと強
く引立富樫は禮謝しよ遂に關をぞ通けるハ將も惡虎の害を避毒蛇の難を免し心地し衆人始
せ胸撫下し足を透て路を急野を市といふ處なる二方堂の敷蔭に立休ひ各息をぞ續よける辨
慶判官の御前お拜伏し君の御運衰へとせ給ひ諷諭と申ながら辨慶が杖よ當せ給ふ事の恐さよ千
斤をよ揚に安き某が腕を痺るゝ如く覺候と畏入て悲はしければ判官急に扶起し給ひ今日汝が
智雲中々凡庸の及所よあらず備よ宗廟八幡大菩薩汝が手を借給ひ義經が危急を救ひ給ひしと
覺たり昔とさる例あり楚の公子宋を落し時其異れん事を畏れ徹服して歩卒の荷を負奴僕此跡
よて開門を通んとせしお門を守る兵是を難押しんと公子の僕策を上て公子を散々お擲汝不力
にて後るゝが故人の孤疑を生ぜり努力よやと告ししかば守門の兵疑念を解難なく通せしどかや
和漢古今隔の有とも誠お千載一君此忠貞頑剛變化の智謀感するお余あり夫危を見て命を授身

百を殺て仁を成す臣下此職分義士の所好と雖も尚安めるべし方しき主を打て難を救事後代再不
可有彼文伯は母お辱れて慈母の力此衰へまを悲し今義經の故々杖下ふ忠力此壯なるを悦しと
す仰ける ○辨慶如意波擲杉目條

期て判官主従の其日竹の端といふ所宿し給ひ翌は旅宿を立て越中降より入り分行て如意の波
よ着船を借求て乗給ひけるよ松原平比權頭といふ者判官主従の跡を見て申けるは當所の鎮
本城之助宗茂殿より兼て御下知有る山伏達通られ候へい訴出よもし左右なま渡さば僻事
有と命せられい間一應領主へ達せよんば船を出し事は叶ひしといふ辨慶聞て其は何故
山伏に限り止られい多と問權頭答て鎌倉殿の御舎第九郎判官殿とやらん廣山伏と成て奥へ下
り給ふとよや夫故山伏達を擲れ候と承れいといふも辨慶眼を潤と瞋し自余の山伏は何と
いへ羽黒山の荒蕨岐を北陸道よて見しらぬ者や有と憤りければ權頭打黙頭何さまは坊は一
年新禱の御札を賜し涉方の權も覺候去ながら彼所よ村千鳥此衣着せし客僧は領主より觸渡
されし判官殿の人相書に最よく似玉へば左右なくは渡さざらんとぞすたる是の判官にそはなく
杉目小太郎行信なりければ辨慶言々るは彼の加賀の白山より想れて羽黒へ伴ふ客僧なり涉邊
身左いふは理り路次よとも判官殿に似たりとて彼者よかとり時日を費すと度々なり無益の者
を召具して路の妨を爲腹立さよ汝は是より領主の糾明を受免と角もなれよ逃走行て杉目が
小腕掴ま強く濱へ走上り砂上へ岸破と打倒し腰なる扇子把て散々に打擲志擲船に乗て權頭に
對いさや船を出せ涉邊等を見知聞知とぞとらん羽黒の荒蕨岐は判官殿の方人ならずと呼りけり

權頭是を見て怒を羽黒山伏程情なき者いならず判官殿おてわらずばわらぬ迄よ斯程よ打擲せら
るゝ氣の毒さよ疾々船よ召れよとて杉目を扶起し砂打拂せ船よ乗れば行信嬉氣も禮謝して臨
先の方よ坐て居けり權頭の顛て船を中流に漕出し扱辨慶よ對ひ奈何先達船賃を賜り候へと乞辨
慶氣色を損し羽黒山伏の船賃出たる例をしらず但し有やと難じけるよ權頭答て例いなしと雖も
先達の余り情なき人なれば賜すば此船漕付じとぞ償たる辨慶北地方を指さし是少年の父坂田
次郎殿の坂田比領主なり今船賃を免とば御邊等出羽へ來ん時眼よ物見せんぞと懼まけれと
も權頭向も首を揮如何仰るとぞ船賃賜すば渡さじと争て止す今は辨慶も退屈し北の方の若れ
たる帷子とつてさらば是を船賃よ取せん去ながら以後羽黒山伏が渡ん時荒蕨岐が船賃出して渡
しなんど例よ引て船賃を債は我忽ち修験の行方を以て汝が五臓を不動の鎖縛よせんずるとて
興々れば權頭黙首心得候せて彼帷子を取て杉目行信よ與其許ころ我一言より辛き打擲に逢給ひ
し痛はじさよ是進せんとぞ打着ければ扱は欲心よてはなありけり人々潛み貌見合して舌を出
しけり斯て船子は水棹を揚て船を進ける權頭辨慶お向ひ世に佛徒の姿種々有中おも山伏達程異
形姿なるはなし如何なる子細此候やと問辨慶聞て小賢き問事ながら此船の着ん間聞て聞せん
それ修験の法と謂ひ台藏金剛兩部の旨を修し嶮山惡所を踐開き世の害をなと惡獸毒蛇を退治し
て理世安民此慈愍哉或は難行苦行此功を積て惡靈亡魂を成佛得脱させ日月清明天下太平の祈
禱を修と故よ理よ忍辱慈悲の徳を收め表は降魔此相を現し惡鬼外道を威伏せり則ち兜巾襟

掛は兵家此甲冑（かぶと）等（ら）く腰（こし）又は彌陀（やまと）此利劍（きりけん）を佩手（かきて）又は釋迦（しやくぢあ）の金剛杖（こんごうじやう）を携（たづな）りと語（かた）ければ權頭（ごんとう）感（かん）伏（ふく）し之亦問（いか）けるは普通（よつぱん）此僧徒（しやうだ）の釋杖（しやくじやう）を携（たづな）候（まゐ）り山伏達（さんぶつだ）に限り金剛杖（こんごうじやう）を持給（も）ふは是にを子細（こさい）此（こ）以（も）や辨慶（へんけい）答（こた）て事も疎（おろ）や金剛杖（こんごうじやう）と謂（い）ひ天竺（てんぢく）檀特山（だんとくせん）の神人阿羅（あらか）々（せん）仙（せん）の持（も）し靈杖（れいじやう）にて胎金（たいこん）兩部（りやうぶ）の功（こう）徳（とく）を籠（かご）たり釋尊（しやくそん）未（ま）だ相曇（さうどん）沙彌（さみ）と申（まを）せし時阿羅（あらか）々（せん）仙（せん）給事（じやくじ）して苦行（くぎやう）し給（たま）ひしに稍功積（しやうこうぢく）り給（たま）ひしう（う）ば仙人其信力強盛成（かうせい）と感（かん）じ懼曇（くも）沙彌（さみ）を改（あらた）て照普（せうぷ）比丘（びく）と号（な）則（すな）此金剛（こんごう）を授（ま）り斯（か）る靈杖（れいじやう）なれば吾祖（わこぞ）役（やく）小覺用（せうかくよう）て山野（やまの）を經歷（きんれい）し給（たま）へりと語（かた）ぬ權頭（ごんとう）亦問（いか）らく佩給（か）ぬ太刀（たち）は只者（ただもの）を怯（おそ）れん料（りやう）や將真（しやうしん）又（また）斬（き）ん慮（りよ）や辨慶（へんけい）が曰（い）豈唯（いかん）山案子（さんあん）の弓（ゆみ）のおどく怯（おそ）れ而已（のみ）佩（か）べきか佛法（ぶつぽう）王法（おうぽう）の害（がい）をなす惡獸（あくじゆ）毒蛇（だくさ）はいふよ及（およ）ず警人（けいじん）問（と）たりとも世（よ）を掠（さら）乱（らん）し佛法（ぶつぽう）王法（おうぽう）を敵（た）とる惡徒（あくだ）の一殺多生（いつせつたせい）の利（り）に倚（よ）て忽（たち）ち斬（き）て棄（す）ん爲（な）なり權頭（ごんとう）亦問（いか）らく眼（め）に遮（さ）り形在者（かた）の斬給（き）ふべきが若無形（わくむかた）此陰鬼（いんき）妖魔（まが）佛法（ぶつぽう）王法（おうぽう）此障（しやう）碍（がい）を爲（な）ば何（なに）を以（も）て斬給（き）へんやと難（がた）ず辨慶（へんけい）尙（なほ）を屈（ま）せず無形（むかた）の陰鬼（いんき）妖魔（まが）は九字（くじ）の眞言（しんごん）を以（も）て切斷（せつだん）せんは何（なに）の難事（がたじ）有（あ）ると答權頭（たうごんとう）問（と）らくも九字（くじ）の眞言（しんごん）とは奈何（いかん）なる義（ぎ）や事の次（ついで）に説聞（せつもん）せ玉（たま）へとぞ望（のぞ）ける辨慶（へんけい）曰（い）是は吾宗（わがしゆ）深秘（しんひ）の大事（だいじ）なれども今日の船賃（せんげん）の料（りやう）は大概（おほ）説聞（せつもん）せんそれ九字（くじ）の眞言（しんごん）とは所謂（せうい）臨兵闘者皆陳列（りんぺいとうしやがいかんれつ）在前（ぜん）の九字（くじ）なり將（しやう）切（き）んとする時（とき）に正（ただ）く立て齒（は）を叩（たた）事（こと）三十六遍（さんじゅうろくべん）右（みぎ）の太（た）拇（ぼ）指（さし）を以（も）て先（ま）四（し）縱（じゆう）を請（まが）後（ご）五（ご）横（ぎやう）を畫（か）く（如斯）扱（あ）急（い）急（い）如律令（にょりつれい）と呪（のろ）する時は所有（しゆいう）五陰（ごいん）鬼煩（きぼん）惱鬼（ねうき）死塵（しぢん）及び惡魔（あくま）外道（げだう）死靈（しれい）生靈（せいれい）立所（たつじよ）亡事（むじ）霜（しも）は熱湯（ねつたう）を注（つ）ぐとどし實（じつ）は元品（げんぴん）此無明（むみやう）を切（き）の大利劍（だいろくけん）莫（な）耶（や）も何（なに）ぞ如（ごと）ん兵家（へいけ）も是（こゝ）を用（もち）て敵（た）對事（たいじ）子美（し）が撰（せん）し軍林（ぐんりん）寶鑑（ほうかん）抱（う）扑（ぱ）子の内篇（ないへん）其外（そと）諸書（しよしよ）も舉（あ）り理（り）

うな是九字の妙法華經中より撰出せし妙文なれば其功德廣大無量なり六賢阿耨多羅三藐三菩提を修（しゆ）すは任（ま）て語（かた）々（々）れば權頭（ごんとう）感（かん）伏（ふく）し尊（そん）の侈事（しよじ）や斯（か）る大行者（だいかうぎやう）も知遇（ちぐう）して生涯（しやうが）の徳（とく）を得（え）しころ有難（あ）けれとて拜謝（はいしや）志（し）たる此問答（しもんたう）の間（ま）に船着（ふねぢやく）ければ判官（はんくわん）主從權頭（しゆじゆうごんとう）禮謝（らいしや）して船を下（ふねをくだ）向（むか）も路（ぢ）を急（い）ぎ岩瀨（いはせ）の杜（と）黒部（くろべ）の宿（しゆく）神原（かみはら）などを經（か）て岩戸崎（いわとさき）といふ浦里（うらり）も若玉（わがたま）ひ泉郎（いづみらう）の苦家（くけ）も宿（しゆく）り給（たま）ふ北（きた）の方（かた）熱（あつ）と頸乙女（のりおんな）此和尙（しやう）をかめぎなどする業（わざ）を御覽（ごらん）し

四方の海波（うみなみ）此（こゝ）よるく來（き）つれども今（いま）ぞ初（は）て愛目（あいめ）をぞ見る

と一首を詠（えい）じて涙（なみだ）さしぐみ玉（たま）ふ人々御心中（ごしんちゆう）を察（さつ）し悲（かな）せ誠（まこと）に荒（あ）き風（かぜ）また中（な）ぬは身の殊（こと）な珍（めづ）産（さん）の月（つき）近（ちか）に斯（か）愛（あい）長（なが）旅（たび）ふ吟（いん）玉（たま）痛（いた）しとさよと例位（れいゐ）袖（そで）を沽（か）しけるが兎角（うまかく）も諫（い）慰（い）悲（かな）せ望（のぞ）ば此所（こゝ）を立（た）て越後路（えちごぢ）のり行（い）々（々）直江津（なはえつ）なる花園（はなづ）此觀音堂（くわんおんだう）も著（つ）玉（たま）ひける抑（おさ）此花園（はなづ）此觀音（くわんおん）とすの往年（わねん）八幡（はつた）太郎（たうらう）義家朝臣（ぎけあそ）安部貞任（あべのさだとう）宗任（むねとう）を征伐（せいぱつ）し王（わ）ひし砌（せ）武運（ぶゑん）長久（ながく）敵徒退散（てきだてたいさん）の祈（いの）の爲（ため）郎（らう）直江（ちやうえ）十郎（じちらう）も命（いのち）て建立（けんりゆう）させ玉（たま）ひし靈佛（れいぶつ）にて種々の瑞驗（ずいげん）を現（あら）し玉（たま）ひまれば菜田（さいでん）を寄附（よせつけ）して永（とこ）く當所（あつしよ）も安置（あんぢゆう）し源氏重代（げんじぢゆう）の守本尊（しゆほんそん）と仰玉（おほたま）ひけり今尙靈驗（いましやうれいげん）新（あらた）ま在（あ）れば遠近（えんぢん）の人民（じんみん）渴仰（かつがう）して崇信（すうしん）する淺（あ）らざ判官（はんくわん）も大い（おほ）に尊信（そんしん）し玉（たま）ひ我（われ）不圖（ふと）此所（こゝ）へ來事（きたじ）義祖（ぎそ）の導（みち）き玉（たま）ふならん今宵（けふ）は結縁（けつゑん）のたを堂内（だうない）も通夜（つうや）して行末（ぎやうまつ）の武運（ぶゑん）長久（ながく）を祈（いの）ばやと仰（おほ）けるは衆人御掟（しゆじんごおし）に順（したが）ひ幸（さい）ひ暮（く）る程（ほど）もあらざれば究竟（くわうげん）の宿（しゆく）かなとて列位（れつゐ）堂（だう）内（ない）へ立入（た）笈（あ）を下（くだ）し草鞋（わらじ）を解（ひ）て疲勞（ひらう）を休（やす）まるが食物（じよくぶつ）に事（こと）を關（か）武藏常陸（むさしつちやうりく）以下の（以下）の（の）食（け）を備（た）へんと各（おの）近村（ちかむら）へぞ出行（い）たる

直江津上月搜笈并難風之條

茲に越後北國府の守護の代官上月權頭といふ者ありけるが直江の觀音堂に十四五人山伏通夜
 せりと聞若くは彼判官主従にや涉坐らたさあらば討の擲かせば拔群此檢實も預んいさや實
 否を糺せよとて己が下人に浦の漁夫網更とと小者迄驅聚凡二百人許夜中觀音堂へ押寄奔々
 と追取卷たり堂内には辨慶はじめ伊勢片岡以下近邊へ行て漸く判官と北の方兼房三人のみ籠居
 玉ひしが物音に驚き何事やと判官堂より立出玉ひ抑は邊等は何國の人よと如何なる事の發り
 斯騒動し玉ぬぞと問給ふ上月高聲は是は當所の代官上月權頭と申者なり觀音堂は山伏大勢籠給
 ふよし承り尋問子細有之斯押寄候そもは房達は何國此客僧よと名何とや詳し承らん
 と呼はつたり判官聞召今迄の羽黒山伏といひしかども羽黒を近く成たれば事露顯せんもしれず
 と思慮を廻し給ひ是は熊野より羽黒山へ參詣の客僧よと候が訟を待合して是に居候先達同行等
 は要用在て近邊へ參られ候は尋の候に后尅來給へとて仰けるかゝる所へ辨慶常陸以下の輩
 觀音堂より事有申聞宙を走て駈戻り群る多勢を押分て堂上へ上りければ判官は悦喜限なく云々の
 由語玉へば辨慶上月は對ひ我等は聊異き休の者ならず宿願の子細有て三十三体の正觀音
 の像を羽黒山へ納ん爲是迄參りたりといふ上月思ける判官主従ならば甲冑小手脚當の類ころ
 もち玉はめ誰が誰とを面は見しらず所詮笈を改見なば實否分めと思惟し扱辨慶も向ひ彌熊
 野山伏も相違在すば疑念を晴と爲笈を一丁見せ給へ改みはんとすければ辨慶が曰夫山伏の

笈は持佛堂同前よて面々此守本尊或は調度を籠て如何なる清淨此靈場へも負行物なり殊も此度
 は奉納此銅像をさへ籠たれば俗体不淨此人此手に汚れんは其畏なきにあらざれども見せじと
 申なば疑念をのさね如何なる濡衣を着られんもしれず此上の力なき吟味とあらば見せすべきが
 改じ上子細なくは當所よ於て笈濯し玉ふやといふ上月答て兎も角も仕らん疾見せ玉へと責け
 れば辨慶心中は祈念し南無八幡大菩薩今此危急を救ひせ玉へとて手も當る笈一丁取てさらば
 改られよと投出す上月明松を揮照して是を改見るも櫛鏡掛帶紅の袴重の衣なんど
 を入たり意訝り辨慶は向櫛鏡なんどは何れ爲も持候やといふ辨慶答て是は兒一人具したれ
 ば化粧の具なりといふ上月亦掛帶袴等を見せて斯る女性の裝束を持候如何と難ず答て曰此
 僧の叔母なる者は羽黒に候が此度の便鬘袴掛帶なんど買整て下れと申越候程も都て求
 め持て下しと陳しけり上月點首さる事もいひなん是よては實否不分明もいひあいた今一丁見せ給
 へど望む辨慶胸をさへ何丁成とを見たまへとて亦一丁投出を是の片岡が笈に兜腹卷柄の無斧
 を入れたれば如何あらんと心を困めながら其笈は銅像の觀世音三體在ぞ決て不淨の人をな近
 寄ぞとすければ上月意得たりとて紐を解んとすれども強く結たれば解ぬ佛像ならば開すとも
 知なんどて笈の掛緒を搦振けるも兜腹卷斧なんど此がらと鳴ければ上月胸打騒ぎ實も銅佛
 を籠りと聞たがへ扱ひ眞の山伏なりと疑念を晴し辨慶も向ひ今は申旨なし笈請取玉へといふ
 もぞ辨慶氣色を損じ御邊等が疑念は晴つれども此方ふは申旨あり初よりの約定なれば笈を濯を

返し給へさなくば受取がたしといふ上月が日笈を濯どの水おて濯ゆる湯に洗いか弁慶大い
 聲を轟し汝等我徒を嘲弄する山伏此笈を改る者が笈を洗法を志らす有べき所詮其笈を當
 所より預り置給へ我羽黒へ到る上月權頭が理不盡に權現此御正躰を籠たる笈を汚せしと訴へ大衆
 を催して迎み來んずるぞと催しければ文盲不才此漁士ども扱へ權頭が鹿忽しと一大事を引出せ
 しぞさなきだも手剛き羽黒山伏お寄られてい不抗長居せば連坐もや逢んせ二人三人拔々に逃散
 ければ上月大い迷惑して弁慶謝けるは先達御免候へ實に山伏達を吟味仕も判官殿を擲よと
 此主命も候へば已事を得ざる所なりそと笈洗とすは如何成事にていぞと畏々問ければ弁慶心可
 咲御邊不知ば言聞せん笈を洗とは淨の祈迎重の三七日輕は一七個日如何を多の品々入事なり
 先幣帛此料として檀香百帖白米三石三斗黒米三石三斗白布百端紺布百端鷄尾五十尻黄金五十兩
 毛揃る馬七匹荒蕪百枚斯のおどく揃て出たらば淨の祈禱なまて得せんさもなくば羽黒の
 大衆もや笈を迎み來んさある時の如何なる大事に及んも知がたしと眞しりにやければ上月
 仰天し某の窮て貧き者なれば右の品々迎も不調い何卒先達の情にて白米三石白布三十端鷄尾
 七尻黄金十兩是めて事濟給へとて謝ける弁慶照首元來主命とわれば御邊一人の罪ならず事拔
 群も不足なれ共夫もて事濟しなん先々假も淨の祈せんとして彼笈を禮拜志暫時眞言を唱て祈り扱
 權頭も向ひ寄附の品々唯今請取べきなれと路次此煩なれば暫時御邊も預置羽黒へ着して後
 使者を以て請取候はんと申ければ上月の拜謝して取りける判官主従は笑秘語邊鄙の者は欺

て苦松一艘機械楫など取揃ながら乗たる主もな波も汰れて有奪取て打乗渡はやとやければ衆
 人大いに悦び是なん天の與ならたど早々觀音堂を立出片岡を案内者もて漕へ下見れば首しに途
 はず船一艘繫ぎ捨たり列位是も乗移り朝まだきも直江の漕を松出して妙觀音が嶽より吹下す
 嵐に連れ走らせける片岡常陸兩人は船に馴たれば櫓を漕櫓を把て行所も見るく白雲山の腰
 を離れて出るあり片岡屹と見え國此ならひはしらざれど彼雲は風雲ならん如何せんと言も果さ
 るも俄然として北風吹出陸には砂を揚沖もは沙卷て浪立騒ぎ今迄海上に塵の浮たるおどく見え
 し雲の釣船浮ぬ沈ぬするも此松を斯ぞ成へきとて心細さ言ん方なし北の方は判官も絶り付給
 ひあなやと言て泣伏給ふ片岡常陸も秘術を盡し幽見えたる佐渡が嶋へ船を寄んとすれど風
 波益高くなり思方への寄す松影がうらの方へ漂ひ行然も亦白山が嶽より風烈く吹下る能登の方
 へぞ洗されける斯をうちに其日も暮がたなり風の益強くなり今も獲ん躰なれば船中の人
 を生さる心地なく上天奈何なれば主従も斯憂苦を見せ給ふぞ空を仰向て悲愁けるもぞ判官海
 面に向ひ給ひ仰願は龍神河伯魍を垂給ひ此船を今一度陸に着て兎も角もなさせ給へとて笈
 此中より白鞘卷の太刀取出し義經が奉納の太刀納受なし給へと逆巻波間へ投入給へば北の方と
 紅の袴も鎧を添てをなしく海中へ投入給ふ其誠心や通じけん風俄も西方より吹出して船は東
 へ走れば片岡常陸力を得願驚順風となりたるぞとて帆を整し槳を把て走らす程に夜半ばかり

風静り浪治りければ船中の衆人蘇生せし心地して猶も精神を勵し漕行程も曉方に其所共むらぬ所へ船を乗上たり蕪が家立寄て當所の何國なりやと問せ給ふ越後國寺泊と申所也と答切の思所に着たり迎其日は三鞍町をいふ所宿を求る疲を休せ翌は旅宿を立て箭彦明神を伏拜十九里此濱にうへり名所々々を通りそぎ之泉の庄大梵寺へ通給ひ羽黒山を遙拜し給ふ今般山伏の姿となりて下給ひ志結縁あれば御參詣此御志もをはむれ共北の方既御産の臨月なれば其恐有とて辨慶一人を御代參と參せられ殘の人々は清川に着て辨慶を待合たり

○龜割山 出產之條 並 義經 高館 安居條

抑北清川と申は羽黒權現の御手洗よて築山の禪場より北北腰に流落る急流なり熊野の岩田川羽黒は清川逆名も高き名所よて歌も稻松の最上川と詠じも此流也とぞ判官主従は五所の王子の靈前よ一夜御通夜ありて罪障消滅の御祈念ある翌日辨慶も下向して參會すれば船を需て流は隨ひ漕上玉ぬ禪場より張落る瀧あり北の方あれ何といふ瀧ぞと問玉ふ船頭答て白糸の瀧と申候と申北の方

最上川瀨々々岩浪せきとたよ燃てる通る白糸の瀧

と詠じ給ふ判官もあなじく

最上川岩々み浪に月爽てよるおもろき白糸の瀧
と詠給ふ茲は靈の明神兜の明神とて八幡殿奥州征伏の御當所に重代の甲冑を殘し置給ひしと

後神と祭れる社有と松人の申よ遙拜し賜ひ離遣の瀬戸と云所に掛り給ふ此所はまきて流烈しく水勢箭を射如なれば北の方懼惱給ふよ上の山は猿の聲しければ判官取敢ず

夷廻すうちはば弓よあらねと離遣を猿をみる見ゆる哉

と詠も賜ふ斯之競の杉箭向明神などと伏拜會津北津よ着玉ふ是より平泉へ三日路なれども瓶割山を超へむらの里を安根羽へ出れば二日路なり何れより行給んやとすければ判官聞給ひ長途此旅も飽果たり少々難路なりとも一日も近きうたへ行めと仰るよよりさらば瓶割山へたれとを路を急に質も時しき切所なれば列位歩惱けるよ北の方俄は心苦くなり産の氣の熱されば乳夫兼房大い駭き家在方もよとて扶進て行程も今の絶も入べき湯氣色なりければ辨慶頭を搔切も折悪き事かな麓の里遠れば沙介抱申べき宿もなしさればとて往還もも叶はず先々彼所へとて二町許分入て大樹の下敷皮布て是を産所と定て居參するに北の方は次第も苦痛を増し惱給ひ細き湯登にて人々近くては包し早遠避よ兼房汝と我君ならては叶はず是迎も本意ならねど女姓あらねば力なしと仰るよぞ心得候とて自余の人々は皆此所彼所へ立退たり判官は北の方の身を抱き矢狂心を弱らせ給ひりるべしとい兼之知ながら捨置參せんが痛はしさよ具し參せぬさらぬだよ憂旅よ吟せ奉る耳ならず百辛千勞醫に者なく適佛神の加護よより今の高館近くなりたるお夫迄を伴ひ參せず此所よて別參せん事の悲しきよと搔口説玉へば増尾兼房と俱み消入心捕じて只雨をせはむなり北北方息の下に水をと一言曰ければ武藏坊心得水瓶

を得て立上りたれども時將に暮るる隙霧降籠て暗うりければ何方も漢有へしと辨ずされど足
 り任て谷へ下り耳を傾て水は流るゝ音やすると聞ども此程久しく照續し空成ばよや流るゝ水
 の音もせず辨慶長歎し如何御運究りさればとて清和帝の御末たる若君の御誕生に一滴の水たよ
 得兼たるは何事ぞと鬼を拉身と涙得ろく落しつゝ猶谷深く下行ば漸山河は流るゝ音せ
 り大いに悦び聞しく汲取もと來し道へ探り登り北の方の御耳根口よせ辨慶が丹誠を凝しそ
 汲來し水にて候ぞ一口きさめしめて御心を強くなま給へとく御口中へ瀧入進せられれば通じたり
 と覺しきて判官此御手よまかど取付給ひしが亦も絶入給へば判官も俱も消入心地し玉ふ辨慶氣
 を勵し心弱き御事かな事を事に依候へ其所退候へ兼房と北の方を起し抱奉り南無八幡大菩薩
 願の御産平安まなし給へと祈念しければ常陸坊も珠數押揉てぞ祈ける人々の丹誠よや北の方
 亦息吹返し給ひ判官も取付給へば辨慶汚腰を抱揚奉る程に遂に御平産有る若君呼々と初聲を發
 し給ふ十余人の人々我を忘て立集ひ狼狽とる事大方ならず辨慶大いに制し若君袂掛し押包
 て懐へ入進せければ判官松の火影も初顔の汚覽しは涙漣のみとく阿如何なる宿因にや微運
 此義經が子となり胎内よ在志時は虎尾を踐毒蛇此口よりゝるの危難も逢適降誕此時お臨ば
 猪鹿の子も等樹下岩頭に聲を發して初湯ひくへき事たよ能はず尙行末の恭辱を見せんより物
 の心を弁さるうちよ如何様よとよと仰ければ北北方聞食苦き息の下より是は情なき汚
 泥かな人界に生を得る者をば日月の光たよ見せて失ひ玉いんとや御不興を察らばやと兼房と



小提よ是より京洛へ抱き上ども争の空くなすへきと相泣玉を弁慶大いよ引の力を記す
 傍提われ若君は武藏が預り奉り候ぞは果報は伯叔君鎌倉殿も似給ひ武略の父君力は斯申弁慶
 も似玉へは壽命の千歳萬才を保玉へ恐ながら弁慶は号親なり龜割山此龜の萬代は鶴比歳千
 を加へ彦名を龜鶴君とこそ申さたり祝し奉りければ判官のしめ衆人色を直しけり兎角する間夜
 も明渡ければ馬を求來りて北北方を扶乘進せ其日の栗原寺に若玉ひけり然も若君は弁慶が懷
 に抱れたまひ御乳を進せざれども一聲も啼玉はさるぞ不測なり
 判官の栗原寺に入玉ひて秀衡の心底如何有んとは思召られ共先龜井六郎伊勢三郎兩人を以て平
 泉へ頼遣と給ひければ彦館秀衡大い驚き急ぎ兩使を迎入て對面ま此程判官北陸道よかへり
 御下向のよしは風よ承りいへども風説區々ある一定仕らず仍て彦迎をも進せず越中越後こそ
 鎌倉此下知よは隨へ出羽へ入玉は何故國人等も送せては彦入いはぬぞ急ぎ御迎の兵を進せん
 と嫡子和泉の冠者を呼て汝判官殿此は迎も參と指揮しければ泰衡承て伊勢龜井を俱も遣兵百
 五十騎よて栗原寺へ參候と判官秀衡が昔日に變ざる恫情を感悦し玉ひ泰衡を案内者よて平泉へ
 御入ある秀衡吾館へは請じ奉らず月見殿とて平素には人を入ざる莊麗此別莊へ入奉る判官御欣
 喜難ならず秀衡も對面せん事を乞たまへば即尅衣紋を正し月見殿へ參候し御前よ拜伏す判官
 急も坐を立て御側の席よ請給じひ一別以來の疎遠を謝給ひ扱仰けるは吾往年金商客吉次等は
 防引せられ常館へ來じよ身不肖の義經を人かまじし朝夕の愛憐應實お謝するよ詞なむ然も

れ義を泰山の重よ比し命を毫毛よりと輕んじと敵徒退散の謀と廻せしかば天運も合て木曾平
 家剛政死たごを解て一擧に敵徒を斬靡三種此神寶を還幸なし奉り天下泰平の創業を開しよ
 豈計ん梶原北條等が讒言此爲よ鎌倉にだも入られず遂も親兄の不興を蒙り朝敵此臭名を稱られ
 宇宙廣しと雖も一身を置所な疾よも自害すべき身なれども臣下の忠言亦辭に忍ず公よ對面
 すべき面目のあらざれども耻辱を忍て當館を憑下れり何卒昔日の憤を弄る孤獨の義經を憐み
 給へと涕泣して曰われば秀衡を不覺の涙をかきはらひ昔日老臣が愚見を以一度風諫の奉り
 志うご君々英才中々當國も整し給ふべき器に在ざる事よく承知仕れりよ々々秀衡を人かまじ
 思召遣々御戦の中を凌て御下向まじませり今は枕を泰山の安きお置給へ御先祖八幡殿より當
 國の守護も補せられ鎮守府將軍の太任を蒙り奉る累代の舊恩何の時報じ奉るべき某斯て侯上
 の頭て讒者の旨を糺し先功の譽を現し奉り御兄弟の御和順を計ひ奉ん若事成ずしと鎌倉より征
 兵を差向らるとも與羽兩國の勢を以て念種白河兩關を固め君采配を揮給はし譬は日本國中此勢
 も殊域絶嶋蠻夷の兵を合して一度に押來とこそも何程此事か候べき朽たるを碎き枯たるを拉が
 るどくいはん微も御意を勞し玉ふ事勿れと昔よ變らず世も頼母しく申されければ判官其厚志を
 深く謝し玉ひ酒宴を促して四國西國の軍物語或は此度路次の危急辨慶が頓智働きなんどを彦
 隨有夜もいたく更しよは秀衡は彦腹申上て平泉へぞ販られける斯て秀衡の計ひときて名馬百匹

甲冑百領征篋五十串弓五十張太刀長刀よいたるまで多分參せ侍領の國中よても勝て好田畑
三千八百町有郡を五郡迄附屬し平り十余人の輩へも勝たる庄園を配分し折々の何方へも出て
懸玉へとて骨強き馬二匹宛馬具を揃て與へ將與羽兩國の大小名に命じて日々善美を盡して獲
應させ其後侍館を造營し奉んとして地形を點檢し平泉の城より西ふ當て要害よき切所を築き
將官を入參せける 抑此は館此爲躰前より衣川此急流を帶たれば不盡の長江とも謂べく東は秀衡
が平泉の城に續き西の洞空が窟ども鳥も翔り難き險峻の山なれば恰も滑函の固の如し噫呼人間
此盛衰程定なきのあらじ昨日迄は空山伏と成を賤き監卒松人ふも手を摺給ひしと今日は忽ち與
羽三州の大將軍と仰るれ主ひ榮花此春一時來りて多年此愁眉を開給ふ程は國人高館殿と尊敬
して 願は草木もなかりけり

○辨慶衣川に敵を欺く條

我備前平四郎成春の海尊と一處に切て出國衛が手へ打て懸り八方へ駈散し弓手馬手に強廻り兵
士七人を打取二三十騎に手を負せしが其身金鉄に有ざれば今い是迄なりと刀を抜て口に啣へ馬
より落切鋒頭後に懸し死したりける此際に海尊の敵中を切抜高館の脇に潜と隠れ夫より龜鶴君
を伴以行方知らせ失にける懸り寄手の大軍之聲を揚げ驚破落城なり押入て身捕せよと我先にと

一の城戸へ乱れ入けるに炎と益々強く黒煙り洞窟渡り二の城戸を見るに六尺有餘の木の武者
皮緋の鎧に孫鳥帽子の鍔付たるを著し大長刀を突橋の中央に仁王立に突立居たり寄手の驚破弁
慶和尚なり近付て怪我とるなど只遠矢にて散々に射る程に辨慶が鎧に立矢の篋毛の如くなれ共
全躰少しも動かさず悠然として立ちたりければ寄手舌を巻て其勇氣と感じける其内に餘煙四方に吹
懸一面より火煙と成橋の中央に立たる弁慶が姿より火移り暫時燃て後川中へ落たりける是と後世弁
慶が衣川の立往生と言傳へて三歳の小兒も能知る處なれども實に辨慶騎人形に日頃着せし鎧を
若せ太刀を指大長刀を杖に突せ橋の中央より立せ置火の手懸り敵乱入するも橋の上に辨慶突立居
るを見れば敵兵猶豫せん其内に焼落辨慶死せしと披露せんと思ひ斯と計ひしなり本吉冠者高衡
が郎等より安藤五郎と云者あり火の手懸りし後郎手を持って乱入し爰彼處探し見るに義經北の方若
若を始めとして兼房重家成春行信其外郎等近士と覺しき死體出たれども皆々焼爛て分明ならず
熱れ共四方遁るゝ道なければ必定判官殿滅亡なりと勇み悦び勝鬨を作りて引上中村常陸介景宗
宇都宮彌三郎等以下此檢使に戰の標と演進し勝軍なりとすければ檢使と其功を厚く賞せられ鎌
倉へ歸られける期て本吉冠者高衡の西城戸御館の名代として焼爛し首を都合三級酒に浸しく
郎等に持せ六月九日鎌倉入源二位殿より奉つりしかば頼朝卿喜悅淺からせ彼の首を賞檢せんと

宣ふを北條時政是を止め奉つり御名代として和田義盛腰越に實檢しけるに梶原平三も同じく
 來りしが此首甚だ怪しと云は和田否相違有べからずとて此首を埋めて神に崇めける今藤澤の白
 旗大明神是なりとど既に首實檢も濟ければ本吉冠者下野國拜領の御朱印と給へらんと七月
 迄待けれども何の沙汰も無ゆ高橋大江廣元に就て直々申請歸らんと色々願ひしかば頼朝卿
 對面より大に怒らせ給ひ義經の汝が爲よ主人なる故召捕て出せしと申付しに恩賞を食らん
 が爲無体な攻燒打致し義經共恥と相知れざる燒首と持參して下野を賜へらんなど促催顔よそ
 奇怪なれ汝能忽一國への歸さじ云々重恩の主人を討し罪人あり國衡泰衡兄弟を呼寄詮議せん夫
 迄の人情に留め置べしとて主従三十人半へ押込られ其後奥州へ使と遣されて兄弟を召れけるに
 兄弟是を恐れてや來らざるゆを頼朝卿大に怒り給ひ鎌倉へ參候せざるを義經未だ存命よて兄弟
 謀反に極りたり迺文治五年八月十三日の軍勢を率ゐて鎌倉を御出馬有宇都宮へ着陣有し處常陸
 國の住人佐竹次郎上野國の住人新田大炊介安房國の住人里見冠者等大軍にて參陣し其勢雲霞の
 如くなり西城戸太郎は是を聞て叶ひじと思ひけん透電して黒澤尻の山へ逃登る國人共是を聞
 國衡の日頃百姓を虐げ殊に亡父君が遺命に背き衣川殿を討奉つる不忠不孝の惡人なりとて大勢
 徒黨して西城戸が潛み居る處へ押寄遂に國衡を打殺しけり泰衡も亦叶ひじと思ひ信田郡に伯母

主なる泰衡が寐首を搔切て逃亡しける是新田佐竹里見の面々乱入して追立しに因てなり又樋爪
 五郎の柳川五郎方よて切腹し既に奥羽兩州全之鎮定しければ頼朝卿の宇都宮より鎌倉指て歸り
 給ひける

○義經主従蝦夷渡海の事

并海軍都止まる事

扱も常陸坊海軍の高館を忍び出山伏と姿を變今年四歳に成給ふ若君と介抱して此處彼處徘徊し
 遂に常陸國に到り中村念西が家臣久澤九郎と云の兼々惡意なりし故尋ね行て爾々の由を云若君
 の御養育を頼とける久澤の名將の御公達故能忽よの仕ゆるまどと頼母し之受合隱匿進らせけ
 れば海軍今の心安しとて清心坊殘夢と改名し夫より道を替て松前に到りける久澤九郎の龜鶴君
 と文治五年の秋請取奉つりて建久三年迄養育し進らせ七才になり給ふ時主人中村常陸介に此事
 と包まば訴ふるに常陸介の七郎が眞實を感下吾幸ひ子無ければ養子になし進らせんと七郎より
 請取奉つりて養ひ進らするに年長給ふに隨ひ諸人よ勝れて發明にて在せば大に悦び是を中村右
 京允義宗と号しける然る伊達系圖の内に景宗の子義宗とあると比目よて又并進り

十三百

御曹子と唱ふるも是より起れりとぞ扱も又片岡八郎の高館を出北の方の御供し喘ぎく武藏國川越迄行しが其後義經の御許へ一向に沙汰し進らせねバ義經是と氣遣ひ給ひ今の蝦夷の初洞も御手に入松前庄司か許し居給ふ處は海尊遙々尋ね來り若君の事委細に申上ければ義經聞給ひて限なき悦べれ扱北の方片岡の如何せしぞと仰有けるに海尊仰にのいへども如何渡らせらるゝや一向に存トいのを飛脚にて尋ね奉つらんハ覺束なし某し参り候はんぞと又引返して奥州白河迄來り彼の白河の關を通りしと早晝過にて久原寺が原の松山を通りしハ最早七ツ下りの頃なり宿有バ泊り有ざれば野宿をべしと勞れし儘は海尊松の根方へ腰打懸て休息しける所に向ふの方より百姓四人棺桶を昇ぎ來りしが既に日暮し及びしかば此處に棺と下し穴を堀ながら口々ハ最愛や何れの人なるか此處にて死するも因果ならんと云乍ら理めか、り松の根に腰打懸し海尊を見く百姓共悦び寄來り幸ひの處へ御出家をさせり此亡者の回向を頼まらん布施物の是なる太刀を差上候と云ハ海尊心得候とて彼の穴の邊へ行て念頃ハ回向し太刀請取て邊し見るに白鞘巻よて見覺ぬのある太刀なりければ海尊驚いて早速桶を堀起し蓋と明て見るよ是ハ何に片岡八郎なれば南無三と仰天せしが心を鎮て懐ろを探り見るに川越太郎頼重と北の方どの御文二通あり北の方の御文にハ君よ別れ参せてより現の心になり明暮忘るゝ際なき邊に病の床へ臥しなんぞ

書たる哀れなる文章よて頼重が狀ハ爾々の文なり

北の方の建久三年三月廿一日死し給ふ法名の智光禮定尼と号しける

海尊見終りて潸然最早是よてハ御行衛と尋ね進らするよ及バすと涙ながらに片岡が死骸ハ元の如くに葬り夫より密に引返して松前に至りしハ恰も好義經蝦夷へ渡海し給ふ折柄なれば海尊義經の御前に跪つた有し事共恁々と申上けるに義經打涙くと給ひ片岡が忠死北の方が非業の最期を最惜まれ海尊が健足と賞せられ其日菅生文太郎松前庄司を案内者とし船四十艘ハ人数百八十人を遣へ給ひ兵糧荷物多と精海尊に水主を命せられ遙沖へと渡されける蝦夷渡海の從臣にハ武藏坊辨慶常陸坊海尊龜井六郎駿河次郎熊井太郎鷲尾三郎泉三郎同々小次郎赤井藤太黒井次郎御成喜三太松前庄司菅生文太郎等の面々にてぞ在ける

武藏坊辨慶一代記終

明治廿一年一月廿六日御
同 年一月二十日印
同 年二月十日發

行 行 屈

定價金六十錢

著 作 者

大坂府平民 藤谷虎三
東區内本町二丁目一番地

發 行 所

大坂府平民 岡本仙助
東區唐物町四丁目一番地

專 賣

大坂書林 業所
同 偉 業 所

同

大坂府平民 北島長吉
東區淡路町二丁目二十三番地

印 刷

廣 報 舍

